

台太郎遺跡

—「フローラルアベニュー向中野2丁目」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

2015. 9

徳清倉庫株式会社

盛岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は、岩手県盛岡市向中野二丁目6番2地内に所在する台太郎遺跡の発掘調査報告書である。
- 台太郎遺跡第80次調査にかかる野外調査は、平成25年7月22日から12月2日まで実施し、調査面積は1,155m²である。室内整理作業は平成25年12月3日から平成26年6月30日まで行った。
2. 本調査は、土地所有者である佐藤重昭氏（徳清倉庫株式会社 代表取締役社長）と盛岡市教育委員会との間に締結された協定書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が野外調査、出土資料整理及び報告書編集を実施した。本調査にかかる費用は、事業主体者である佐藤重昭氏から支出された。
3. 本書は遺構及び遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集は花井正香が担当し、神原雄一郎、佐々木紀子、千田和文、室野秀文、菊地幸裕、津嶋知弘、鈴木俊輝が協力した。
4. 遺構の平面位置は、日本測地系を用い、平面直角座標X系を座標変換した調査座標で表示した。

$$\begin{array}{lll} \text{調査座標原点} & X -35,500.000 & = R X \pm 0.000 \\ & Y +26,500.000 & = R Y \pm 0.000 \end{array}$$

5. 高さは標高値をそのまま使用している。
6. 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層記号は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』(2013 小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業編発行) を参考にした。
7. 遺構の名称及び記号は次のとおりである。また「豎穴建物跡」の名称については、「『豎穴建物跡』の名称について」(2010 文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編集) に載っている。

遺構	記号	遺構	記号
豎穴建物跡	R A	土坑	R D
建物跡	R B	溝跡	R G

8. 遺構番号は、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、「県埋文センター」という。）調査遺構番号との整合を図り、以下のとおりとした。

本調査精査遺構：3桁または4桁の遺跡内連続番号

（基本的に県埋文センター調査遺構番号に連続、一部欠番あり）

9. 使用した地図は国土交通省国土地理院発行の5万分の1「盛岡」「日詔」の地形図である。
10. 土器の区分は、縄文土器・須恵器・あかやき土器・土師器・かわらけに分類した。「あかやき土器」の名称は、ロクロ使用の酸化煙焼成土器（坏類、甕類）に使用し、ロクロ使用の内面黒色処理の坏類は「土師器」に分類した。
11. 出土遺物の実測は、神原雄一郎、佐々木紀子が行った。
12. 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。
13. 本調査の一部については、現地公開資料等により報告しているものがあるが、本書の記載内容をもって訂正する。

14. 調査体制 一平成 25・26 年度一

[調査主体] 盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一
教育部長 鷹觜 徹
教育次長 柴田 道明 (～平成 25 年度)
豊岡 勝敏 (平成 26 年度)

[調査総括] 歴史文化課 遺跡の学び館

課長兼館長 袖上 寛
主幹兼館長補佐 千田 和文 (～平成 25 年度)
館長補佐 北田 牧子 (平成 26 年度～)
副主幹 菊地 幸裕 (平成 26 年度～)

[調査]

文化財主査 室野 秀文
文化財主査 菊地 幸裕 (～平成 25 年度)
文化財主査 津嶋 知弘
文化財主査 神原 雄一郎 (平成 25 年度大船渡市～派遣) ※資料整理
文化財主任 花井 正香 (平成 26 年度大船渡市～派遣) ※調査・資料整理
文化財調査員 佐々木 紀子 (～平成 25 年度) ※資料整理
文化財調査員 鈴木 俊輝
文化財調査員 樋下 理沙 (平成 26 年度～)

[管理・学芸] 主査

田山 淳一 (～平成 26 年度)
主任 江本 敦史 (～平成 25 年度)
文化財主任 千田 和文 (再任用；平成 26 年度)
学芸調査員 山岸 佳澄
文化財調査員 木幡 里美
学芸調査員 山野 友海

[発掘調査・室内整理作業]

阿部正幸、阿部有子、天沼芳子、泉山紀代子、伊藤敬子、内山陽子、長内理恵、
及川京子、春日真恵、川村久美子、熊谷あさ子、小林勢子、小松愛子、佐々木紀子、
佐藤和子、佐藤公一、佐野光代、谷藤貴子、千葉智子、千葉留里子、狩田英治、
日野杉節子、藤原亮子、細田幸美、山田聖子

[御指導・御協力]

岩手県教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

佐藤重昭、徳清倉庫株式会社、株式会社北進測量設計

(五十音順、敬称略)

目 次

例 言
目 次
表 目 次
挿 図 目 次
写 真 図 版 目 次

I. 遺跡の環境	
1. 地理的環境 1
2. 歴史的環境 2
II. 調査内容	
1. これまでの調査 4
2. 調査経過 10
3. 遺跡の基本層序と遺構検出状況 10
4. 検出された遺構と遺物	
(1) 奈良時代の遺構・遺物 11
(2) 平安時代の遺構・遺物 14
(3) 古代以降の遺構・遺物 41
III. 調査のまとめ 53

表 目 次

第1表 台太郎遺跡調査成果一覧 9
第2表 出土遺物観察表 古代土器（1） 57
第3表 出土遺物観察表 古代土器（2） 58
第4表 出土遺物観察表 古代土器・縄文土器（3） 59
第5表 出土遺物観察表 土製品（1） 60
第6表 出土遺物観察表 土製品（2） 60
第7表 出土遺物観察表 石製品 60
第8表 出土遺物観察表 鉄製品 60
第9表 出土遺物観察表 磁器 60

挿 図 目 次

第 1 図 台太郎遺跡位置図 (1 : 100,000)	1
第 2 図 地形分類と周辺の遺跡分布	3
第 3 図 台太郎遺跡全体図 (1 : 2,000)	5
第 4 図 台太郎遺跡第 80 次調査全体図	7
第 5 図 台太郎遺跡第 80 次調査全体図 (溝跡、ピット)	8
第 6 図 R A671・672 壴穴建物跡	63
第 7 図 R A673 壴穴建物跡	64
第 8 図 R A674 壴穴建物跡	65
第 9 図 R A675 壴穴建物跡	66
第 10 図 R A676 壴穴建物跡	67
第 11 図 R A677 壴穴建物跡	68
第 12 図 R A678 壴穴建物跡	69
第 13 図 R A679・681 壴穴建物跡	70
第 14 図 R A680 壴穴建物跡	71
第 15 図 R A682・684・685 壴穴建物跡	72
第 16 図 R A683 壴穴建物跡	73
第 17・18 図 R A686 壴穴建物跡 (1)・(2)	74・75
第 19 図 R A687 壴穴建物跡	76
第 20 図 R A688 壴穴建物跡	77
第 21 図 R A689・691 壴穴建物跡	78
第 22 図 R A690 壴穴建物跡	79
第 23 図 R A692・693 壴穴建物跡	80
第 24 図 R A694 壴穴建物跡	81
第 25 図 R A695 壴穴建物跡	82
第 26 図 R A696 壴穴建物跡	83
第 27 図 R A697・698 壴穴建物跡	84
第 28 図 R A699 壴穴建物跡	85
第 29 図 R A700 壴穴建物跡 (I 期)	86
第 30 図 R A700 壴穴建物跡 (II 期)	87
第 31 図 R A701 壴穴建物跡	88
第 32 図 R B142 挖立柱建物跡, RD2186~2189 土坑	89
第 33 図 RD2190~2197 土坑	90
第 34 図 RD2198~2204・2211 土坑	91
第 35 図 RD2205~2210・2212 土坑	92

第36図	R G616・618・619溝跡	93
第37図	R G617溝跡	94
第38図	R G620～622溝跡	95
第39図	ピット土層断面	96
第40図	R A671～673竪穴建物跡出土土器	99
第41図	R A674・679竪穴建物跡出土遺物	100
第42図	R A675竪穴建物跡出土遺物	101
第43図	R A676竪穴建物跡出土土器	102
第44図	R A677竪穴建物跡出土土器	103
第45図	R A678竪穴建物跡出土土器	104
第46図	R A680～682竪穴建物跡出土土器	105
第47図	R A683・685竪穴建物跡出土土器	106
第48図	R A686竪穴建物跡出土土器	107
第49図	R A687・688竪穴建物跡出土遺物	108
第50図	R A690～694竪穴建物跡出土遺物	109
第51図	R A695～698竪穴建物跡出土土器	110
第52図	R A699・701竪穴建物跡出土土器	111
第53図	R A700竪穴建物跡出土遺物	112
第54図	R D2186・2187・2191・2212土坑, R G621溝跡, 遺構外出土遺物	113

写 真 図 版

- 第1図版 盛南開発地区航空写真
- 第2図版 第80次調査区南全景, 調査区北全景
- 第3図版 R A671～675・679竪穴建物跡全景, R A674竪穴建物跡貯藏穴遺物出土状況, R A675竪穴建物跡柱材検出状況
- 第4図版 R A676～678・680～683竪穴建物跡全景, R A678竪穴建物跡カマド全景
- 第5図版 R A684～691竪穴建物跡全景
- 第6図版 R A692～698竪穴建物跡全景, R A696竪穴建物跡床下ピット遺物出土状況
- 第7図版 R A699～701竪穴建物跡全景, R A700竪穴建物跡II期カマド全景, R B142掘立柱建物跡全景, RD2186～2188土坑全景
- 第8図版 RD2189～2196土坑全景
- 第9図版 RD2197～2204土坑全景
- 第10図版 RD2205～2212土坑全景
- 第11図版 R G616～622溝跡全景
- 第12図版 R A671～675・679竪穴建物跡出土土器・土製品, R A675竪穴建物跡出土土師器壺 墨書「木」, R A675竪穴建物跡ピット2出土柱材

- 第13図版 RA676～678・680～683 壁穴建物跡出土土器, RA676 壁穴建物跡出土土師器坏 刻書「+」
- 第14図版 RA686～688・690・692・694・695 壁穴建物跡出土土器, RA691 壁穴建物跡出土小刀
- 第15図版 RA673・696・697・699～701 壁穴建物跡出土土器, RA675・688・700 壁穴建物跡出土砥石, RD2186・2191 土坑出土土器, RG621溝跡出土土器
- 第16図版 RD2187 土坑出土土器, 土製品, RD2212 土坑出土磁器染付「別當塚」, 遺構外出土繩文土器, 調査風景, 盛岡市立向中野小学校見学会

《遺物の表現について》

(1) 土器

- a. 出土土器の区分は、繩文土器・須恵器・あかやき土器・土師器・かわらけに大別した。
- b. 繩文土器の拓本は1/2スケールとし、古代土器の実測図・拓本は1/3スケールとした。
- c. 挿図の土器配列については、器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
- d. 土師器の黒色処理されたものは、網目（スクリーントーン）で表現した。

(2) 土製品・石製品・鉄製品・磁器

- a. いずれも1/2スケールとし、場合によっては1/3スケールとしている。
- b. 握図の配列は出土した層位順とし、さらに器種ごとにまとめた。

(3) 握図中の記号・番号は遺物の出土位置及び出土層位を表している。

- (例) RA871 C層 → RA871 壁穴建物跡内埋土C層より出土
- (例) H2-T5 IV層
↓ ↓ ↓
※1 ※2 ※3

※1 調査座標原点R X±0 R Y±0を起点として、X・Y両軸を50m毎に区切る大グリッドを設定し、X軸線上を西から東へA・B・C…W・X・Y(原点から東から西への場合は-A・-B・-C…-W・-X・-Y), Y軸線上を北から南へ1・2・3…23・24・25(原点から南から北への場合は-1・-2・-3…-23・-24・-25)と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組合せを、大グリッドと呼称した(第3・4図)。

※2 大グリッドを2m毎に細分割し、小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって、大グリッド-小グリッドという組合せで、遺物の平面出土地点を2mごとに表示した。

※3 遺物の出土層位を表している。

《遺構の表現について》

遺構の挿図中、説明する当該遺構については、実線で表現した。なお説明遺構と切り合った遺構については一点鎖線で表現した。

I 遺跡の環境

1 地理的環境

遺跡の位置 台太郎遺跡は、盛岡市街地より南西約2kmの向中野地内に所在する（第1図）。かつては水田・畑・宅地などの農地が主体を占めていたが、近年は盛岡南新都市開発整備事業（以下、「盛南開発」という。）に係る土地区画整理事業のため、急速に宅地化が進められている。遺跡の範囲は東西約800m、南北約500mと推定され、標高は119～123mである。現況は宅地、学校及び商業地である（第3図）。

地形・地質 盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山（2,038m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地形・地質に大きく影響を及ぼしている。

零石川は奥羽山脈より東流し、その流れは烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦（市内上太田）で急激に狭められ、その狭窄部を抜けて北上川と合流する。零石川はこれまでに何度も流路を変えており、零石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。台太郎遺跡はその沖積段丘上に立地している（第2図）。

この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりでなく、微高地にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない零石川の下刻が周辺山地からもたらす砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。零石川の旧河道は幾筋も確認されており、大きなものは4条、そのほかにも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。それらに画された微高地に古代を中心とした遺跡が点在している。



第1図 台太郎遺跡位置図 (1:100,000)

2 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の立地する沖積段丘上では、縄文時代～古墳時代にかけての遺構・遺物の発見は少なく、遺跡のほとんどは7世紀中葉以降の集落遺跡といえる。

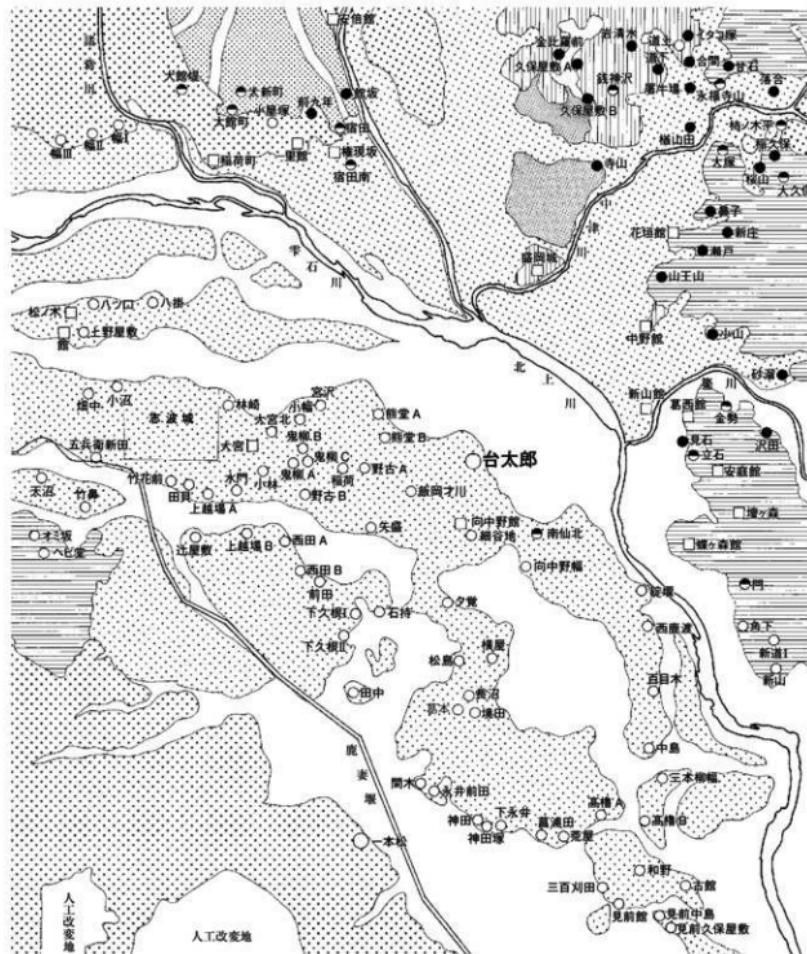
縄文～弥生 縄文・弥生時代の遺構・遺物は、本宮熊堂A遺跡、台太郎遺跡及び細谷地遺跡で縄文時代晩期を中心とする堅穴建物跡や遺物包含層が検出されている。その他の各遺跡からは遺物が散見する程度であり、主体的なものではない。また、詳細な時期を特定する要素は乏しいが、飯岡才川遺跡など多くの遺跡で縄文時代の陥し穴が確認されている。

古代 古墳時代末、7世紀中葉の遺構・遺物は、数は多くはないが台太郎遺跡などで確認されている。これ以降集落が継続的に営まれる。奈良時代、8世紀中葉以降堅穴建物跡を主体とした集落跡が増加する。この時期の集落は、大型堅穴建物跡を中心としてその周囲に小～中型の堅穴建物跡が數棟ずつまとまりをもって分布する傾向がある。

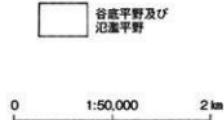
9世紀、平安時代初頭の延暦22年(803)には、本遺跡の西方約1.2kmに「志波城」(下太田方八丁他)が造営される。志波城は東北経営のために朝廷が造営した古代城柵であり、当時「蝦夷(エミシ)」と呼ばれていた人々の社会に大きな影響を与えたと考えられる。征夷大将軍であった坂上田村麻呂が朝廷の命を受け造営した志波城は、北側を流れる零石川の度重なる洪水の被害を受け、およそ10年で文室綿麻呂の建議により徳丹城(矢巾町西徳田)に移転したことが記録に見られる。その後、徳丹城は9世紀中葉までにはその機能を停止し、本地域も含む北上盆地一帯は、鎮守府胆沢城(奥州市水沢区九蔵田)による一城統治の体制となる。以降、9世紀中葉から本地域では堅穴建物跡を主体とした集落数が増加の一途をたどる。それともない堅穴建物跡の規模の大小差は縮小するようになり、重複が著しく見られるようになる傾向がある。の中でも、向中野館遺跡の低湿地から古代の祭祀に關係すると考えられる遺物の出土や、飯岡沢田遺跡・飯岡才川遺跡の円形周溝墓群や火葬骨蔵器など、本地域内の集落機能の分化もみられる。また、9世紀後葉から10世紀中葉にかけては、地区的拠点的な集落も姿を現すようになる。細谷地遺跡では、微高地の南斜面に沿うように2×2間の純柱の掘立柱建物跡が東西に並立し、倉庫群が存在したと考えられる。また大宮北遺跡や、志波城跡の北東に隣接する林崎遺跡で、規模の大きな官衙的な掘立柱建物を計画的に配置した集落も発見されており、在地有力者の拠点と考えられる。

中世 11～12世紀にかけての、様相ははつきりしないが、12世紀末～13世紀初頭頃のものと考えられるかわらけが、大宮遺跡の大溝跡から大量に出土している。13世紀後半には、台太郎遺跡で不整長方形の平面形となる居館が営まれ、地域を支配した豪族の存在が想定される。さらに同遺跡では、土坑墓群や宗教施設と考えられる遺構も検出されており、出土遺物から15世紀頃までの存続が考えられる。また向中野館遺跡や矢盛遺跡でも、堀跡が検出されており、出土遺物やその平面形から16世紀代を中心とする居館と考えられている。

近世 江戸時代には、零石川は現在の流路となり、旧河道の東側には奥州道中(街道)や仙北組丁が開かれ、本地域は水田地帯に農家が点在する農村地帯となる。各遺跡からは曲屋などの掘立柱建物跡や土坑墓、南仙北遺跡では道路跡などの近世の遺構が発見されており、この姿は盛南開発が行われる直前の本地域の様子と大きく違いが無いものと考えられる。



- 桐文時代
- 桐文時代～古代
- 古代
- 中世・近世



第2図 地形分類と周辺の遺跡分布

II 調査内容

1. これまでの調査

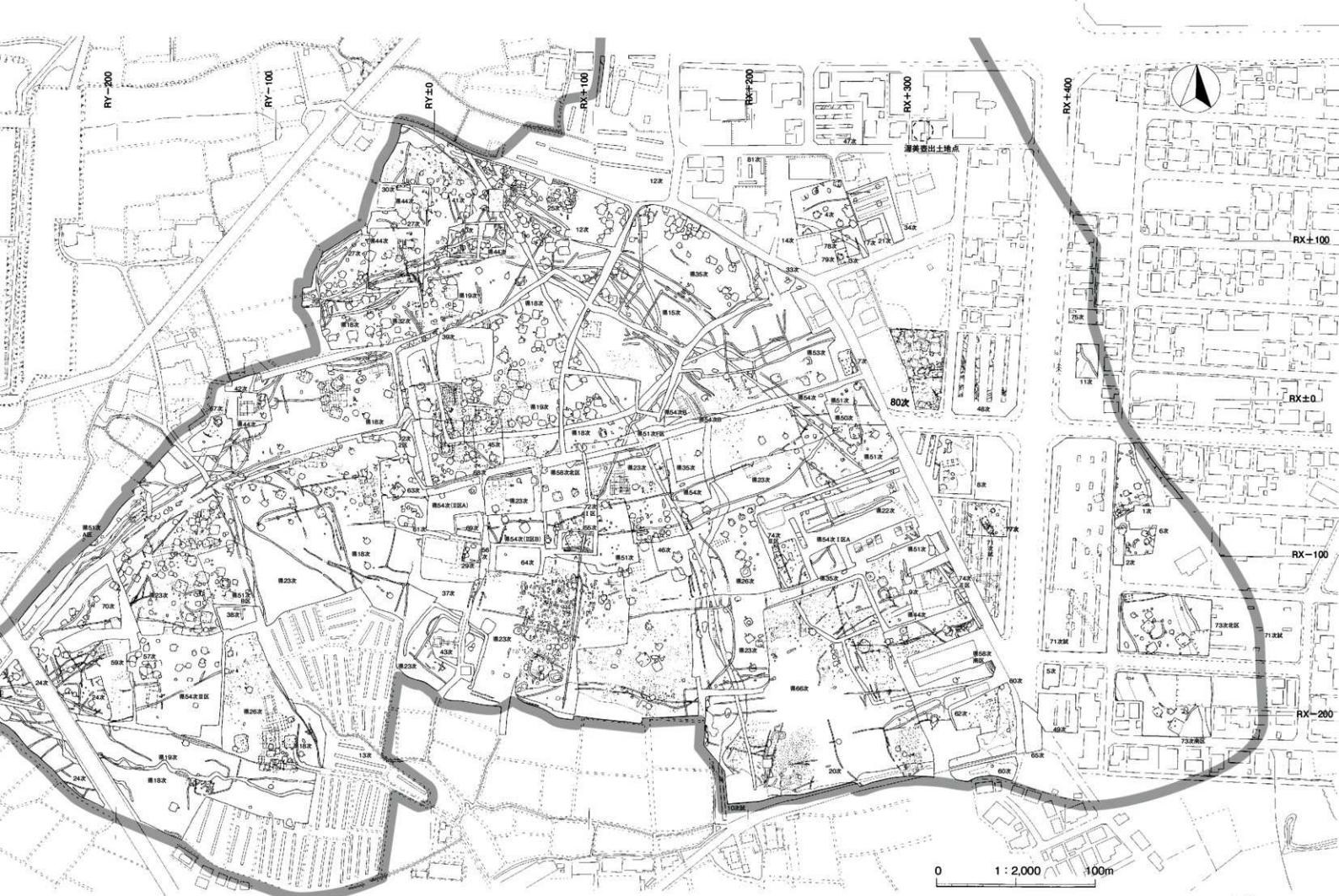
発見の経緯 台太郎遺跡は、昭和 60 年度の仙北西地区土地地区画整理事業時の工事現場にて、平安時代の堅穴建物跡が発見され周知された遺跡である。平成 5 年度からは、盛南開発に伴う発掘調査が主体を占め、以後平成 26 年度末で 81 次にわたって調査されている。

これまでの県埋文センター・市教委の発掘調査により、7～10 世紀の古代集落、中世の居館を中心とした集落跡や墓域、近世の村落跡などが確認されている。

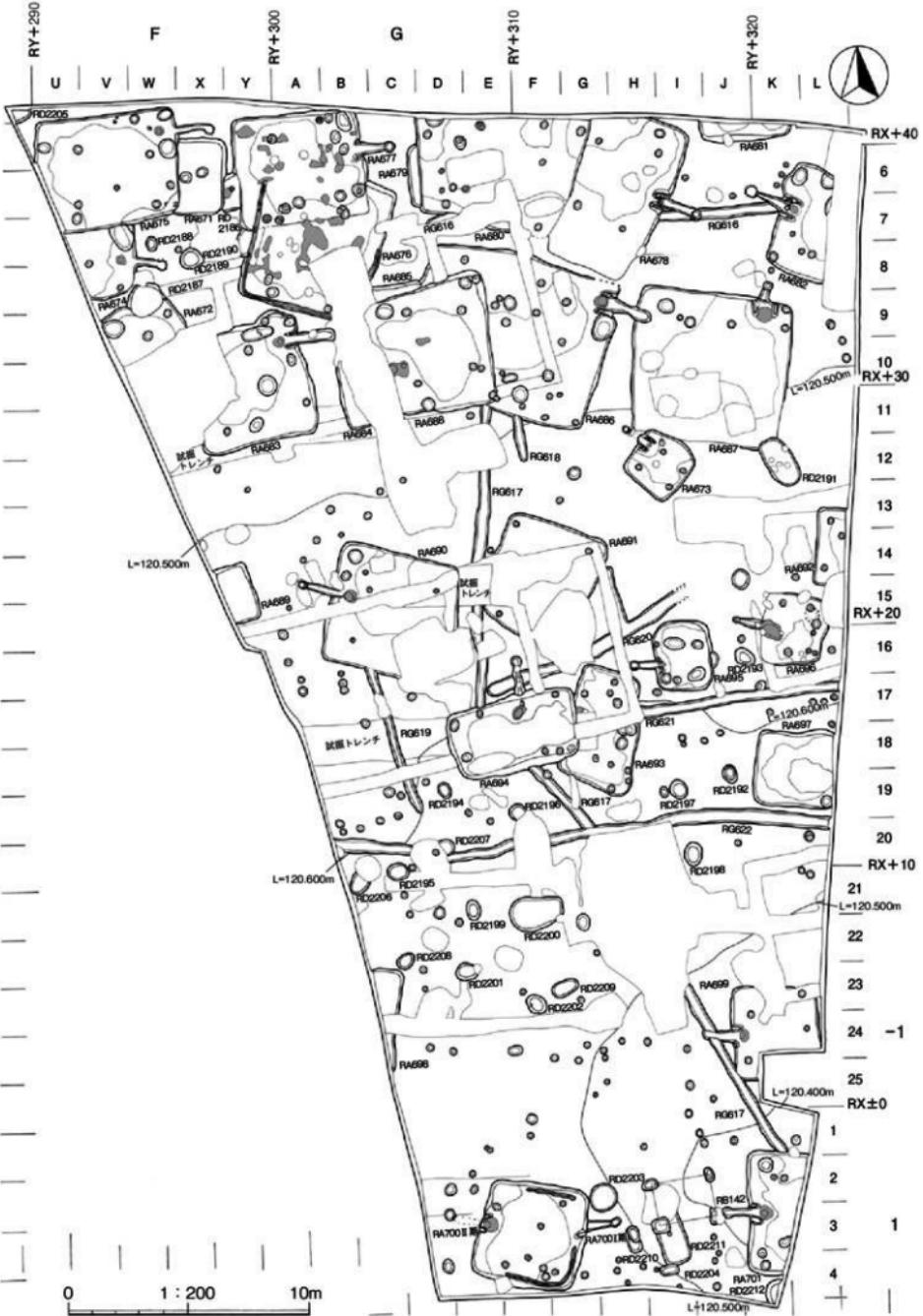
古代 古代（奈良・平安時代）の堅穴建物跡は平成 26 年度末で 700 棟以上を数え、そのほかに掘立柱建物跡（2×2 間柱）や大溝跡などが確認されており、当時の「志波（斯波）」地域最大の集落といえる。遺構の分布をみると、7 世紀末～8 世紀の堅穴建物跡は、いくつかの群をつくりながら南西部を除く遺跡全域に分布し、重複はみられない。それに対し、9～10 世紀の堅穴建物跡は、遺跡の西部と中央～北部の段丘縁辺部に分布が集中し、多くの重複がみられる。個別の堅穴建物跡の特徴をみると、7 世紀末～8 世紀は北西カマドが圧倒的で北東～南カマドもわずかに有るが、カマドの造り替えは少ない。9～10 世紀は北西～北カマド、南東カマドなどさまざままで、大型堅穴建物跡にカマドの造り替えが多い。

中世 中世（鎌倉～戦国時代）になると、12 世紀後半の渥美窯産の灰釉小型壺が遺跡北東より単独出土している。遺跡の立地状況と遺物の年代から推測すると、経筒外容器として経塼に納められていたものと考えられる。ほぼ同時期に、遺跡南東部では堀跡によって、方形に南北 2 つに区画して、その内側には掘立柱建物跡が並立する。堀跡からは奥州藤原氏と同時期の手捏ねのかわらけや渥美窯産の陶器が出土し、後述する居館に先行する施設と考えられる。13 世紀後半には、遺跡中央部に不整長方形プランの在地領主の居館が営まれ、周辺域にはこれに関連する区画溝や道路跡、掘立柱建物跡、堅穴跡等が分布している。また、遺跡南部には中世の土坑墓群、掘立柱建物跡、堅穴跡、さらに現在の「諏訪神社」の周囲を開むような堀跡や、社殿または仏堂らしい掘立柱建物跡も確認されている。これらは出土した陶磁器の年代から 15 世紀頃まで存続したと考えられる。居館北東側には幅 6 m 内外で並行する道路側溝状の溝跡があり、この溝の東側には並行して区画整理工事前の道路も存在していた。この道は、遺跡北東部の段丘崖や居館の堀、周辺の区画溝とも並行しており、居館や周辺村落と並存していた道路跡と考えられる。また、本遺跡の南方には、向中野館遺跡（北館、南館）が存在しているが、館跡を構成する曲輪が方形を基調としたプランであることや、北館付近では堀や土橋、小さな曲輪などの複雑な配置であることから、およそ 16 世紀を中心とした年代が考えられる。

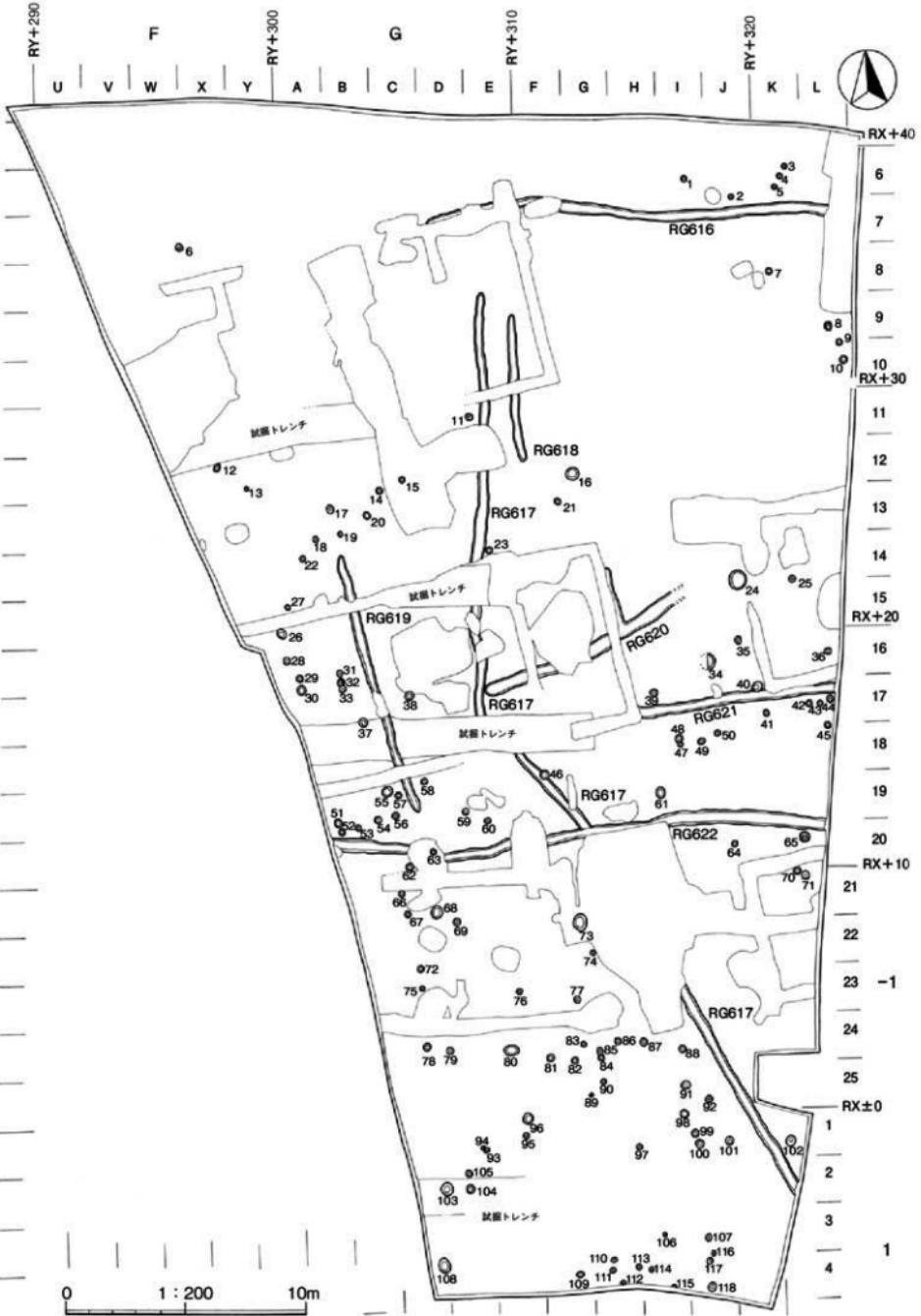
近世 近世（江戸時代）には零石川は現在の流れとなり、旧河道の東側には奥州道中（街道）が通じ、城下の玄関口にあたる仙北組丁が開かれる。これにより向中野はこの町の郊外となつた。この時代の遺構としては、掘立柱建物跡の曲屋跡や直屋跡などが遺跡内に点在するようになる。水田地帯の中に農家が点在する近世の「向中野村」の一部と考えられる。



第3図 台太郎遺跡全体図



第4図 台太郎遺跡第80次調査全体図



第5図 台太郎遺跡第80次調査全体図（溝跡、ピット）

次数	所在地	調査原因	面積(㎡)	期間	検出遺構・遺物	調査主体
1	向中野子台太郎7-1	土地区画整理	734	1985.5.6~6.25	平安堅穴建物跡3, 土坑2, 墓跡1	市教委
2	向中野子台太郎7-1	土地区画整理	515	1985.7.1~7.31	平安堅穴建物跡1, 駒穴跡1ほか	市教委
3	向中野子台太郎18-1	倉庫建設	125	1985.11.13~11.30	奈良堅穴建物跡1, 平安窓1	市教委
4	向中野子台太郎18-3	共同住宅等	1,130	1986.6.2~7.29	駒穴建物跡(奈良7, 平安5)ほか	市教委
5	向中野子台太郎11-7, 71-1	個人住宅建築	50	1989.5.10~5.11	平安堅穴建物跡1	市教委
6	向中野子台太郎7-1 5%	個人住宅建築	302	1990.5.7~5.26	平安堅穴建物跡1, 上坑1ほか	市教委
7	向中野子台中野36-3	個人住宅建築	138	1991.4.25~5.8	奈良堅穴建物跡1, 駒跡1	市教委
8	向中野子台太郎12-2 5%	事務所建設	830	1991.6.17~6.27	駒穴建物跡(奈良3, 平安2, 古代3)ほか	市教委
9	試掘 向中野子台中野40	小屋建築	50	1993.5.11	遺構・遺物なし	市教委
10	試掘 向中野子台中野地内	盛塗開発	1,200	1995.4.4~4.6	奈良堅穴建物跡3, 土坑2, 墓跡1ほか	市教委
11	試掘 向中野子台太郎9-3 外	食倉建設	320	1995.6.19~6.27	遺構・遺物なし	市教委
12	試掘 向中野子台八日市場地内	盛塗開発	5,174	1995.9.11~11.30	古代堅穴建物跡33, 土坑34, 濡跡38ほか	市教委
13	試掘 向中野子台中野1-15 外	盛塗開発	4,064	1996.10.14~10.25	平安堅穴建物跡1, 上坑1, 濡跡38ほか	市教委
14	試掘 向中野子台太郎18-1	下水管設置	23	1996.11.25~12.19	平安堅穴建物跡1, 平安廻1	市教委
15	向中野子台八日市場33-2 外	盛塗開発	12,906	1997.4.4~11.26	駒穴堅穴建物跡(奈良10, 平安50), 上坑43ほか	県理文
16	向中野子台中野36-1 外	盛塗開発	790	1997.8.1~8.29	奈良堅穴建物跡2, 駒跡2, 墓跡1ほか	県理文
17	試掘 向中野子台中野地内	下水管設置	10	1997.8.23	遺構・遺物なし	市教委
18	向中野子台中野26-6 外	盛塗開発	26,404	1998.4.15~11.20	駒穴建物跡(古墳~奈良42, 平安65)ほか	県理文
19	向中野子台中野16-6 外	盛塗開発	4,755	1998.7.2~8.31	奈良・平安堅穴建物跡20, 駒穴跡51ほか	県理文
20	向中野子台中野地内	盛塗開発	1,400	1998.9.17~12.21	古代堅穴建物跡1, 住跡1, 上坑12ほか	市教委
21	試掘 向中野子台太郎7-2	車庫建設	28	1998.9.25	遺構・遺物なし	市教委
22	向中野子台中野39-1 外	堅穴宿泊建設	2,500	1999.9.1~11.2	駒穴1 壁1, 奈良堅穴建物跡1ほか	県理文
23	向中野子台中野16-15	盛塗開発	27,800	1999.4.16~11.15	駒穴建物跡(古墳~奈良35, 平安27)ほか	県理文
24	向中野子台中野地内	盛塗開発	3,425	1999.5.6~7.16	駒穴六種物跡(奈良・平安20)ほか	市教委
25	向中野子台八日市場地内	盛塗開発	3,674	1999.7.7~12.15	駒穴六種物跡(奈良・平安73)ほか	市教委
26	向中野子台中野16-15 外	盛塗開発	13,662	2000.4.19~10.30	駒穴建物跡(古墳~奈良34, 平安34)ほか	県理文
27	向中野子台八日市場地内	盛塗開発	2,513	2000.6.12~11.14	奈良・平安堅穴建物跡1, 土坑23ほか	市教委
28	向中野子台八日市場地内	盛塗開発	460	2000.6.29~9.8	奈良堅穴建物跡(奈良・平安)ほか	市教委
29	向中野子台中野20-2	盛塗開発	125	2000.7.19~7.25	奈良堅穴建物跡1, 近世土壙3ほか	市教委
30	向中野子台八日市場43-1	盛塗開発	35	2000.7.25~7.31	平安堅穴跡1, ピット	市教委
31	向中野子台八日市場45-2	盛塗開発	128	2000.8.1~8.8	奈良・平安堅穴建物跡2, 駒跡2	市教委
32	向中野子台八日市場42 外	盛塗開発	1,030	2000.9.18~10.20	奈良・平安堅穴建物跡3, 墓跡1ほか	市教委
33	向中野子台八日市場50	盛塗開発	695	2000.9.22~10.13	古代堅穴建物跡3, 墓跡3	市教委
34	試掘 向中野子台工丁1 外	共同住宅建設	156	2000.11.20~11.22	古代堅穴建物跡3, 濡跡1	市教委
35	向中野子台中野37-3 外	盛塗開発	4,394	2001.4.17~8.2	駒穴堅穴建物跡(奈良5, 平安10), 土坑4ほか	県理文
36	向中野子台中野37-3 外	盛塗開発	290	2001.5.22~6.5	ピット	県理文
37	向中野子台中野20-1 外	盛塗開発	872	2001.5.28~6.22	奈良堅穴建物跡1, 土坑2ほか	市教委
38	向中野子台中野15-1, 3-4	盛塗開発	309	2001.6.1~6.15	遺構・遺物なし	市教委
39	向中野子台中野20-37-3 外	盛塗開発	1,302	2001.8.1~11.2	奈良・平安堅穴建物跡12, 土坑10ほか	市教委
40	向中野子台八日市場41-2	個人住宅建築	300	2001.8.1~9.19	平安堅穴建物跡3, 土坑4, 駒穴跡1ほか	市教委
41	向中野子台八日市場45-9	個人住宅建築	220	2001.8.2~9.19	駒穴建物跡(奈良4, 平安2), 土坑3ほか	市教委
42	向中野子台八日市場28-4	盛塗開発	123	2001.11.26~12.12	平安堅穴建物跡1, 土坑2, 濡跡3	市教委
43	向中野子台中野22 外	盛塗開発	112	2001.11.26~12.12	遺構・遺物なし	市教委
44	向中野子台八日市場41-1	盛塗開発	2,907	2002.4.9~8.5	駒穴建物跡(古墳~奈良1, 平安9)ほか	県理文
45	向中野子台中野22 外	盛塗開発	42	2002.4.22	遺構・遺物なし	市教委
46	向中野子台八日市場30-2 外	盛塗開発	1,618	2002.5.7~8.9	平安堅穴建物跡12, 駒穴4, 土坑36ほか	市教委
47	向中野子台中野35-2 外	盛塗開発	334	2002.10.11~11.12	奈良堅穴建物跡2	市教委
48	試掘 向中野子台工丁1 外	共同住宅建設	184	2002.11.6~12.16	遺構・遺物なし	市教委
49	向中野子台工丁5~8・9	店舗建設	326	2002.11.21~21.11.22	古代堅穴建物跡12, 土坑3, 濡跡6ほか	市教委
50	向中野子台中野37-5 外	共同住宅建設	48	2002.12.24~12.25	遺構・遺物なし	市教委
51	向中野子台八日市場8-4 外	盛塗開発	540	2003.6.2~11.10	古代堅穴2, 濡跡2, ピット	県理文
52	向中野子台八日市場7-1 外	国土建設	6,116	2003.4.11~11.10	駒穴建物跡(奈良4, 平安9)ほか	県理文
53	向中野子台中野37-3, 39 外	盛塗開発	593	2003.8.1~9.3	平安堅穴跡1, 濡跡8	県理文
54	向中野子台中野19 外	盛塗開発	240	2004.5.6~6.2	古代堅穴5, 土坑1	県理文
55	向中野子台中野35-26	個人住宅建築	5,052	2004.4.12~8.6	駒穴建物跡(古墳~奈良4, 平安9)ほか	県理文
56	向中野子台中野20-2 外	盛塗開発	203	2004.6.7~7.9	古墳~奈良堅穴建物跡1, 駒穴跡1ほか	市教委
57	向中野子台中野9 外	盛塗開発	50	2005.6.20~6.21	平安堅穴	市教委
58	向中野子台中野40-16 外	盛塗開発	1,047	2006.6.8~6.8	平安堅穴建物跡1, 土坑2, 濡跡3	市教委
59	向中野子台中野9 外	盛塗開発	3,945	2006.8.7~11.24	駒穴建物跡(奈良10, 平安9)ほか	県理文
60	向中野子台中野40-8 外	盛塗開発	1,830	2007.5.9~26	奈良堅穴建物跡2, 駒立堅穴建物跡1ほか	市教委
61	向中野子台中野17-14 外	盛塗開発	791	2007.8.1~9.6	土坑4, ピット	市教委
62	向中野子台中野40-7 外	盛塗開発	610	2007.10.26~11.16	奈良堅穴建物跡1, 土坑4, 濡跡1ほか	市教委
63	向中野子台中野17-1 外	盛塗開発	862	2008.6.18~7.9	土坑1, ピット	市教委
64	向中野子台中野21-2 外	盛塗開発	1,698	2008.7.3~10.31	古代堅穴建物跡2, 駒穴跡1, 土坑4ほか	市教委
65	向中野子台中野40-16 外	盛塗開発	621	2008.10.11~12.12	土坑1	市教委
66	向中野子台中野40-25 外	盛塗開発	330	2009.4.17	遺構・遺物なし	市教委
67	向中野子台八日市場23-1 外	盛塗開発	11,911	2009.6.1~11.27	古代堅穴建物跡5, 駒立堅穴建物跡2ほか	県理文
68	向中野子台八日市場30-1 外	盛塗開発	856	2009.5.7~7.28	古代堅穴建物跡2, 土坑2, 濡跡2	市教委
69	向中野子台中野18-4 外	盛塗開発	1,234	2009.7.1~11.6	古代堅穴建物跡1, 駒穴跡1, 土坑10ほか	市教委
70	向中野子台中野13-1 外	盛塗開発	1,914	2009.10.21~12.24	遺構・遺物なし	市教委
71	試掘 向中野子台工丁10・15 外	店舗建設等	1,341	2010.8.9~12.18	古代堅穴建物跡32, 駒穴跡1, 墓跡2	市教委
72	向中野子台中野35-31 外	盛塗開発	506	2010.10.21~12.17	奈良堅穴建物跡1, 駒穴跡2, 土坑5ほか	市教委
73	向中野子台工丁15, 16-12 外	宅地造成	587	2011.4.4~4.5	古代堅穴建物跡7, 濡跡7	市教委
74	向中野子台八日市場30-1 外	盛塗開発	4,360	2011.5.9~7.21	平安堅穴建物跡6, 駒穴跡7, 土坑21ほか	市教委
75	試掘 向中野子台工丁9~19	共同住宅建設	1,210	2012.11.22	遺構・遺物なし	市教委
76	試掘 向中野子台工丁6~2	宅地造成	177	2013.3.12~3.13	古代堅穴建物跡10, 駒穴跡1	市教委
77	向中野子台工丁7~2	店舗建設	516	2013.5.1~6.4	平安堅穴建物跡3, 駒立堅穴建物跡1ほか	市教委
78	向中野子台工丁3~11	個人住宅建築	553	2013.6.12~6.21, 7.4~7.24	平安堅穴1, 古代土坑1, 濡跡1	市教委
79	向中野子台工丁3~3	個人住宅建築	671	2013.6.12~6.21, 7.4~7.24	奈良堅穴建物跡1, 土坑5ほか	市教委
80	向中野子台工丁6~2	宅地造成	1,155	2013.7.22~12.2	駒穴建物跡(奈良4, 平安27), 土坑27ほか	市教委
81	試掘 向中野子台工丁3~8	貸賃住宅建築	631	2014.10.8	遺構・遺物なし	市教委

第1表 台太郎遺跡調査成果

2. 調査経過

試掘調査 平成 24 年 11 月、当市教育委員会において、当該地を含む向中野二丁目 6 番 2（開発面積約 1,628 m²）について土地所有者 佐藤重昭氏から宅地造成に関する事前協議が持たれた。この協議を受け、平成 25 年 3 月 12・13 日にかけて開発予定地内を試掘調査した結果（第 76 次調査）、予定地内から古代の遺構・遺物が多数検出されたことから工事着手前の緊急発掘調査が必要とされた。

発掘調査 当該地については、戸建住宅用地の宅地造成として、平成 25 年 6 月 19 日付けで発掘届が提出され、平成 25 年 7 月 16 日、土地所有者 佐藤重昭氏と当市教育委員会教育長との間で「埋蔵文化財に関する協定書」が締結された。遺跡の学び館が本調査を実施し、調査期間は平成 25 年 7 月 22 日～12 月 2 日、調査面積は 1,155 m² である。

成果公開 土地所有者 佐藤氏の協力を得て、平成 25 年 9 月 26 日には報道機関に公開し、10 月 23 日には盛岡市立向中野小学校 3 年生 22 名が総合学習の一環で見学に訪れた。

3. 遺跡の基本層位と遺構検出状況

台太郎遺跡第 80 次調査区は、遺跡中央部から東に向かって緩やかに傾斜する遺跡東部に位置し、第 8 次調査区の北と第 48 次調査の西に隣接する。調査地は調査開始まで月極駐車場として使われ、盛土されている。調査区内は中央部がやや高く、北方向と南東方向に緩やかに傾斜する地形で、検出面の標高値は 120.400～120.600 m 前後である。

基本層序 調査区内で確認された基本層序は以下の I ～IV 層に大別される。I 層は a～d 層に 4 細分され、I a～c 層は碎石、礫及び土による盛土で、層厚は一定しないが約 50～80 cm である。I d 層は畑または水田の耕作土、II 層は古代遺物を微量に含む暗褐色土の漸移層である。I d 層及び II 層は調査区内では部分的に確認された。III 層はやや粘性がある褐色～黄褐色シルト層（地山）で、その上面が遺構検出面である。これより下部は低位段丘を構成する砂疊層（IV 層）となり、確認された遺構の底面等で確認している。IV 層の下部は本調査で確認していないが、周辺の調査事例からシルト層と砂疊層の互層となることが確認されている。

検出状況 過去の農地開発時に削平されており、耕作土の I d 層及び II 層を除去した III 層上面で検出作業が行われた。検出された遺構は、奈良時代の竪穴建物跡 4 棟（R A 671～673・679）、土坑 2 基（R D 2186・2187）、平安時代の竪穴建物跡 27 棟（R A 674～678・680～701）、掘立柱建物跡 1 棟（R B 142）、土坑 5 基（R D 2188～2192）、古代以降の土坑 20 基（R D 2193～2212）、溝跡 7 条（R G 616～622）、ピット 118 口である（第 4・5 図）。

出土遺物の時代・時期は、平安時代（9 世紀中葉～10 世紀初頭）にかけての須恵器、土師器、あかやき土器が主体で、奈良時代（8 世紀後葉）の土師器も出土している。その他、古代の土製品、石製品、鉄製品、近世～近代にかけての陶磁器も出土している。遺物総数は収納コンテナ（54cm×34cm×15cm）26 箱分である。

4. 検出された遺構と遺物

(1) 奈良時代の遺構・遺物

R A 671 堅穴建物跡（第6図）

位 置	調査区北西 (F-1-X 6 区)	平 面 形	方形	主軸方向	-
規 模	西一東 2.10m以上, 南一北 3.20m	重複関係	R A675 (新), R D2186 (古)		
掘 込 面	削平	検 出 面	Ⅲ層上面		
埋 土	自然堆積でA～D層に大別され, B・D層はさらに2層に細分される。				
	A層-粒状のぶい黄褐色シルトを少量含む, 黒色土と暗褐色土の混合土。粒状の焼土を少量含む。				
	B層-黒褐色土を主体とする層で, B ₁ 層は粒状の黄褐色シルトを少量含み, B ₂ 層は塊状の褐色シルトを多く含む。				
	C層-黒色土と黒褐色土の混合土で, 粒状のぶい黄褐色シルトを多く含む。				
	D層-黄褐色シルトを主体とし, 粒～塊状の暗褐色土を含む。D ₁ 層は暗褐色土の割合が高い。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.36～0.38mで, 外傾して立ち上がる。				
床の状態	ほぼ平坦で, 構築土 (L層) にはぶい黄褐色シルトと明黄褐色シルトの混合土を主体とし, 塊状の黒褐色土を含む。層厚は0.08～0.10mである。				
カ マ ド	不明 (調査区外)				
柱 穴	ピットを床面上に2口検出している。柱痕跡は確認されず, 埋土はE層が暗褐色土に黄褐色シルトを含み, F層は暗褐色土を少量含むカーボン層である。各ピットの規模・深さは, P 1-径 0.46～0.50m, 深さ 0.20m, P 2-径 0.40～0.42m, 深さ 0.18mである。				
出土遺物 (第40図1～2)	1はクロコ未使用の小型の土師器壺で, 内外黒色処理とヘラミガキが施され, 平底丸底である。2は土師器甕で, 体部下半～底部にかけて欠損しており, 頸部と体部の境に段が確認される。内面に輪積痕, 外面に煤状炭化物が付着している。その他, 土師器球胴甕の破片が出土している。				
時 期	8世紀後葉				

R A 672 堅穴建物跡（第6図）

位 置	調査区北西 (F-1-W 9 区)	平 面 形	方形	主軸方向	-
規 模	北西一南東 2.20m以上, 南西一北東 3.18m以上 (調査区外)				
重複関係	R D2187 (新)	掘 込 面	削平	検 出 面	Ⅲ層上面
埋 土	自然堆積でA・B層に大別され, B層はさらに2層に細分される。				
	A層-黒褐色土と暗褐色土の混合土で, 少量のカーボン粒と粒状のぶい黄褐色シルトを微量含む。				
	B層-暗褐色土を主体とする層で, B ₁ 層は小塊状の黄褐色シルトを多量含み, B ₂ 層は粒～小塊状の明黄褐色シルトを少量含む。				

壁の状態 檜出面から床面までの深さは 0.14~0.20mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で、構築土（L層）はにぶい黄橙色シルトに粒～小塊状の黒褐色土を多く含む。層厚は 0.06~0.12mである。

カマド 不明（調査区外）

貯蔵穴 墓土は C・D層に大別され、C層はさらに 2 層に細分される。C層は黒褐色土に塊状の黄褐色シルトを含み、下層ほどシルトの割合が多い。D層は暗褐色土を主体ににぶい黄褐色シルト小塊状を含む。平面形は不整な梢円形で、規模は径 0.76~0.90m、床面からの深さ 0.28mである。

柱穴 ピットを床面上に 2 口検出している。明確な主柱穴は不明であるが、柱痕跡は P 2 で確認された。柱痕跡埋土は黒色土主体に小塊状の暗褐色土を少量含む。掘方埋土はにぶい黄褐色シルトを主体に黒褐色土粒を微量含む。各ピットの規模・深さは、P 1 - 径 0.30~0.38m、深さ 0.12m、P 2 - 径 0.28~0.30m、深さ 0.16mである。

出土遺物（第 40 図 3~4） 3・4 是土器器窯である。3 是頭部と体部の境にわずかに段が確認される。4 是頭部と体部の境に段がなく、体部から口縁部に向かってやや外反する器形で、内外間に輪積痕がある。その他、土器器窯の破片が少量出土している。

時期 8世紀後葉

R A 673 竪穴建物跡（第 7 図）

位置 調査区中央北（G-1-H12 区） **平面形** 方形 **主軸方向** N 50° W

規模 北西-南東 2.40m、南西-北東 2.44m **重複関係** R A 687 (新)

掘込面 削平 **検出面** III層上面

埋土 自然堆積で A～D層に大別され、C層はさらに 2 層に細分される。
A層- 黒褐色土と暗褐色土の混合土で、少量のカーボン粒と粒状のにぶい黄褐色シルトを微量含む。

B層- 暗褐色土を主体とし、粒～小塊状の黄褐色シルトとカーボン塊を多く含む。

C層- 黑褐色土を主体とする層で、C₁層は粒状の黄褐色シルトを含み、C₂層は塊状の黄褐色シルトを多量含む。

D層- 黒色土を主体とし、粒状の暗褐色土、粒～小塊状のカーボン及び焼土粒を含む。

壁の状態 檜出面から床面までの深さは 0.21~0.24mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で硬化面が広がる。構築土（L層）はにぶい黄橙色シルトを主体とし、粒～小塊状の黒褐色土を含む。層厚は 0.06~0.18mである。

カマド カマドは北西壁北寄りに位置し、煙道は割り貫きのトンネル状で天井部が残存する。煙道平面形は不整な構状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し、深くなっている。規模は北西壁から煙出しの先端までの長さ 0.92m、幅 0.22~0.24m、検出面からの深さ 0.16~0.34mである。カマドはにぶい黄褐色シルトに粒状の黒褐色～暗褐色土と礫を含む混合土（K_{1,2}層）で構築し、規模は南残存部が長さ 0.32m、幅 0.22m、高さ 0.18m、北残存部が長さ 0.52m、幅 0.20m、高さ 0.10mである。火床面（J₁層）は径 0.26~0.30m の不整梢円形で、熱浸透層は厚さ 0.08mである。カマド崩壊土（J_{1,2}層）は 8 層に細

分され、粒～塊状の褐色～黄褐色シルトを含む暗褐色土である。J_{4.5}層以外は焼土とカーボンを含み、とくにJ_{7.8}層は多量の焼土粒～塊とカーボン粒を含む。

柱穴 床面上に主柱穴P1～4を検出している。柱痕跡はP3・4で確認され、柱痕跡埋土は黒褐色土を主体に塊状の暗褐色土を多量含む。掘方埋土はにぶい黄褐色シルトを主体に粒～小塊状の黒褐色土を少量含み、堅く縮まっている。各ピットの規模・深さは、P1～径0.18m、深さ0.10m、P2～径0.18～0.22m、深さ0.12m、P3～径0.20～0.22m、深さ0.12m、P4～径0.20m、深さ0.10mである。

出土遺物（第40図5～8） 5は内面に黒色処理が施される土師器の坏で、体部下半に緩い段が確認され、丸底である。6は竪穴建物内の最終堆積層（A層）から出土した手捏ねのかわらけで、周辺からの流入と考えられる。7は土師器小型甕で、口縁部と体部の境に段が確認される。体部の内外面に煤状の炭化物が付着する。8は土師器甕で、口縁部と体部の境に段が確認され、底面には木葉痕が残る。

時期 8世紀中葉

R A 6 7 9 竪穴建物跡（第13図）

位置 調査区北（G-1～C6区） **平面形** 方形 **主軸方向** —

規模 北～南2.57m、西～東0.48m以上 **重複関係** R A 680（新）

掘込面 削平 **検出面** III層上面

埋土 自然堆積でA～C層に大別され、A層はさらに2層に細分される。

A層～暗褐色土を主体とする層で、A₁層は粉～粒状の褐色シルトを含み、A₂層は粒～小塊状の黄褐色シルトを多量含む。

B層～暗褐色土粒を僅かに含む黒色土。

C層～黒褐色土を主体とする層で、粒～塊状の黄褐色シルトを多量含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.13mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で、構築土（L層）は黄褐色シルトを主体とし、塊状の暗褐色～黒褐色土を多く含む。層厚は0.06mである。

出土遺物（第41図1～5） 1～3は土師器の坏で、内面に黒色処理が施される。1は体部下半に段があり、底部は丸底で底面に「+」と墨書きされる。2は体部下半に緩い稜を持つ丸底である。3は平底でヘラミガキが全面に施される。4・5は土師器甕で、口縁部と体部の境に段を持ち、体部内面に輪積痕が確認される。4は体部外面に炭化物が付着する。

時期 8世紀中葉

R D 2 1 8 6 土坑（第32図）

位置 調査区北西（F-1～Y6区） **平面形** 不整円形か

規模 長軸～上端1.50m、下端1.25m、残存部短軸～下端0.73m

重複関係 R A 671・677（新） **掘込面** 削平 **検出面** III層上面

埋土 自然堆積でA～C層に大別され、A層はさらに2層に細分される。

A層～黒褐色土を主体とする層で、A₁層は粉～粒状のにぶい黄褐色シルトを微量含み、

A₂層は微量のカーボン粒・焼土塊、粒～小塊状の黄褐色シルトを多く含む。

B層－黄褐色シルトを主体とし、粒状の黒色土を含む。

C層－黒色土を主体とし、粒状のにぶい黄褐色シルトを多量含む。

壁の状態 檜出面から底面までの深さは0.17～0.22mで、外傾して立ち上がる。

底の状態 ほぼ平坦であるが、中央に土師器甕を倒立の状態で埋設し、その南西には熱浸透層が確認される。掘方埋土（L層）は褐色～黄褐色シルトと暗褐色土の混合土である。甕内部の埋土（D層）は微量のにぶい黄褐色シルト粒を含む黒褐色土と暗褐色土の混合土で、土師器甕の体・底部破片を含む。熱浸透層は厚さ0.08mで、にぶい赤褐色を呈す。

出土遺物（第54図1） 1は土坑底面に倒立の状態で設置されていた土師器甕でほぼ完形である。頸部と体部の境に段を持ち、体部外面には煤状炭化物、内面には輪積痕が確認される。その他、土坑底面から内面に黒色処理を施す土師器坏の破片が出土している。

時期 8世紀

R D 2 1 8 7 土坑（第32図）

位置 調査区北西（F-1-W8区） **平面形** 不整梢円形
規模 長軸－上端1.72m、下端1.32m、短軸－上端1.53m、下端1.25m
重複関係 R A 672（古） **掘込面** 削平 **検出面** III層上面
埋土 自然堆積でA～D層に大別され、B層はさらに2層に細分される。
A層－黒褐色土を主体とし、粉～粒状の黄褐色シルトとカーボン・焼土粒を微量含む。
B層－暗褐色土を主体とする層で、B₁層は少量の礫と粉～塊状のにぶい黄褐色シルトを多量含み、B₂層は小塊状の黄褐色シルトを含む。
C層－塊状の黒褐色土とカーボン・焼土粒を多く含む、にぶい黄褐色シルト。
D層－褐色シルトを主体とし、粒～塊状の暗褐色土とカーボン粒を少量含む。

壁の状態 檜出面から底面までの深さは0.10～0.27mで、外傾して立ち上がる。

底の状態 中央がやや深くなる。

出土遺物（第54図2～4） 2・3は土師器甕である。2は口縁部～体部上半を欠損し、体部外面には煤状炭化物、内面には輪積痕が確認され、底面には木葉痕が残る。3は体部下半～底部を欠損し、頸部と体部の境に段を持つ。4は土製の紡錘車である。断面は台形で、中央部に穿孔が施される。その他、D層から内面黒色処理を施す土師器坏の破片が出土している。

時期 8世紀

（2） 平安時代の遺構・遺物

R A 6 7 4 竪穴建物跡（第8図）

位置 調査区北西（F-1-V7区） **平面形** 方形か **主軸方向** E 6° S
規模 東－西2.60m以上（調査区外）、北－南2.90m以上 **重複関係** R A 675（新）
掘込面 削平 **検出面** III層上面
埋土 自然堆積でA～C層に大別され、A層は3層、C層は2層に細分される。

A層—黒褐色土を主体とする層で、A_{1,3}層は粉～粒状の褐色シルトを微量、A₂層は塊状の黄褐色シルトを含む。A_{1,2}層はカーボン粒を少量含む。

B層—暗褐色土を主体とし、粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを多量、粒状のカーボンと焼土を少量含む。

C層—黄褐色土を主体とする層で、C₁層は粒状の黒褐色土を含み、C₂層は小塊状の黒褐色土を多量含む。

壁の状態 檜出面から床面までの深さは0.16～0.30mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で硬面が広がる。構築土（L層）は明黄褐色シルトを主体とし、粒～小塊状の黒褐色土を少量含む。層厚は0.06～0.28mである。

カマド カマドは東壁南寄りに位置し、基底部は残存せず、火床面のみ残る。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって傾斜し深くなり、一部オーバーハングする。規模は東壁から煙出しの先端までの長さ1.36m、幅0.26～0.38m、検出面からの深さ0.20～0.44mである。火床面（J_{9,10}層）は径0.32～0.36mの不整梢円形で、熱浸透層は厚さ0.10mである。その中央部は周辺と比較して、強い被熱を受けて明赤褐色を呈し堅く焼き締まっている。カマド崩壊土（J_{1,2}層）は8層に細分され、粒～小塊状のカーボン及び焼土を多く混入し、粒～塊状の褐色～にぶい黄褐色シルトを含む黒褐色土である。

貯蔵穴 カマド北に構築される。埋土はD～G層に大別され、G層はさらに2層に細分される。D層は暗褐色土に塊状の黄褐色シルトを含む。E層は焼土を多量に含む暗赤褐色土で、ミニチュア土器が出土している。F層はカーボンを多量に含む、暗褐色土と明黄褐色シルトの混合土で土錘が出土している。G層は塊状の明黄褐色シルトを含む暗褐色土で、G₂層の方が明黄褐色シルトの割合が多い。平面形は不整な梢円形で、規模は径0.86～1.16m、床面からの深さ0.23mである。

柱穴 床面上に主柱穴P1・2を検出している。柱痕跡はP1で確認され、柱痕跡埋土は黒褐色土を主体に塊状の暗褐色土を含む。掘方埋土はにぶい黄褐色シルトを主体に小塊状の黒褐色土を少量含む。各ピットの規模・深さは、P1—径0.22～0.24m、深さ0.18m、P2—径0.20m、深さ0.15mである。

出土遺物（第41図6～12） 6はあかやき土器の坏で、底部は回転糸切無調整である。7は内面に黒色処理が施される土師器坏で、底部は回転糸切無調整である。8は内外面に黒色処理とヘラミガキが施される土師器高台付坏で、底面に菊花文が確認される。9はあかやき土器の小型甕である。底部は回転糸切無調整で、内外面の全体に煤状炭化物が付着している。10・11はミニチュアの土製品で、それぞれ甕型、舟型である。12は土錘で、形状は杏仁型で穿孔される。その他、土師器甕の破片、少量の須恵器坏・甕・壺の破片が出土している。

時期 9世紀後葉

R A 6 7 5 穴建物跡（第9図）

位 置	調査区北西（F-1-V5区）	平 面 形	長方形	主軸方向	E 5° N
規 模	東-西 6.00m、北-南 4.62m	重複関係	R A 671（古）、R A 674（古）		
掘 込 面	削平	検 出 面	III層上面		

- 埋 土** A～E層に大別され、A・C・D層はさらに2層に細分される。A・B層は人為堆積、それ以外は自然堆積である。
- A層ーにぶい黄褐色シルト粒～塊状を含む、黒色土と黒褐色土の混合土。カーボン粒と焼土粒～塊状を多量に含む。A₂層の方がにぶい黄褐色シルトの割合が多い。
- B層ー暗褐色土を主体とし、粒状のにぶい黄褐色シルトを多量含む。カーボン粒～塊、焼土粒を含む。
- C層ー暗褐色土とにぶい黄褐色シルトの混合土で、塊状の黄褐色シルトを含む。C₂層は黄褐色シルトの割合が多い。カーボン粒、焼土粒を少量含む。
- D層ー暗褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを含む。下層は黄褐色シルトの割合が少なく、焼土を少量含む。
- E層ー黄褐色シルトを主体とし、塊状の黒褐色土を多く含む。
- 壁の状態** 檻出面から床面までの深さは0.38～0.40mで、外傾して立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦で硬化面が広がる。構築土（L層）は2層に細分される。L₁層は明黄褐色シルトを主体とし、粒～塊状の暗褐色土を含む。L₂層は黒褐色土と塊状の黄褐色シルトの混合土である。いずれもカーボン粒、焼土粒を含む。層厚は0.10～0.24mである。
- カマド** カマドは東壁北に位置し、基底部は残存せず、火床面のみ残る。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し深くなる。煙出しはやや南に構築され、煙道と煙出しの南側はオーバーハングしている。規模は東壁から煙出しの先端までの長さ1.50m、幅0.22～0.44m、検出面からの深さ0.34～0.40mである。火床面（J_{8.9}層）は径0.34～0.36mの不整梢円形で、熱浸透層は厚さ0.08mである。その中央部は周辺と比較して、強い被熱を受けて橙色を呈し堅く焼き締まっている。カマド崩壊土（J_{1.5}層）は7層に細分され、粒～塊状の褐色～にぶい黄褐色シルトを含む暗褐色土である。J_{1.5}層以外は焼土とカーボンを含み、とくにJ_{5.7}層は多量の焼土・カーボン粒を含む。
- 貯 藏 穴** カマド北及び南に2基構築される。貯藏穴1は東壁北隅にあり、埋土（F層）は焼土とカーボンを含む黒褐色土を主体とする。にぶい黄褐色シルトの含有率で3層に細分される。平面形は不整な梢円形で、規模は径0.46～0.56m、床面からの深さ0.20mである。貯藏穴2は東壁中央やや北寄りにあり、埋土はG・H層に大別され、各層はさらに2層に細分される。G層は粒～塊状の褐色～黄褐色シルトを含む黒褐色土で、G₁層の方が黄褐色シルトの含有率が高く、土師器破片を含む。H層は黄褐色シルトを主体とし、塊状の暗褐色土を含む。H₁層の方が暗褐色土の含有率が低く、カーボン粒を少量含む。平面形は不整な円形で、規模は径0.84m、床面からの深さ0.34mである。
- 柱 穴** 床面上に9口検出し、主柱穴はP1～4である。P5は浅いが梁を支える支柱の可能性がある。柱痕跡はP1・2・4で確認され、P2は柱材が残存する（写真：第3・12図版）。柱痕跡埋土は黒褐色土を主体に塊状の褐色シルトを微量含む。掘方埋土は褐色～黄褐色シルトを主体に小塊状の暗褐色土を少量含む。各ピットの規模・深さは、P1ー径0.28～0.32m、深さ0.20m、P2ー径0.26～0.30m、深さ0.19m、P3ー径0.28～0.30m、深さ0.16m、P4ー径0.32～0.37m、深さ0.36m、P5ー径0.20～0.24m、深さ0.14m、P6ー径0.36～0.40m、深さ0.23m、P7ー径0.40～0.54m、深さ0.20m、P8ー径0.40～0.46

m, 深さ 0.18m, P 9 - 径 0.28~0.30m, 深さ 0.57mである。

出土遺物 (第 42 図 1~16) 1 ~ 7 はあかやき土器の壺で、底部は回転糸切無調整である。8 ~ 12 は土師器の壺で、内面は黒色処理が施される。8 は底部を回転糸切後、ヘラケズリを施し、9 ~ 12 は回転糸切無調整である。10 は体部外面に墨書文字「木」が認められる。13 ~ 14 は内面に黒色処理が施される土師器高台付壺である。13 は底部～高台が残存し、リング状の高台部を底部に接着する。底面には菊花文の痕跡が認められる。14 は高台を欠損し、内面の一部に剥離、底面に菊花文が確認される。15 は須恵器壺で、口縁部～頸部を欠損し、底部に高台が付く。16 は溶岩質安山岩製の砥石である。磨面が 4 面あり、短冊形である。図示していないが、B・C 層から刀子の切先と刃部の小破片、C 層からあかやき土器高台付壺の破片、L₂ 層から小塊状の鉄滓 2 点が出土している。須恵器壺の破片が若干出土する。

時期 9 世紀後葉

R A 6 7 6 壊穴建物跡 (第 10 図)

位置 調査区北 (G-1 - A 6 区) **平面形** 方形 **主軸方向** —

規模 北西 - 南東 5.62m, 北東 - 南西 6.16m **重複関係** R A 677 (古), R D 2190 (古)

掘込面 削平 **検出面** III層上面 **カマド** 不明

埋土 A ~ C 層に大別され、A 層はさらに 3 層に細分される。

A 層 - 暗褐色土と黒褐色土の混合土で、にぶい黄褐色シルトを含む。A₁ 層は粉～粒状、

A₂ 層は塊状のにぶい黄褐色シルトを多く含む。カーボン粒・焼土粒を少量含む。

B 層 - 炭化した建築部材 (組材・壁板材) など、多量のカーボンを含む焼土層。焼失家屋の可能性がある。

C 層 - 暗褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色シルトを含む。部分的に被熱を受け、明赤褐色を呈する。カーボン粒、焼土粒を少量含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.31 ~ 0.34m で、外傾して立ち上がる。壁際には幅 0.06 ~ 0.16m、深さ 0.10 ~ 0.19m の周溝がめぐる。埋土 (D 層) は黒褐色土を主体とし、小塊状のにぶい黄褐色シルトを含む。底面には小規模なビットが確認され、壁面部材の据え方の可能性がある。

床の状態 ほぼ平坦で硬化面が広がる。床構築土は確認されず、掘り込んだ地山褐色～黄褐色シルト層 (III 層) を床面としている。また、焼失時の被熱を受けて、床面の一部が赤褐色～橙色を呈している (L 層)。

柱穴 床面上に 5 口検出し、主柱穴は P 1 ~ 4 である。柱痕跡は P 2 ~ 4 で確認される。柱痕跡埋土は黒褐色土を主体とし、粉～粒状のにぶい黄褐色シルトを少量含む。掘方埋土は褐色～黄褐色シルトを主体に粒～小塊状の暗褐色土を含む。各ビットの規模・深さは、P 1 - 径 0.38m、深さ 0.10m、P 2 - 径 0.28 ~ 0.34m、深さ 0.38m、P 3 - 径 0.40 ~ 0.47m、深さ 0.15m、P 4 - 径 0.40 ~ 0.48m、深さ 0.13m、P 5 - 径 0.28 ~ 0.45m、深さ 0.12m である。

出土遺物 (第 43 図 1~8) 1 ~ 2 はあかやき土器の壺である。2 は底部回転糸切無調整で、外面にタール状の付着物が認められる。3 ~ 5 は土師器壺で、いずれも内面が黒色処理される。

3・4は底部回転糸切後、底面にヘラナデが施される。4は底面に刻書「十」が確認される。5は底面が回転ヘラケズリである。6は土師器甕で体部下半～底部を欠損している。7・8は須恵器長頸瓶で、体部下半～底部を欠損する。7は外面に自然釉が確認され、8は内外面に煤状炭化物が付着する。図示していないが、床面近くのC層から須恵器壺・甕の破片が出土している。またC層から内面にタール状の付着物が観察されるあかやき土器壺の破片が出土し、2とともに灯明皿として使われた可能性がある。

時期 9世紀後葉

R A 6 7 7 穫穴建物跡（第11図）

位置 調査区北（F-1-V5区） 平面形 方形 主軸方向 E 4° N

規模 東一西 5.50m, 北一南 4.54m 重複関係 R A 676 (新), R D 2190 (古)

掘込面 削平 檜出面 III層上面

埋土 A～C層に大別され、A層は3層に、C層は2層に細分される。

A層～暗褐色土を主体とし、A₁層は粒状の黄褐色シルトを少量、A₂層は粒～塊状のにぶい黄褐色シルトを多量、A₃層は粒状の褐色シルトを微量含む。カーボン粒、焼土粒を少量含む。

B層～炭化した建築部材（組材・壁板材）など、多量のカーボンを含む焼土層。焼失家屋の可能性がある。

C層～暗褐色土を主体とし、粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを含む。C₁層はにぶい黄褐色シルトの含有率が高い。少量のカーボン粒、微量の焼土粒を含む。

壁の状態 檜出面から床面までの深さは0.25～0.31mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で硬面が広がる。構築土（M層）は2層に細分される。M₁層はにぶい黄褐色シルトを主体とし、粒状の暗褐色土を少量含む。M₂層は暗褐色土と黒褐色土の混合土で、塊状の黄褐色シルトを多く含む。層厚は0.04～0.30mである。また、焼失時の被熱を受けて、床面の一部がにぶい赤褐色を呈している（L層）。

カマド カマドは東壁やや北寄りに位置する。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し、深くなっている。規模は東壁から煙出しの先端までの長さ1.38m、幅0.28～0.42m、檜出面からの深さ0.24～0.53mである。カマドは黄褐色シルトに小塊状の黒褐色～暗褐色土の混合土（K_{1～3}層）で構築し、規模は北残存部が長さ0.26m、幅0.23m、高さ0.19m、南残存部が長さ0.33m、幅0.26m、高さ0.22mである。火床面（J_{13～14}層）は径0.37～0.41mの不整円形で、熱浸透層は厚さ0.05mである。その中央部は周辺と比較して、強い被熱を受けて明赤褐色～橙色を呈し堅く焼き締まっている。カマド崩壊土（J_{1～12}層）は12層に細分され、粒～塊状の褐色～黄褐色シルトを含む黒褐色～暗褐色土である。J₅層はカマド天井部が崩壊した層で、藁材のようなスサが混入している。崩壊土は煙出しから煙道、さらに火床面と床面の一部の範囲を覆っている。

貯蔵穴 東壁際に2基構築される。貯蔵穴1は東壁北隅にあり、埋土はB・C層である。平面形は不整な楕円形で、規模は径0.53～0.86m、床面からの深さ0.27mである。貯蔵穴2は東壁中央やや南寄りにあり、埋土はC₂層、にぶい黄褐色シルトを含む黒褐色土のD層に

大別される。平面形は不整な円形で、底面に小ビット状の窪みがある。規模は径 0.54m、床面からの深さ 0.25m である。

柱穴 床面上に 9 口検出し、主柱穴は P 1～4 である。柱痕跡は P 3・4 で確認され、柱痕跡埋土は黒褐色土を主体に小塊状の褐色シルトを少量含む。掘方埋土はにぶい黄褐色シルトを主体に小塊状の暗褐色土を含む。各ビットの規模・深さは、P 1 - 径 0.38～0.53m、深さ 0.20m、P 2 - 径 0.40～0.43m、深さ 0.15m、P 3 - 径 0.42～0.47m、深さ 0.37m、P 4 - 径 0.34～0.38m、深さ 0.55m、P 5 - 径 0.32～0.35m、深さ 0.16m、P 6 - 径 0.23～0.27m、深さ 0.17m、P 7 - 径 0.30～0.32m、深さ 0.20m、P 8 - 径 0.27～0.33m、深さ 0.14m、P 9 - 径 0.23～0.38m、深さ 0.14m である。

出土遺物 (第 44 図 1～9) 1～4 は土師器の坏で、内面に黒色処理とヘラミガキが施される。1 は胎土に雲母を含み、底面にヘラケズリが施される。2 は底部回転糸切無調整、3 は回転糸切後にヘラケズリを施し、胎土に少量の雲母を含む。4 は底部回転糸切後、底面をヘラナデで平滑に整えている。5・6 は土師器壺で、体部下半～底部が残存する。いずれも底面は砂底で、6 は体部下半が膨らみ、底部が張り出す器形である。7・8 は須恵器長頸瓶である。7 は外面に自然釉、内外面に焼成時の弾けが認められる。8 は口縁部を欠損し、外面に自然釉が付着する。9 は須恵器小型壺で、体部下半～底部を欠損する。その他、図示していないが、あかやき土器坏の破片、僅かであるが須恵器坏の破片が出土している。

時期 9 世紀後葉

R A 678 積穴建物跡 (第 12 図)

位置	調査区北 (G-1-H 6 区)	平面形	長方形	主軸方向	E 26° S
規模	南東～北西 4.00m 以上、南西～北東 6.78m	重複関係	R A 680 (新)、R G 616 (新)		
掘込面	削平	検出面	Ⅲ層上面		
埋土	自然堆積で A～C 層に大別され、A 層はさらに 2 層に細分される。				
	A 層 - 黒褐色土を主体とする層で、A ₁ 層は暗褐色土粒を少量含み、A ₂ 層は多量の暗褐色土粒～塊状を含む。				
	B 層 - 黑褐色土を主体とし、にぶい黄褐色～褐色シルトを小塊状に含む。多量のカーボン粒～塊、少量の焼土粒を含む。				
	C 層 - 一粒～塊状の黒褐色～暗褐色土を多く含む、にぶい黄褐色シルト。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは 0.18～0.20m で、外傾して立ち上がる。				
床の状態	ほぼ平坦で中央～北に硬化面が広がる。構築土 (L 層) は粒～塊状の褐色～黄褐色シルトを含む、黒褐色土と暗褐色土の混合土である。層厚は 0.13～0.20m である。				
カマド	カマドは南東壁中央に位置する。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し、深くなっている。規模は南東壁から煙出しの先端までの長さ 1.60m、幅 0.30～0.48m、検出面からの深さ 0.18～0.28m である。カマドはにぶい黄褐色シルトに粒～小塊状の黒褐色土を含む混合土 (K _{1,2} 層) で構築し、構築材として礫と土師器壺を使用している。規模は北残存部が長さ 0.68m、幅 0.36m、高さ 0.19m、南残存部が長さ 0.55m、幅 0.30m、高さ 0.20m である。火床面 (J ₁₁ 層) は径 0.16～0.30m の不整				

楕円形で、熱浸透層は厚さ 0.06m である。カマド支脚は火床面中央に円礫を据え、その北に土師器小型甕と甕底部を伏せて用いている。カマド崩壊土（J_{1~10} 層）は 10 層に細分され、粒～塊状の褐色～にぶい黄褐色シルトを含む暗褐色土である。J₉ 層はカマド天井部が崩壊した層である。J_{1~8} 層のいずれも焼土とカーボンを含み、とくに J_{2~3} 層は土師器甕破片を含む。なお、この崩壊土は煙出しから煙道、さらに火床面と床面の一部の範囲を覆っている。

柱穴 ピットを床面上に 5 口検出しており、主柱穴は P 1 ~ 4 である。柱痕跡は P 4 で確認され、柱痕跡埋土は黒色土を主体に粉～粒状の黄褐色シルトを少量含む。掘方埋土は黄褐色シルトを主体に塊状の黒褐色土を多く含み、堅く縮まっている。各ピットの規模・深さは、P 1 - 径 0.26m、深さ 0.17m、P 2 - 径 0.20 ~ 0.22m、深さ 0.08m、P 3 - 径 0.31m、深さ 0.10m、P 4 - 径 0.24m、深さ 0.12m、P 5 - 径 0.35 ~ 0.45m、深さ 0.19m である。

出土遺物（第 45 図 1~5） 1 は土師器小型甕、2 は土師器甕の底部で、カマドの支脚に転用されたものである。ともに底面は砂底である。3 ~ 5 は底部が張り出す土師器甕である。3 は外側の体部上半に煤状炭化物が付着し、体部内面には輪積痕が認められ、底面は砂底である。4 は内外面に炭化物が付着し、底面には木葉痕が残る。5 はカマド基底部の構築材として転用され、底面は砂底である。図示していないが、内外黒色処理の土師器壺破片、あかやき土器壺・甕破片、僅かに須恵器壺、刀子刃部の破片が出土している。

時期 9 世紀後葉

R A 6 8 0 積穴建物跡（第 14 図）

位置	調査区北 (G-1 ~ E 6 区)	平面形	不整形形	主軸方向	—
規模	北 - 南 4.75m 以上、東 - 西 7.16m	掘込面	削平	検出面	III 層上面
重複関係	R A 679・678 (古)、R G 616 (新)	カマド	不明		
埋土	A ~ D 層に大別され、B 層はさらに 2 層に細分される。				

A 層 - 黒色土を主体とし、粒～小塊状の明黄褐色シルトとカーボン粒を少量含む。
B₁ 層 - 暗褐色土と黒褐色土の混合土で、B₁ 層は粒状の褐色シルトを多量に含み、B₂ 層
は塊状の黄褐色シルトとカーボン粒を少量含む。
C 層 - 黒色土を主体とし、粒～塊状の褐色シルトを含む。
D 層 - 塊状のにぶい黄褐色シルトを多く含む、暗褐色土。

壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.31 ~ 0.34m で、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で硬化面が広がる。構築土 (L 層) は黄褐色シルトを主体とし、塊状の黒色～
黒褐色土を含む。層厚は 0.11 ~ 0.13m である。床面の南西で、長軸 0.35m、短軸 0.28m、
厚さ 0.08m の不整な楕円形を呈する熱浸透層 (J 層) を確認した。中央部は周辺と比較して、
強い被熱を受けて橙色を呈し、その直上から土師器壺や被熱した礫が出土している。

柱穴 ピットを床面上に 12 口検出し、明確な主柱穴は不明である。柱痕跡は P 5・11・12 で
確認される。P 1 の埋土 (E 層) から多量の焼土粒～小塊とともに被熱した獸骨の碎片が
多量に出土している。各ピットの規模・深さは、P 1 - 径 0.70m (調査区外)、深さ 0.05
m、P 2 - 径 0.34m、深さ 0.18m、P 3 - 径 0.20m、深さ 0.12m、P 4 - 径 0.18 ~ 0.20

m, 深さ 0.09m, P 5—径 0.31m, 深さ 0.23m, P 6—径 0.28~0.30m, 深さ 0.10m, P 7—径 0.26m, 深さ 0.09m, P 8—径 0.24m, 深さ 0.10m, P 9—径 0.30~0.36m, 深さ 0.11m, P 10—径 0.25~0.27m, 深さ 0.13m, P 11—径 0.32~0.37m, 深さ 0.39m, P 12—径 0.44~0.49m, 深さ 0.44mである。

出土遺物 (第 46 図 1~4) 1 はあかやき土器坏で、底部は回転糸切無調整、外面に煤状炭化物が付着する。2 は内面に黒色処理とヘラミガキが施される土器器坏で、底部は回転糸切後にヘラナデを施す。3 は土器器壺で、体部半ばで最大径を持ち、底部が張り出す器形である。底面にはヘラケズリが施されるが、木葉痕の一部が残存する。4 は須恵器大甕で体部～底部を欠損する。体部の外外面に平行タタキを施す。その他、あかやき土器壺の破片、須恵器坏・壺の各破片が少量出土している。

時期 9世紀後葉

R A 68 1 壺穴建物跡 (第 13 図)

位置	調査区北東 (G-1-J・K 5 区)		平面形	方形	主軸方向	—
規模	北一南 0.88m 以上 (調査区外), 西一東 3.84m		重複関係	なし		
掘込面	削平	検出面	III層上面	カマド	不明	
埋土	A ~ E 層に大別され, B・C 層はさらに 2 層に細分される。					
	A 層 - 少量の暗褐色土粒を含む黒褐色土で、粒状のカーボン・焼土を少量含む。					
	B 層 - 黒褐色土と暗褐色土の混合土で、小塊状の褐色シルトを多く含む。B ₁ 層の方が褐色シルトの含有率が高い。					
	C 層 - 暗褐色土を主体とする層で、C ₁ 層は粒状の褐色シルトを多量に含み、C ₂ 層は粉粒状のにぶい黄褐色シルトを少量含む。					
	D 層 - 黒褐色土を主体とし、小塊状の暗褐色土を微量含む。焼土粒を少量含む。					
	E 層 - にぶい黄褐色シルトを主体とし、粒へ小塊状の黒褐色土を少量含む。					

壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.40~0.47m で、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で硬化面が広がる。構築土 (L 層) は粒~小塊状の黒褐色土を僅かに含む、褐色シルトと黄褐色シルトの混合土である。層厚は 0.07~0.10m である。

出土遺物 (第 46 図 5・6) 5・6 は土器器坏で内面に黒色処理とヘラミガキが施される。5 は底部を欠損し、6 は底部回転糸切後にヘラケズリを施す。その他、土器器壺の破片、少量の須恵器坏・甕、あかやき土器坏の小破片が出土している。

時期 9世紀中葉～後葉

R A 68 2 壺穴建物跡 (第 15 図)

位置	調査区北東 (G-1-K・L 6 区)		平面形	方形	主軸方向	W24° N
規模	北西 - 北東 2.26m 以上, 南西 - 北東 4.62m		重複関係	RG 616 (新)		
掘込面	削平	検出面	III層上面			
埋土	自然堆積で A ~ C 層に大別され、B・C 層はさらに 2 層に細分される。					
	A 層 - 粉~粒状のにぶい黄褐色シルトを僅かに含む、黒色土と黒褐色土の混合土。カーボン					

ポン粒を微量含む。

B層-黒褐色土を主体とし、粒状の暗褐色土を含む。カーボン・焼土を少量含む。B₁層の方が暗褐色土の含有率が高い。

C層-暗褐色土を主体とする層で、C₁層は塊状にぶい黄褐色シルトを多量に含み、C₂層は黄褐色シルト粒を少量含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.16~0.22mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦であるが、北に向かって緩やかに傾斜する。東に硬化面が広がる。構築土（L層）は黄褐色シルトを主体とし、粒へ塊状の暗褐色土を含む。層厚は0.05mである。

カマド カマドは北西壁中央に位置する。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって細くなり、緩やかに傾斜し深くなる。煙道の一部と煙出しはオーバーハングしている。規模は北西壁から煙出しの先端までの長さ1.68m、幅0.14~0.40m、検出面からの深さ0.17~0.45mである。カマドは褐色シルトと黒褐色土の混合土（K層）で構築し、構築材として礫とあかやき土器甕の破片を使用している。規模は南残存部が長さ0.78m、幅0.35m、高さ0.04~0.11m、北残存部が長さ0.90m、幅0.44m、高さ0.10~0.14mである。火床面（J₁₀層）は径0.50~0.58mの不整楕円形で、熱浸透層は厚さ0.08mである。カマド支脚は火床面西にあかやき土器甕を伏せて用いている。カマド崩壊土（J_{1~9}層）は9層に細分され、カーボンと焼土を含む暗褐色土である。J₇層はカマド天井部が崩壊した層で、粒へ塊状の白色粘土を多量に含む。煙出し内のJ層には種が多数含まれる。

貯蔵穴 北隅に構築される。埋土はD・E層に大別され、E層はさらに2層に細分される。D層は塊状の暗褐色土を多く含む褐色シルトである。多量のカーボン粒へ塊を含む。E層は小塊状の黄褐色シルトを含む暗褐色土で、E₂層の方が黄褐色シルトの割合が多い。平面形は不整な楕円形で、規模は径0.51~0.68m、床面からの深さ0.18mである。

柱穴 ピットを床面上に6口検出しており、主柱穴はP1である。柱痕跡は確認できない。埋土はF・G層に大別される。F層は黒褐色土を主体に小塊状の暗褐色土を含む。G層は暗褐色土を主体にぶい黄褐色シルトを少量含む。各ピットの規模・深さは、P1-径0.26~0.29m、深さ0.14m、P2-径0.34~0.37m、深さ0.33m、P3-径0.20~0.22m、深さ0.12m、P4-径0.18m、深さ0.10m、P5-径0.22~0.82m以上、深さ0.08m、P6-径0.48~0.63m、深さ0.08mである。

出土遺物（第46図7~14） 7~10は須恵器環で、7・9・10は底部回転糸切無調整である。11は土師器環で、口縁部と内面にヘラミガキが施され、内面は黒色処理である。底部は回転糸切無調整である。12・13はあかやき土器甕である。12は体部下半～底部を欠損し、カマドの支脚として転用されたものである。口縁部の内面に炭化物が付着する。13は口縁部～体部上半が残存し、カマド基底部の構築材として使用されている。14は土師器甕で、口縁部～体部上半が残存するが、全体的に摩滅している。図示していないが、あかやき土器甕、須恵器大甕・壺の破片も出土している。

時期 9世紀中葉

R A 6 8 3 積穴建物跡（第16図）

位 置 調査区北西 (F-1-Y10区) **平 面 形** 方形 **主軸方向** E 7° N

規 模 北東-南西 4.88m, 北西-南東 4.95m **重複関係** なし

掘 込 面 削平 **検出面** Ⅲ層上面

埋 土 自然堆積でA～E層に大別され, A・B・D層はさらに2層に細分される。

A層-暗褐色土を主体とする層で, A₁層は粉～粒状の褐色シルトと粉状の灰白色火山灰を少量含み, A₂層は粒～小塊状の黄褐色シルトと微量の灰白色火山灰を含む。

B層-黒褐色土と暗褐色土の混合土で, カーボン・焼土粒を少量含む。B₁層は粒状のにぶい黄褐色シルトを少量に含み, B₂層は粒～塊状の黄褐色シルトを多量含む。

C層-暗褐色土を主体とし, 塊状の黄褐色シルトを多量含む。カーボン粒を多量含む。

D層-黒褐色土を主体とし, 粒～小塊状の黄褐色シルトを含む。少量のカーボン粒～小塊, 微量の焼土粒を含む。D₁層の方が黄褐色シルトの含有率が高い。

E層-暗褐色土を主体とし, 粒状のにぶい黄褐色シルトを多量含む。カーボン粒, 焼土粒～塊を多量含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.29～0.34mで, 外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で, 中央に硬化面が広がる。構築土 (L層) は塊状の暗褐色土を多量に含む, 黄褐色シルトと灰黄褐色シルトの混合土である。層厚は0.18～0.24mである。

カマド カマドは東壁北に位置する。煙道平面形は溝状で, 火床面から煙道に向かって一旦高くなり, 煙道から煙出しに向かって傾斜し深くなる。規模は北西壁から煙出しの先端までの長さ1.70m, 幅0.37～0.50m, 検出面からの深さ0.20～0.40mである。カマドは小塊状の暗褐色土を少量含む, にぶい褐色シルトと黄褐色シルトの混合土 (K層) で構築し, 北残存部では構築材として礎を使用している。規模は北残存部が長さ0.42m, 幅0.17m, 高さ0.10～0.17m, 南残存部が長さ0.52m, 幅0.22m, 高さ0.08～0.13mである。火床面 (J₁₁₋₁₂層) は径0.42～0.52mの不整橢円形で, 熱浸透層は厚さ0.09mである。その中央部は周辺と比較して, 強い被熱を受けて明赤褐色を呈し堅く焼き縮まっている。カマド崩壊土 (J₁₁₋₁₂層) は12層に細分され, 暗褐色土を主体とし, 黒褐色土, 褐色シルト及び焼土が混合する。J₁層はカマド天井部が崩壊した層で, 小塊状の白色～黄褐色粘土を多量に含む。J₃₋₄₋₇₋₁₂層はカーボン粒を多く含む。

貯藏穴 カマドの北側の北東隅に構築される。埋土 (F層) は塊状の黒褐色土を多く含むにぶい黄褐色シルトである。小量のカーボン粒, 焼土小塊を含む。平面形は不整な橢円形で, 規模は径0.31～0.44m, 床面からの深さ0.18mである。

柱 穴 ピットを床面上に8口検出しており, 主柱穴はP1～3である。柱痕跡は確認できない。埋土はG・H層に大別される。G層は黒褐色土を主体に小塊状の褐色シルトを僅かに含む。H層は暗褐色土を主体ににぶい褐色シルトを少量含む。各ピットの規模・深さは, P1-径0.29～0.43m, 深さ0.10m, P2-径0.27m, 深さ0.20m, P3-径0.24～0.28m, 深さ0.08m, P4-径0.52～1.34m, 深さ0.22m, P5-径0.27～0.30m, 深さ0.11m, P6-径0.35m, 深さ0.12m, P7-径0.75～0.78m, 深さ0.16m, P8-径0.47～0.63m, 深さ0.15mである。

出土遺物（第47図1~9） 1・2はあかやき土器の壺である。底部は回転系切無調整で、2は口縁部に歪みが生じている。3はあかやき土器高台付壺である。4~7は土師器壺である。4~6は内面が黒色処理され、内面全体にヘラミガキを施す。4は外面に墨書痕が認められ、底部回転系切無調整である。5は底面にヘラケズリを施し、外面に煤状炭化物が付着する。6は底部回転系切後、ヘラケズリによる再調整が認められる。7は内外の器面に黒色処理とヘラミガキが施される。8は底面に木葉痕が残る土師器壺で、頭部の短長化が認められ、口縁部が緩く外反する。9は須恵器壺である。図示していないが、B層からミニチュア土器の小破片、D₂層から楕型甌が出土している。

時期 9世紀後葉

R A 684 積穴建物跡（第15図）

位置	調査区中央北 (G-1-B 10・11区)	平面形	方形	主軸方向	—
規模	北西-南東 3.00m以上、南西-北東 0.52m以上	重複関係	なし		
掘込面	削平	検出面	Ⅲ層上面		
埋土	自然堆積でA~C層に大別され、A・B層はさらに2層に細分される。				
	A層-暗褐色土と黒褐色土の混合土で、A ₁ 層は粒状の黄褐色シルトと粉状の灰白色火山灰を微量含み、A ₂ 層は粒~小塊状の黄褐色シルトと小量の灰白色火山灰を含む。				
	B層-暗褐色土を主体とする層で、B ₁ 層は小塊状の褐色シルトを多量含み、B ₂ 層は粒状の褐色~黄褐色シルトを含む。				
	C層-黒色土を主体とする層で、小塊状の黄褐色~明黄褐色シルトを多量含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは 0.37mで、外傾して立ち上がる。				
床の状態	ほぼ平坦で、構築土（L層）にはぶい黄褐色~黄褐色シルトを主体とし、粒~塊状の黒褐色土を多く含む。層厚は 0.10mである。				
出土遺物	図示していないが、あかやき土器壺・甌、土師器壺・甌の破片が出土している。				
時期	9世紀後葉				

R A 685 積穴建物跡（第15図）

位置	調査区中央北 (G-1-C 8区)	平面形	方形か	主軸方向	—
規模	北西-南東 0.63m以上、南西-北東 2.00m以上	重複関係	R A 686・688 (新)		
掘込面	削平	検出面	Ⅲ層上面		
埋土	自然堆積でA~D層に大別され、A層はさらに2層に細分される。				
	A層-黒褐色土を主体とする層で、A ₁ 層は粉~粒状の褐色シルトを微量含み、A ₂ 層は粒~小塊状の黄褐色シルトを少量含む。				
	B層-小塊状のにぶい黄褐色シルトを多量に含む、暗褐色土と黒褐色土の混合土。焼土粒を少量含む。				
	C層-黒褐色土を主体とし、小塊状の暗褐色土を多量含む。カーボン粒を多く含む。				
	D層-暗褐色土主体に多量の褐色~にぶい黄褐色シルトを粒~塊状に含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは 0.21mで、外傾して立ち上がる。				

床の状態 ほぼ平坦で、構築土（L層）はにぶい黄褐色シルトを主体とし、粒～小塊状の暗褐色土を含む。層厚は0.15～0.24mである。

出土遺物（第47図10） 10はあかやき土器の小型甕である。体部下半～底部が残存し、底部は回転系切無調整である。その他、土師器甕の破片が少量出土している。

時期 9世紀

RA 68 6 積穴建物跡（第17・18図）

位置 調査区中央北（G-1～F 9区） **平面形** 長方形 **主軸方向** E 22° S

規模 南東一北西 8.32m, 南西一北東 6.46m **掘込面** 削平

検出面 III層上面 **重複関係** RA 685（古）、RA 687・688（新）、RG 618（新）

埋土 自然堆積でA～C層に大別され、A層はさらに2層に細分される。

A層—黒褐色土を主体とする層で、A₁層は粉～粒状のにぶい黄褐色シルトと焼土粒を微量含み、A₂層は粒～小塊状の黄褐色シルトを多量含む。

B層—粒状の明黄褐色シルトを含む、暗褐色土と黒褐色土の混合土。カーボン粒、焼土粒を少量含む。

C層—褐色シルトを主体とし、粒～塊状の黒褐色土を多く含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.16～0.20mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦であるが、南に緩やかに傾斜する。中央とカマド付近に硬化面が広がる。構築土（L層）は塊状の黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。層厚は0.06～0.12mである。

カマド カマドは北東隅の東壁に位置する。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し深くなる。規模は北西壁から煙出しの先端までの長さ1.20m、幅0.30～0.48m、検出面からの深さ0.16～0.26mである。カマドは褐色シルトに粒～小塊状の暗褐色土と礫の混合土（K_{1,2}層）で構築している。規模は北残存部が長さ0.69m、幅0.21m、高さ0.10m、南残存部が長さ0.80m、幅0.41m、高さ0.06～0.10mである。火床面（J₁₀₋₁₁層）は径0.55mの不整楕円形で、熱浸透層は厚さ0.14mである。その中央部は周辺と比較して、強い被熱を受けて明赤褐色～橙色を呈し堅く焼き縮まっている。カマド崩壊土（J_{1～9}層）は9層に細分され、黒褐色～暗褐色土を主体とし、褐色～黄褐色シルト及び焼土が混合する。J₁層はカマド天井部が崩壊した層で、粒～小塊状の白色粘土を多量に含む。J_{6～9}層はカーボン粒～小塊を多く含む。

貯藏穴 カマド南に隣接して構築される。埋土はD・E層に大別される。D層は粒状のにぶい黄褐色シルトを少量含む黒褐色土である。少量のカーボン・焼土粒を含む。E層は小塊状の褐色シルトを多く含む暗褐色土である。平面形は不整な楕円形で、規模は径0.86～1.06m、床面からの深さ0.15mである。

柱穴 ピットを床面上に20口検出しており、主柱穴はP 1～4である。柱痕跡はP 2・4・12で確認され、柱痕跡埋土（F層）は黒褐色土を主体に粉～粒状の褐色シルトを少量含む。掘方埋土（G層）は黄褐色シルトを主体に塊状の暗褐色～黒褐色土を多く含み、堅く縮まっている。各ピットの規模・深さは、P 1—径0.14～0.18m、深さ0.06m以上、P 2—径0.46m、深さ0.35m、P 3—径0.28～0.30m、深さ0.38m、P 4—径0.14m、深さ

0.26m, P 5 - 径 0.14~0.18m, 深さ 0.13m, P 6 - 径 0.22~0.26m, 深さ 0.10m, P 7 - 径 0.28~0.32m, 深さ 0.32m, P 8 - 径 0.20~0.22m, 深さ 0.29m, P 9 - 径 0.28~0.30m, 深さ 0.28m, P 10 - 径 0.19m, 深さ 0.12m, P 11 - 径 0.28~0.70m, 深さ 0.15m, P 12 - 径 0.20~0.22m, 深さ 0.68m, P 13 - 径 0.64~0.70m, 深さ 0.20m, P 14 - 径 0.18~0.23m, 深さ 0.12m, P 15 - 径 0.22~0.26m, 深さ 0.17m, P 16 - 径 0.24~0.26m, 深さ 0.24m, P 17 - 径 0.20m, 深さ 0.14m, P 18 - 径 0.23~0.26m, 深さ 0.12m, P 19 - 径 0.23~0.28m, 深さ 0.19m, P 20 - 径 0.26~0.30m, 深さ 0.09m である。

出土遺物 (第 48 図 1~7) 1~4 は須恵器坏である。1~3 の底部切り離しは回転糸切無調整, 4 は回転糸切後にヘラナデによる再調整を施す。1・3 は重ね焼きの痕跡が観察される。5・6 は内面に黒色処理とヘラミガキが施される土師器坏で、底部は回転糸切無調整である。5 は底面に刻書「+」が観察される。7 は土師器壺で、焼成前に粘土を貼り付けて補修した痕跡が体部内面に確認される。その他、あかやき土器坏・壺、砂底の土師器壺、少量であるが須恵器大壺・壺、刀子の破片が出土している。

時 期 9 世紀後葉

R A 6 8 7 穴室建物跡 (第 19 図)

位 置 調査区北東 (G-1-I・J 10 区) **平 面 形** 方形 **主軸方向** N11° E

規 模 北東一南西 6.08m, 北西一南東 6.58m **掘 込 面** 削平

検 出 面 III層上面 **重複関係** R A 673・686 (古), R D 2191 (新)

埋 土 自然堆積地 A ~ C 層に大別され、A 層はさらに 2 層に細分される。

A 層 - 黒褐色土を主体とする層で、A₁ 層は微量の褐色シルト粉～粒状と焼土粒を少量含み、A₂ 層は粒～小塊状の褐色～黄褐色シルトを多量含む。

B 層 - 黒色土を主体とし、粒～塊状の暗褐色土を含む。

C 層 - 粒～小塊状の黒褐色土を多く含む、にぶい黄褐色シルト。

壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.10~0.11m で、緩やかに外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦であるが、南東に緩やかに傾斜する。中央から北東に硬化面が広がる。構築土 (L 層) は小塊状の黒褐色土を多く含む、褐色シルトと黄褐色シルトの混合土である。層厚は 0.10~0.17m である。

カマド 北壁の北東隅に位置する。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙道に向かって傾斜し、煙出しでは更に深くなる。規模は北壁から煙出しの先端までの長さ 0.84m、幅 0.28~0.34m、検出面からの深さ 0.12~0.25m である。カマドは褐色シルト、粒～小塊状の黒褐色土及び塊状の灰白色～灰黄色粘土の混合土 (K₁ 層) で構築する。カマド西残存部は繭を構築材として使用し、掘方埋土 (K₂ 層) はにぶい黄褐色シルトに少量の黒褐色土を含む。規模は西残存部が長さ 0.68m、幅 0.30m、高さ 0.04~0.07m、東残存部が長さ 0.59m、幅 0.25m、高さ 0.05~0.09m である。火床面 (J₁ 層) は径 0.60~0.62m の不整円形で、熱浸透層は厚さ 0.08m である。カマド崩壊土 (J_{2~7} 層) は 7 層に細分され、粒～塊状の褐色～黄褐色シルトと焼土粒を含む暗褐色土である。J₈ 層はカマド天井部が崩壊した層で、粒～小塊状の白色粘土を含む。J_{9~11} 層はカーボン粒、J₁₂ 層は繭を含む。

貯藏穴 北西隅近くに構築される。埋土はD・E層に大別され、E層は2層に細分される。D層は黒褐色土と褐色土の混合土で、粒状のにぶい黄褐色シルトとカーボン・焼土粒を少量含む。E層は暗褐色土を主体とする層で、E₁層は多量の明黄褐色シルト塊とカーボン、焼土粒を微量含み、E₂層は粒状の褐色シルトを少量含む。平面形は不整な円形で、規模は径0.54～0.60m、床面からの深さ0.20mである。

柱穴 ピットを床面上に7口検出しており、主柱穴はP1～4である。柱痕跡はP3で確認され、柱痕跡埋土（G層）は黒褐色土を主体に粒状の暗褐色土を微量含む。掘方埋土（H層）にはにぶい黄褐色シルトを主体に小塊状の暗褐色土を含み、堅く締まっている。各ピットの規模・深さは、P1－径0.22～0.24m、深さ0.12m、P2－径0.24～0.28m、深さ0.11m、P3－径0.24～0.30m、深さ0.22m、P4－径0.23m、深さ0.12m、P5－径0.40～0.42m、深さ0.24m、P6－径0.32～0.38m、深さ0.11m、P7－径0.28～0.31m、深さ0.10mである。

出土遺物 (第49図1～8) 1は須恵器坏である。重ね焼き痕が観察され、底部の切り離しは回転糸切無調整である。2～5はあかやき土器坏で、底部回転糸切無調整である。3は内面に煤状炭化物が認められる。6はあかやき土器小型甕、7はあかやき土器甕である。いずれも口縁部～体部上半のみ残存する。8は土師器甕で、体部下半～底部を欠損する。図示していないが、内面黒色処理の土師器坏、須恵器大甕・壺の破片が出土している。

時期 9世紀後葉

R A 688 壇穴建物跡 (第20図)

位置 調査区中央北 (G-1-D 9・10区) **平面形** 方形 **主軸方向** —

規模 南西一北東4.92m、南東一北西5.38m **掘込面** 削平

検出面 III層上面 **重複関係** R A 685・686 (古)、R G 617 (新)

埋土 自然堆積でA～E層に大別され、A・B・D層はさらに2層に細分される。各層は灰白色火山灰を微～少量含み、なかでもA₂層は含有率が高い。

A層～暗褐色土と黒褐色土の混合土で、粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを多く含む。

A₁層の方がにぶい黄褐色シルトの含有率が高い。

B層～黒褐色土を主体とする層で、B₁層は多量のにぶい黄褐色シルト粒～塊と焼土・カーボン粒を少量含み、B₂層は粒状の褐色シルトと焼土粒を微量含む。

C層～小塊状の褐色～黄褐色シルトを多量含む、暗褐色土と黒褐色土の混合土。焼土粒を微量含む。

D層～暗褐色土を主体とする層で、D₁層はにぶい黄褐色シルト粒～小塊と少量のカーボン粒を含み、D₂層は粉～粒状の黄褐色シルトと焼土粒を多く含む。

E層～暗褐色土を主体とし、粒状の灰黄褐色シルトを多く含む。焼土粒を多量に含む。検出面から床面までの深さは0.28～0.30mで、外傾して立ち上がる。

壁の状態 ほぼ平坦で中央に硬化面が広がる。構築土（L層）は小塊状の黒褐色土を多く含む、褐色シルトと黄褐色シルトの混合土である。層厚は0.05～0.09mである。

カマド カマドは不明であるが、床面の西中央で確認した熱浸透層はカマド火床面の可能性がある。

る。熱浸透層（J_{1,2}層）は残存部長軸0.70m以上、短軸0.62mの不整梢円形で、熱浸透層は厚さ0.11mである。部分的に強い被熱を受けて橙色を呈し、堅く焼き締まっている。

柱穴 ピットを床面上に9口検出しており、主柱穴はP1～4である。P5・6は東壁の両隅にあり、支柱の可能性がある。柱痕跡はP3・6で確認され、柱痕跡埋土（F層）は黒褐色土を主体に粒状の暗褐色土を微量含む。掘方埋土（G層）はにぶい黄褐色シルトを主体に粒～塊状の褐色シルトを含み、堅く締まっている。各ピットの規模・深さは、P1～径0.25～0.28m、深さ0.14m、P2～径0.35m、深さ0.19m、P3～径0.33m、深さ0.24m、P4～径0.30～0.34m、深さ0.20m、P5～径0.24～0.32m、深さ0.39m、P6～径0.32～0.34m、深さ0.20m、P7～径0.48～0.57m、深さ0.23m、P8～径0.44～0.55m、深さ0.14m、P9～径0.66～0.68m、深さ0.19mである。その他、床面の中央で、長軸0.62m、短軸0.22mの不整な梢円形を呈する熱浸透層（J層）を検出した。熱浸透層の厚さは0.06mである。

出土遺物 (第49図9～12) 9・10は内面に黒色処理とヘラミガキが施される土器器の坏である。9は底部を回転糸切後にヘラナダによる再調整を施す。内面に煤状炭化物の付着が観察される。11は土器器高台付坏で、内面に黒色処理とヘラミガキが施され、リング状の高台部を底部に接着する。底面には菊花文の痕跡が認められる。12は砂質凝灰岩製の砥石である。磨面は2面で、切削も観察される。その他、あかやき土器坏・高台付坏・甕、内外面黒色処理の土器器坏、土器器甕、須恵器大甕の破片が出土している。

時期 9世紀後葉～10世紀初頭

R A 6 8 9 壇穴建物跡 (第21図)

位置	調査区東 (F-1-X14区)	平面形	方形	主軸方向	—
規模	南西-北西 1.26m以上 (調査区外)	南東-北西 2.44m	重複関係	なし	
掘込面	削平	検出面	Ⅲ層上面	カマド	不明
埋土	A・B層に大別され、A層はさらに2層に細分される。 A層-黒色土を主体とする層で、A ₁ 層は塊状の黄褐色シルトを多量に含み、A ₂ 層は粒～小塊状の褐色シルトと焼土粒を少量含む。				

B層-にぶい黄褐色～黄褐色シルトを主体とし、小塊状の黒褐色土を微量含む。

壁の状態 檻出面から床面までの深さは0.23～0.27mで、外傾して立ち上がる。
床の状態 ほぼ平坦で、構築土（L層）は小塊状の黒色土を少量含む、褐色シルトと黄褐色シルトの混合土である。層厚は0.10～0.13mである。

出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、土器器坏・甕、須恵器大甕の破片が出土している。
時期 9世紀

R A 6 9 0 壇穴建物跡 (第22図)

位置	調査区中央 (G-1-B・C15区)	平面形	方形	主軸方向	W16° N
規模	北西-南東 5.35m、南西-北東 5.10m	重複関係	R G619 (新)		
掘込面	削平	検出面	Ⅲ層上面		

- 埋 土** 自然堆積でA～C層に大別され、A層はさらに2層に細分される。
 A層—黒褐色土を主体とする層で、A₁層は粒～小塊状の暗褐色土を含み、A₂層は多量のにぶい黄褐色シルト粒、カーボン小塊と焼土粒を少量含む。
 B層—小塊状の黄褐色シルトを少量含む、暗褐色土と黒褐色土との混合土。
 C層—褐色シルトを主体とし、粒～塊状の暗褐色土を多量、粒状のカーボンと焼土を少量含む。
- 壁の状態** 檜出面から床面までの深さは0.13～0.17mで、緩やかに外傾して立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦で中央から北に硬化面が広がる。構築土（L層）はにぶい黄褐色シルトを主体とし、粒～小塊状の黒褐色土を多く含む。層厚は0.04～0.07mである。
- カ マ ド** カマドは西壁中央に位置し、基底部は残存せず、火床面のみ残る。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し、煙出しでは深くなる。規模は西壁から煙出しの先端までの長さ1.56m、幅0.20～0.29m、検出面からの深さ0.19～0.48mである。火床面（J_{9～10}層）は径0.47～0.58mの不整円形で、熱浸透層は厚さ0.10mである。その中央部は周辺と比較して、強い被熱を受けて明赤褐色～橙色を呈し堅く焼き縮まっている。カマド崩壊土（J_{1～8}層）は8層に細分され、粒～小塊状のカーボン及び焼土を多く混入し、粒～塊状の褐色～黄褐色シルトを含む暗褐色土である。J₄層は拳大の縄を多量に含む。
- 貯蔵穴** 北西隅に構築される。埋土（D層）は黒褐色土を主体とし、小塊状のにぶい黄褐色シルトを含む。少量のカーボン・焼土粒、土師器、あかやき土器破片を含む。平面形は不整円形で、規模は径0.53～0.57m、床面からの深さ0.06mである。
- 柱 穴** ピットを床面上に5口検出しており、主柱穴はP1～3である。柱痕跡は確認されず、埋土（E層）は黒褐色土を主体とし、粒状のにぶい黄褐色～褐色シルトを少量含む。各ピットの規模・深さは、P1—径0.18m、深さ0.23m、P2—径0.18m、深さ0.10m、P3—径0.16m、深さ0.30m、P4—径0.37m、深さ0.09m、P5—径0.16～0.20m、深さ0.05mである。
- 出土遺物（第50図1～5）** 1～3はあかやき土器壺である。1・3の底部切り離しは回転糸切無調整である。また3は口縁部に歪みがある。4は土師器壺で、内面は黒色処理され、内面全体にヘラミガキを施す。5は土師器小型壺である。体部下半～底部を欠損し、内面には煤状の炭化物が観察される。その他、あかやき土器壺、内外黒色処理の土師器壺、砂底の土師器壺、僅かであるが須恵器壺の破片が出土している。
- 時 期** 9世紀後葉
- R A 6 9 1 壓穴建物跡（第21図）**
- | 位 置 | 調査区中央（G-1～F14区） | 平 面 形 | 方 形 | 主軸方向 | — |
|-------|-----------------------|-------|--------|-------|----|
| 規 模 | 北東～南西4.85m、北西～南東4.37m | 重複関係 | なし | | |
| 掘 収 面 | 削平 | 検 出 面 | III層上面 | カ マ ド | 不明 |
| 埋 土 | 自然堆積でA～C層に大別される。 | | | | |
- A層—黒褐色土を主体とし、粒状のにぶい黄褐色シルトを僅かに含む。

B層—暗褐色土と黒褐色土との混合土で、少量のカーボン粒と粒～小塊状の黄褐色シルトを多く含む。

C層—暗褐色土を主体とし、粒～小塊状のにぶい黄褐色～黄褐色シルトを多量に含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.13～0.19m で、緩やかに外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦であるが、北から南に向かって緩やかに傾斜する。構築土（L層）はにぶい黄褐色シルトと黄褐色シルトとの混合土で、小塊状の暗褐色土を含む。層厚は 0.09～0.13m である。

柱穴 床面上に主柱穴 P 1～3 を検出している。柱痕跡は確認されず、埋土（D_{1,2}層）は黒褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを少量含む。下層は褐色シルトの割合が少ない。各ピットの規模・深さは、P 1—径 0.20～0.23m、深さ 0.10m、P 2—径 0.20～0.23m、深さ 0.09m、P 3—径 0.24m、深さ 0.06m である。

出土遺物（第 50 図 6） 6 は小刀で切先～刃部のみ残存する。切先以外、刀身の刃と棟はほぼ直線で平行となる形状である。図示していないが、あかやき土器坏・甕、土師器坏・甕、フイゴ羽口及び釘の破片が出土している。 時期 9世紀中葉～後葉

R A 6 9 2 積穴建物跡（第 23 図）

位置 調査区東（G-1～L14 区） 平面形 方形 主軸方向 —

規模 北一南 3.20m、西一東 1.23m 以上（調査区外） 重複関係 なし

掘込面 削平 検出面 III層上面 カマド 不明

埋土 自然堆積で A～C 層に大別され、A・B 層はさらに 2 層に細分される。

A層—黒褐色土と暗褐色土との混合土で、A₁層は僅かな黄褐色シルト粒、多量のカーボン小塊、少量の焼土粒を含み、A₂層にはにぶい黄褐色シルト小塊と微量の焼土粒を含む。

B層—暗褐色土を主体とし、粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを含む。B₁層の方がにぶい黄褐色シルトの含有率が高い。

C層—黒褐色土を主体とし、塊状のにぶい黄褐色～黄褐色シルトを多量含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.26m で、直立気味に立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦であるが、南から北に向かって緩やかに傾斜し、硬化面が確認される。構築土（L層）は黄褐色シルトを主体とし、塊状の黒褐色～暗褐色土を含む。層厚は 0.05～0.15m である。

柱穴 ピットを床面上に 3 口検出しており、主柱穴は P 1・3 である。柱痕跡は確認されず、埋土（D_{1,2}層）は黒褐色土を主体とし、D₁層は小塊状の暗褐色土を微量含む。D₂層にはにぶい黄褐色シルト粒を少量含む。各ピットの規模・深さは、P 1—径 0.21m、深さ 0.10m、P 2—径 0.23～0.25m、深さ 0.20m、P 3—径 0.23～0.25m、深さ 0.11m である。

出土遺物（第 50 図 7～10） 7・8 はあかやき土器の坏である。9 は須恵器坏である。底部の切り離しは回転糸切無調整である。10 は土師器甕で、内面が摩滅している。その他、あかやき土器甕、内面黒色処理の土師器坏、砂底の土師器甕の各破片が少量出土している。

時期 9世紀後葉

R A 693 堪穴建物跡（第23図）

位 置	調査区中央 (G-1-G17・18区)	平 面 形	長方形	主軸方向	—
規 模	北西—南東 2.82m, 南西—北東 4.75m	重複関係	R A 694 (新)		
掘 込 面	削平	検 出 面	III層上面		
埋 土	自然堆積でA～C層に大別される。				
A層	黒褐色土と暗褐色土の混合土で、小塊状の褐色シルトを少量含む。少量のカーボン粒を含み、堅く締まっている。				
B層	暗褐色土を主体とし、塊状の黄褐色シルトを多量含む。カーボン粒、焼土粒～小塊を含む。				
C層	黄褐色シルトを主体とし、粒～小塊状の黒褐色土を多く含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは 0.07～0.11m で、外傾して立ち上がる。				
床の状態	中央がやや高いが、ほぼ平坦で硬化面が広がる。構築土 (L層) はにぶい黄橙色シルトと黄褐色シルトの混合土で、小塊状の暗褐色土を少量含む。層厚は 0.07～0.15m である。				
カ マ ド	カマドは不明であるが、西壁中央の床面で確認した熱浸透層はカマド火床面の可能性がある。熱浸透層 (J _{1・2} 層) は残存部長軸 0.50m, 残存部短軸 0.22m の不整楕円形で、熱浸透層は厚さ 0.08m である。西側は強い被熱を受けて明赤褐色を呈し、焼き締まっている。				
柱 の 穴	ピットを床面上に 12 口検出しており、主柱穴は P 1～3 である。埋土は D・E 層に大別される。D 層は黒褐色土を主体に粒～小塊状の暗褐色土、褐色シルトを僅かに含む。E 層は暗褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを少量含む。各ピットの規模・深さは、P 1～径 0.23m, 深さ 0.11m, P 2～径 0.30～0.33m, 深さ 0.10m, P 3～径 0.22～0.24m, 深さ 0.10m, P 4～径 0.21～0.27m, 深さ 0.09m, P 5～径 0.31～0.36m, 深さ 0.08m, P 6～径 0.19～0.21m, 深さ 0.05m, P 7～径 0.26m, 深さ 0.06m, P 8～径 0.43～0.52m, 深さ 0.10m, P 9～径 0.44～0.52m, 深さ 0.18m, P 10～残存部径 0.28～0.32m, 深さ 0.09m, P 11～径 0.22m, 深さ 0.15m, P 12～径 0.23～0.25m, 深さ 0.07m である。				
出土遺物 (第50図11)	11 はあかやき土器の壺で、底部を欠損している。図示していないが、あかやき土器壺、土器壺・甕及び須恵器甕の破片が少量出土している。				
時 期	9世紀中葉～後葉				

R A 694 堪穴建物跡（第24図）

位 置	調査区中央 (G-1-E17・18区)	平 面 形	長方形	主軸方向	N 7° W
規 模	北西—南東 3.15m, 南西—北東 5.42m				
重複関係	R A 693 (古), R G 617・620 (新)	掘 込 面	削平	検 出 面	III層上面
埋 土	A～E層に大別され、A層はさらに2層に細分される。				
A層	黒褐色土と暗褐色土の混合土で、A ₁ 層は粉～粒状の黄褐色シルトを微量含み、A ₂ 層は粉状の黄褐色～明黄褐色シルトを少量含む。各層とも堅く締まるが、A ₁ 層はより堅い。				
B層	暗褐色土を主体とし、塊状の黄褐色シルトを多量含む。径 0.03～0.06m の				

礫を少量含む。

C層-粉～粒状の黄褐色シルトを僅かに含む、黒色土と暗褐色土の混合土。

D層-黒褐色土を主体とし、粒～小塊状のにぶい黄褐色～黄褐色シルトを多量含む。

E層-黒褐色土と暗褐色土の混合土で、粒～小塊状の褐色シルトを含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.21～0.44mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で硬化面が広がる。構築土（L層）は褐色シルトと黄褐色シルトの混合土で、粒～塊状の暗褐色土を多く含む。層厚は0.08～0.11mである。南東隅で礫が確認されたが、使用痕等はなく、自然石である。

カマド カマドは北壁や東寄りに位置し、基底部は残存せず、支脚と火床面のみ残る。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙道に向かって高くなり、煙出しに向かって一部深くなるがほぼ平坦である。規模は北壁から煙出しの先端までの長さ1.63m、幅0.28～0.40m、検出面からの深さ0.15～0.17mである。火床面（J_{6.7}層）は径0.36～0.68mの不整円形で、熱浸透層は厚さ0.06mである。その中央部は周辺と比較して、強い被熱を受けて明赤褐色を呈し堅く焼き縮まっている。カマド支脚は火床面北端に長さ0.34mの礫を直立させ、下部を床面に埋めて用いている。支脚を据えるための掘方埋土（K層）は暗褐色土とにぶい黄褐色シルトの混合土である。カマド崩壊土（J_{1.5}層）は5層に細分され、粒～小塊状の褐色～にぶい黄褐色シルトを含む黒褐色土である。J_{1.4}層は粒～小塊状の焼土とカーボンを多量含む。

柱穴 床面上に6口検出し、主柱穴はP1～3である。柱痕跡は確認されず、埋土はF層が黒褐色土を主体に少量の黄褐色シルト粒を含む。G層は暗褐色土と黒褐色土の混合土で、粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを微量含む。各ピットの規模・深さは、P1-径0.25～0.27m、深さ0.16m、P2-径0.24m、深さ0.08m、P3-径0.18～0.23m、深さ0.12m、P4-径0.33～0.46m、深さ0.09m、P5-径0.31m、深さ0.11m、P6-径0.20～0.23m、深さ0.10mである。

出土遺物（第50図12・13） 12はあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。13は土師器高台付坏の底部～高台部分である。内面は摩滅し、底面はナデ調整を施す。その他、あかやき土器甕、土師器坏・甕及び須恵器大甕・壺の破片が出士している。またA・E層からフイゴ羽口の小破片、床面から安山岩製の砥石が出士している。

時期 9世紀後葉

R A 6 9 5 積穴建物跡（第25図）

位置 調査区中央（G-1-H・116区） **平面形** 方形 **主軸方向** W0°

規模 西-東2.42m、南-北2.95m **重複関係** グリッドピットP34（古）

掘込面 削平 **検出面** III層上面

埋土 自然堆積でA～D層に大別され、A・D層はさらに2層に細分される。

A層-黒褐色土を主体とし、A₁層は小塊状の暗褐色土を少量、A₂層は粒状の黒褐色土を多量含む。

B層-暗褐色土とにぶい黄褐色～黄褐色シルトの混合土で、少量のカーボン粒、焼土粒

～小塊を含む。

C層－黒褐色土を主体とし、小塊状のにぶい黄褐色シルトとカーボン粒を少量含む。

D層－暗褐色土と黒褐色土の混合土で、塊状の黄褐色シルトを含む。D₂層は黄褐色シルトの割合が多い。カーボン粒～小塊を少量含む。

壁の状態

検出面から床面までの深さは0.28～0.31mで、外傾して立ち上がる。

床の状態

ほぼ平坦で硬化面が広がる。構築土（L層）は明黄褐色シルトと褐色シルトの混合土を主体とし、粒～小塊状の暗褐色土を含む。層厚は0.13～0.23mである。

カマド

カマドは西壁やや南寄りに位置する。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し深くなり、一部オーバーハングする。規模は西壁から煙出しの先端までの長さ1.14m、幅0.22～0.38m、検出面からの深さ0.33～0.52mである。カマドは粒状の黒褐色土を多く含む、にぶい褐色シルトと黄褐色シルトの混合土（K層）で構築し、南残存部では構築材として礫を使用している。規模は南残存部が長さ0.20m、幅0.26m、高さ0.09m、北残存部が長さ0.12m、幅0.16m、高さ0.06mである。火床面（J₈層）は径0.26～0.30mの不整楕円形で、熱浸透層は厚さ0.04mである。カマド崩壊土（J_{1～7}層）は7層に細分され、粒～小塊状のカーボン及び焼土を多く混入し、粒～塊状の褐色～黄褐色シルトを含む黒褐色～暗褐色土である。J₁層はカマド天井部が崩壊した層で、J_{2～6}層は拳大の礫を多量に含む。

貯蔵穴

カマド南、南西隅に構築される。埋土（E層）は黒褐色土と褐色土の混合土で、粒～小塊状の明黄褐色シルトとカーボン・焼土粒を少量含む。平面形は不整な円形で、規模は径0.37～0.45m、床面からの深さ0.07mである。

柱穴

柱面上に5口検出し、主柱穴はP1～4である。柱痕跡は確認されず、埋土はF層が黒褐色土を主体に粉～粒状の黄褐色シルトを僅かに含む。G層は暗褐色土と黒褐色土の混合土で、塊状の褐色シルトを少量含む。各ビットの規模・深さは、P1～径0.26～0.28m、深さ0.15m、P2～径0.49～0.83m、深さ0.23m、P3～径0.34～0.47m、深さ0.16m、P4～径0.47～0.53m、深さ0.16m、P5～径0.20m、深さ0.12mである。

出土遺物（第51図1～5）

1・2は須恵器の壺である。2の底部切り離しは回転系切無調整である。

3はあかやき土器壺である。4・5は内面に黒色処理とヘラミガキが施される土器器壺で、5の底部切り離しは回転系切無調整である。図示していないが、あかやき土器壺、土器壺の破片、僅かに土器高台付壺の小破片が出土している。

時期

9世紀中葉

RA 696 穴建物跡（第26図）

位 置 調査区東（G-1-K15・16区） 平面形 方形 主軸方向 W14° N

規 模 北西－南東2.65m、南西－北東3.00m 重複関係 なし

掘 込 面 削平 検出面 III層上面

埋 土 自然堆積でA・B層に大別される。

A層－黒褐色土を主体とし、粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを少量含む。

B層－暗褐色土を主体とし、小塊状の黄褐色シルトを多量含む。

- 壁の状態** 檜出面から床面までの深さは0.03~0.05mで、外傾して立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦で南に硬化面が広がる。構築土（L層）は黄褐色シルトを主体とし、粒~小塊状の黒褐色土を含む。層厚は0.10~0.19mである。
- カマド** カマドは西壁中央に位置し、基底部は残存せず、火床面のみ残る。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって細くなり、煙出しでは深くなる。規模は西壁から煙出しの先端までの長さ1.23m、幅0.18~0.32m、検出面からの深さ0.13~0.16mである。火床面（J_{1~8}層）は径0.74~0.76mの不整円形で、熱浸透層は厚さ0.08mである。その中央部は周辺と比較して、強い被熱を受けて橙色を呈し堅く焼き縮まっている。カマド崩壊土（J_{1~6}層）は6層に細分され、粒~小塊状のカーボン及び焼土を多く混入し、粒~塊状のにぶい黄褐色シルトを含む黒褐色~暗褐色土である。
- 柱穴** ピットを床面上に7口検出し、主柱穴はP1~4である。柱痕跡は確認されず、埋土はC層が黒褐色土を主体とし、粒状の暗褐色土とカーボン・焼土粒を少量含む。D層は暗褐色土と黒褐色土の混合土で、塊状のにぶい黄褐色シルトを多く含む。各ピットの規模・深さは、P1~径0.31m、深さ0.13m、P2~径0.22m、深さ0.14m、P3~径0.20~0.26m、深さ0.19m、P4~径0.17m、深さ0.11m、P5~径0.18m、深さ0.17m、P6~径0.17~0.19m、深さ0.11m、P7~径0.33~0.37m、深さ0.09mである。その他、北東隅で床構築土を精査中に床面下からピットを確認した。底面に須恵器長頸瓶の口縁部~頸部を伏せている。土器内には多量のカーボン粒~塊を含む褐色~黄褐色シルト（F層）が充填され、埋土（E層）は粒~小塊状の暗褐色土を含むにぶい黄褐色シルトである。平面形は不整な円形で、規模は径0.52~0.57m、床面からの深さ0.12mである。
- 出土遺物（第51図6~8）** 6はあかやき土器の坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。7はあかやき土器鉢で、体部下半~底部を欠損する。胎土に雲母を含む。8は床面下のピットから出土した須恵器長頸瓶で、口縁部~頸部が残存する。内外面に自然釉が確認される。その他、あかやき土器甕、土師器坏・甕及び須恵器坏・大甕・壺の破片が出土している。
- 時期** 9世紀中葉~後葉
- R A 6 9 7 壇穴建物跡（第27図）**
- | 位 置 | 調査区東（G-1~K18・19区） | 平 面 形 | 方 形 | 主 軸 方 向 | — |
|-------|---|-------|--------|---------|---|
| 規 模 | 東~西 3.20m以上（調査区外）、北~南 3.05m | 重複関係 | なし | | |
| 掘 込 面 | 前 平 | 検 出 面 | III層上面 | | |
| 埋 土 | 自然堆積でA~E層に大別され、D・E層はさらに2層に細分される。
A層~黒褐色土と暗褐色土の混合土で、粉~粒状の黄褐色シルトを僅かに含む。
B層~粒~小塊状のにぶい黄褐色~黄褐色シルトを多く含む、暗褐色土と褐色シルトの混合土。
C層~黒色土を主体とし、粒状のにぶい黄褐色シルト、カーボン・焼土粒を少量含む。
D層~暗褐色土と黒褐色土の混合土で、D ₁ 層は粒状の褐色シルトを微量含み、D ₂ 層は小塊状のにぶい黄褐色シルトとカーボン粒を少量含む。
E層~暗褐色土を主体とし、塊状の褐色シルトを含む。E ₂ 層の方が褐色シルトの含有 | | | | |

率が非常に高い。

- 壁の状態** 檜出面から床面までの深さは 0.34~0.37m で、外傾して立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦で硬化面が広がり、中央東には特に堅い面が確認される。構築土（L層）はにぶい黄褐色～黄褐色シルトを主体とし、塊状の黒褐色～暗褐色土を多く含む。層厚は 0.17 ~0.22m である。
- カマド** カマドは不明であるが、北東でカマド崩壊土（J層）の一部を確認している。カマド崩壊土は暗褐色土を主体とし、粒～小塊状のにぶい黄橙色シルトと多量のカーボン・焼土粒～塊を含む。
- 柱穴** ピットを床面上に 1 口検出している。柱痕跡は確認されず、埋土（F層）は黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。カーボン粒と焼土粒～塊を含む。規模は径 0.44~0.46m、深さは 0.12m である。
- 出土遺物（第 51 図 9~17）** 9・10 は須恵器の坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。11~14 はあかやき土器の坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。12・14 は口縁部に歪みがあり、14 は胎土に砂礫を多く含む。15 は内面に黒色処理とヘラミガキが施される土師器坏で、体部下端と底面にヘラケズリが施される。16・17 は土師器甕で、体部下半～底部を欠損する。その他、あかやき土器甕の破片と僅かに土師器高台付坏の破片が出土している。
- 時期** 9世紀中葉

R A 6 9 8 穴穴建物跡（第 27 図）

- 位置** 調査区南西（G-1 - B23・24 区） **平面形** 方形 **主軸方向** —
- 規模** 西一東 1.25m 以上（調査区外）、南一北 4.21m 以上（調査区外） **重複関係** なし
- 掘込面** 削平 **検出面** III層上面
- 埋土** 自然堆積で A～D 層に大別され、A 層はさらに 2 層に細分される。
A 層—黒褐色土と暗褐色土の混合土で、A₁ 層は粒～小塊状の褐色シルトを微量含み、
A₂ 層は塊状のにぶい黄褐色シルト、カーボン粒及び焼土粒～塊を少量含む。
B 層—にぶい黄褐色～黄褐色シルトを主体とし、塊状の暗褐色土を含む。
C 層—暗褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを少量含む。
D 層—粒～小塊状の黒褐色～暗褐色土を微量含む、にぶい黄褐色シルト。
- 壁の状態** 檜出面から床面までの深さは 0.17~0.27m で、外傾して立ち上がる。
- 床の状態** 中央が若干高いが、ほぼ平坦である。床構築土は確認されず、振り込んだ地山褐色～黄褐色シルト層（III層）を床面としている。
- 出土遺物（第 51 図 18）** 18 はあかやき土器坏である。内外面は摩滅している。
- 時期** 9世紀

R A 6 9 9 穴穴建物跡（第 28 図）

- 位置** 調査区南東（G-1 - J・K24 区） **平面形** 方形 **主軸方向** W 3° S
- 規模** 西一東 3.57m、南一北 3.88m **重複関係** RG 617 (新)
- 掘込面** 削平 **検出面** III層上面

埋 土	自然堆積でA～C層に大別され、A層はさらに3層に細分される。 A層—暗褐色土を主体とし、粒～塊状の黒褐色土を含む層で、焼土粒を少量含む。3層に細分され、下層ほど黒褐色土の割合が高い。 B層—黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色シルトを含む層で、カーボン粒と焼土塊を多く含む。他の埋土と比較して、軟らかい。 C層—小塊状の黒褐色土を少量含む褐色シルトで、カーボン粒を微量含む。
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.10～0.12mで、外傾して立ち上がる。
床の状態	ほぼ平坦である。構築土（L層）は小塊状の暗褐色土を少量含む、にぶい黄橙色シルトと黄褐色シルトの混合土である。層厚は0.04～0.10mである。
カマド	カマドは西壁中央に位置する。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し、深くなっている。火床面から煙道半ばまでは平坦で、途中から煙出しに向かって傾斜し深くなる。規模は西壁から煙出しの先端までの長さ1.34m、幅0.33～0.35m、検出面からの深さ0.14～0.22mである。カマドは褐色～黄褐色シルトに粒～小塊状の暗褐色土を含む混合土（K ₁ ～層）で構築している。規模は南残存部が長さ0.25m、幅0.32m、高さ0.09m、北残存部が長さ0.48m、幅0.30m、高さ0.09mである。火床面（J ₁ 層）は径0.39～0.41mの不整梢円形で、熱浸透層は厚さ0.10mである。西側は強い被熱を受けて明赤褐色を呈し、焼き縮まっている。カマド崩壊土（J ₁ ～8層）は8層に細分され、暗褐色土を主体とし、黒褐色土、褐色～黄褐色シルト及び焼土が混合する。J ₁ 層はカマド天井部が崩壊した層である。J ₄ 層は粒～塊状のカーボンを多く含み、J ₄ 層は礫を少量含む。なお、この崩壊土は煙出しから煙道、さらに火床面と床面の一部の範囲を覆っている。
柱 穴	ピットを床面上に4口検出しており、主柱穴はP1～3である。柱痕跡は確認されず、埋土（D層）が黒色～黒褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを少量含む。各ピットの規模・深さは、P1～径0.26m、深さ0.08m、P2～径0.24～0.28m、深さ0.07m、P3～径0.24～0.28m、深さ0.02m、P4～径0.18～0.20m、深さ0.06mである。
出土遺物（第52図1～6）	1は須恵器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。2はあかやき土器坏で、底部を欠損する。3・4は土器器坏で、内面に黒色処理とヘラミガキが施される。3の底面にはヘラケズリが施され、重焼痕が観察される。5・6はあかやき土器甕である。図示していないが、土器器甕の破片、僅かに土器器高台付坏の破片が出土している。
時 期	9世紀中葉
R A 7 0 0 積穴建物跡（第29・30図）	
位 置	調査区南（G1-E・F3区）
規 模	平面形 方形 南東-北西4.38m、北東-南西4.38m
掘 込 面	重複関係 なし
掘 出 面	削平 検出面 III層上面
埋 土	自然堆積でA～E層に大別され、C・E層はさらに2層に細分される。A～C層は径0.04～0.12mの縦を少量含む。 A層—黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の暗褐色土と焼土粒を少量含む。

B層—暗褐色土を主体とし、小塊状のにぶい黄褐色シルトを多く含む。少量のカーボン粒、多量の焼土粒～小塊状を含む。

C層—暗褐色土を主体に黒色土を塊状に含む混合土で、C₁層は粒状のにぶい黄褐色シルトとカーボン・焼土粒を少量含み、C₂層は少量のカーボン粒～塊、塊状の褐色シルトを多量含む。

D層—暗褐色土を主体とし、褐色シルト粒を多量に含む。

E層—黒褐色土を主体とする層で、E₁層は粒～塊状の褐色シルトとカーボン粒を含み、E₂層は塊状の黄褐色シルトを多量含む。

壁の状態 檜出面から床面までの深さは0.30～0.37mで、外傾して立ち上がる。部分的ではあるが、北、南及び東壁の壁際には幅0.07～0.15m、深さ0.05～0.08mの周溝がめぐる。埋土(F層)は黒褐色土を主体とし、粒状の暗褐色土とにぶい黄褐色シルトを少量含む。北壁を除く周溝の底面には小規模なピットが確認され、壁面部材の据え方の可能性がある。

床の状態 ほぼ平坦で、中央を主として硬化面が広がる。構築土(L層)は明黄褐色シルトと褐色シルトの混合土を主体とし、塊状の暗褐色土を少量含む。層厚は0.05～0.09mである。

カマド カマドは2時期(I・II期)あり、平面形や残存状況、埋土の状況などから、西(II期)→東(I期)の順で造り替えが行われている。II期カマドについては、廃棄後も基底部等を壊さずに残している。

I期のカマドは東壁北寄りに位置する。煙道平面形は不整な溝状で、煙出しに向かって徐々に浅くなり、煙出し底面で最も浅くなる。規模は東壁から煙出しの先端までの長さ1.43m、幅0.21～0.34m、検出面からの深さ0.10～0.18mである。カマドは人為的に壊されており、南基底部のみ残存する。カマド基底部は褐色シルトに粒～小塊状の暗褐色土を含む混合土(K層)で構築し、規模は南残存部が長さ0.51m、幅0.30m、高さ0.08～0.16mである。明確な火床面は確認できない。カマド崩壊土(J_{1～7}層)は褐色シルト粒～塊状を含む黒褐色～暗褐色土である。J₃層は多量の灰黄色粘土粒～塊を多く含み、J_{3.5}層はカマド周辺の広範囲に広がり、床面を覆っている。

II期のカマドは西壁中央に構築される。煙道は刺り貫きのトンネル状で天井部が残存する。煙道平面形は南にやや屈曲する溝状で、火床面から煙出しに向かって傾斜し、煙出し底面で最も深くなる。規模は西壁から煙出しの先端までの長さ1.06m、幅0.23～0.41m、検出面からの深さ0.22～0.60mをはかる。カマドはにぶい黄橙色シルトとにぶい黄褐色シルトの混合土(K'層)で構築している。規模は南残存部が長さ0.33m、幅0.23m、高さ0.22m、北残存部が長さ0.34m、幅0.17m、高さ0.12mである。火床面は径0.56mの不整な円形を呈し、熱浸透層は厚さ0.07mである。西側は強い被熱を受けて橙色を呈し、堅く焼き締まっている。カマド崩壊土(J'層)は暗褐色土や褐色シルトを含む黒褐色土を主体とし、9層に細分される。J'層はカマド天井部が崩壊した層である。煙出し底面に堆積したJ''層から底部を欠損したあかやき土器甕が出土している。

柱穴 その他ピットを床面上に8口検出しており、主柱穴はP1～4である。柱痕跡は認められず、埋土(G層)が黒褐色土を主体とし、褐色シルト粒状を少量含む。各ピットの規模・深さは、P1—径0.20～0.22m、深さ0.10m、P2—径0.22m、深さ0.10m、P3—径

0.25m, 深さ 0.09m, P 4 - 径 0.26~0.28m, 深さ 0.10m, P 5 - 径 0.22m, 深さ 0.10m, P 6 - 径 0.20~0.24m, 深さ 0.12m, P 7 - 径 0.26~0.30m, 深さ 0.09m, P 8 - 径 0.33m, 深さ 0.10mである。

出土遺物（第 53 図 1~9） 1・3はあかやき土器の坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。

1は内外面に煤状炭化物が付着し、3は胎土に砂粒を多く含む。2は須恵器坏で、底部は回転糸切無調整である。外面に火滌、内面に重ね焼き痕が観察される。4は内面に黒色處理とヘラミガキが施される土師器高台付坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。5・6はあかやき土器壺である。5はII期カマドの煙出しだから出土し、内外面に煤状炭化物が付着する。7は体部下半～底部を欠損する土師器小型壺である。8は土師器壺ではほぼ完形に近い。9は砂質凝灰岩製の砥石である。短冊形で4面の使用痕と切削が観察される。この他、土師器坏、あかやき土器小型壺及び須恵器大型壺の破片が出土している。

時期 9世紀中葉

R A 7 0 1 積穴建物跡（第 31 図）

位置	調査区南 (G 1 - J 2・3 区)	平面形	方形	主軸方向	W 5° N
規模	西一東 2.39m以上（調査区外）、南一北 5.15m	重複関係	R G 617 (新)		
掘込面	削平	検出面	Ⅲ層上面		
埋土	A～D層に大別され、A・C層はさらに3層に細分される。B層は人為堆積、それ以外は自然堆積である。				

A層～黒褐色土を主体とする層で、A₁層は少量の褐色シルト塊を含み、A₂層は褐色シルト塊を僅かに含む。A₃層は粒～塊状のにぶい黄褐色シルトを多量に含む。

B層一粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを少量含む、暗褐色土と黒褐色土の混合土。少量の焼土粒、多量の拳大の円礫・角礫を含む。礫の一部には被熱を受けて赤変化したもののが確認される。

C層～暗褐色土を主体とし、粒～塊状のにぶい黄褐色～黄褐色シルトを多く含む。3層に細分され、下層ほどにぶい黄褐色～黄褐色シルトの割合が高くなる。

D層～黒褐色～暗褐色土を主体とし、塊状の褐色シルトを少量含む。カーボン粒、焼土粒～塊を多量に含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.21~0.24m で、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦であるが、カマド付近が若干凹んでおり、硬化面も確認される。構築土（L層）は黄褐色シルトを主体とし、小塊状の暗褐色土を多く含む。層厚は 0.04~0.21m である。

カマド カマドは西壁中央に位置する。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かつて緩やかに傾斜し深くなる。規模は西壁から煙出しの先端までの長さ 1.24m、幅 0.25~0.41m、検出面からの深さ 0.22~0.36m である。カマドはにぶい黄褐色シルト、暗褐色土及び粒～塊状の灰白色～灰黄色粘土との混合土（K_{1~2}層）で構築している。規模は南残存部が長さ 0.48m、幅 0.40m、高さ 0.08~0.14m、北残存部が長さ 0.47m、幅 0.24m、高さ 0.07~0.12m である。火床面（J_{9~10}層）は径 0.54~0.59m の不整楕円形で、熱浸透層は厚さ 0.10m である。カマド崩壊土（J_{1~8}層）は 8 層に細分され、カーボンと焼土を含

む黒褐色～暗褐色土である。J₂層はカマド天井部が崩壊した層で、J_{3.5.7}層はカーボンと焼土を多量に含む。

柱 穴 北西隅に構築される。埋土はE～G層に大別され、F層はさらに2層に細分される。E層は粒状の褐色シルトを少量含む黒褐色土で、多量のカーボン・焼土粒を含む。F層は暗褐色土に小塊状の褐色シルトを多く含み、F₂層は割合が多い。G層は塊状のにぶい黄褐色シルトを少量含み、他の埋土と比較して軟らかい。平面形は不整な円形で、規模は径0.55～0.60m、床面からの深さ0.25mである。

柱 穴 ピットを床面上に5口検出しており、主柱穴はP1・2で柱痕跡も確認される。柱痕跡埋土（H層）は暗褐色土を主体に粒状の褐色シルトを微量含む。掘方埋土（1層）は黄褐色シルトを主体に小塊状の黒褐色土を含み、堅く縮まりがある。各ピットの規模・深さは、P1－径0.30m、深さ0.15m、P2－径0.23m、深さ0.18m、P3－径0.38～0.41m、深さ0.13m、P4－径0.35～0.60m以上、深さ0.22m、P5－径0.20～0.23m、深さ0.07mである。

出土遺物（第52図7～12） 7はあかやき土器の壊である。8・9は土師器壊で、内面に黒色処理とヘラミガキが施される。9の底部切り離しは回転糸切無調整である。10～12は土師器甕である。11は体部下半～底部が残存し、内面に煤状炭化物が観察され、底面はヘラケズリ調整を施す。その他、砂底の土師器甕、僅かに須恵器壊・甕、あかやき土器甕の各破片が出土している。

時 期 9世紀後葉

R B 1 4 2 掘立柱建物跡（第32図）

位 置 調査区南（G1～H1・2・3区） **平 面 形** 桁行1間×梁行1間の東西棟

棟 方 向 N10°W **重複関係** RD2211（新）

規 模 桁行1間（総長1.85m・6尺1寸）、梁行1間（総長2.47m・8尺1寸）

掘 込 面 削平 **換 出 面** III層上面

柱間寸法 P1～4の4口で構成される。梁間柱間はP1・P2間－2.47m（8尺1寸）、P3・P4間－2.42m（8尺）である。桁行柱間はP2・P3間－1.84m（6尺）、P4・P1間－1.85m（6尺1寸）である。

柱 穴 建物を構成するすべての柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕径は0.15～0.21m、掘方径は0.40～0.69mをはかる。柱痕跡埋土は黒褐色土を主体ににぶい黄褐色～褐色シルト粒を少量含む。掘方埋土は褐色シルトを主体に粒～塊状の黒褐色土を含み、縮まりがある。各柱穴の規模・深さはP1－径0.40～0.59m、深さ0.29m、P2－径0.33～0.53m、深さ0.27m、P3－径0.68m、深さ0.23m、P4－径0.61～0.69m、深さ0.15mである。平面形はP3が不明であるが、P1・2は不整長方形、P4は不整方形を呈する。

出土遺物 図示していないが、あかやき土器壊、土師器壊の小破片が出土している。

時 期 9世紀

R D 2188 土坑（第32図）

位 置	調査区北西（F-1-W7区）	平 面 形	不整橢円形
規 模	長軸—上端 0.59m, 下端 0.47m, 短軸—上端 0.45m, 下端 0.29m		
重複関係	なし	掘 込 面 削 平	検 出 面 III層上面
埋 土	自然堆積でA・B層に大別され, A層はさらに2層に細分される。		
A層	黒褐色土を主体とする層で, A ₁ 層は少量の褐色シルト塊を含み, A ₂ 層は少量の 燒土粒と粒～小塊状の褐色シルトを多く含む。		
B層	にぶい黄褐色シルトを主体とし, 小塊状の暗褐色土を少量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.41m で, 直立気味に外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。		
出土遺物	図示していないが, あかやき土器坏・甕, 土師器坏・甕及び須恵器坏の破片が出土して いる。		
時 期	9世紀		

R D 2189 土坑（第32図）

位 置	調査区北西（F-1-X7・8区）	平 面 形	不整橢円形
規 模	長軸—上端 1.00m, 下端 0.68m, 短軸—上端 0.85m, 下端 0.65m		
重複関係	なし	掘 込 面 削 平	検 出 面 III層上面
埋 土	自然堆積でA・B層に大別され, B層はさらに2層に細分される。		
A層	黒褐色土を主体とし, 粒～塊状の暗褐色土を微量含む。		
B層	暗褐色土を主体とする層で, B ₁ 層は粒～塊状の黄褐色シルトを多く含み, B ₂ 層 はにぶい黄褐色シルト塊を微量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.33m で, 外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。		
出土遺物	B層からあかやき土器坏・甕, 土師器坏・甕, 須恵器坏・大甕の小破片が出土している。		
時 期	9世紀		

R D 2190 土坑（第33図）

位 置	調査区北西（F-1-Y7区）	平 面 形	不整橢円形
規 模	残存部長軸—上端 1.12m, 下端 1.03m, 残存部短軸—上端 0.46m, 下端 0.40m		
重複関係	R A676・677（新）	掘 込 面 削 平	検 出 面 III層上面
埋 土	自然堆積でA・B層に大別され, A層はさらに2層に細分される。		
A層	黒褐色土を主体とする層で, A ₁ 層は微量の燒土粒と黄褐色～明黄褐色シルト粒～ 小塊を多く含み, A ₂ 層は粒状のにぶい黄橙色シルト塊を少量含む。		
B層	黑色土を主体とし, 塊状の黄褐色シルトを多量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.20m で, 外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。		
出土遺物	B層から土師器坏・甕・球胴甕の小破片が出土している。 時 期 9世紀		

R D 2191 土坑（第33図）

位 置	調査区東 (G-1 - K12 区)	平 面 形	不整長方形
規 模	長軸 - 上端 2.18m, 下端 2.07m, 短軸 - 上端 1.08m, 下端 1.05m		
重複関係	R A687 (古)	掘 込 面	削 平
埋 土	自然堆積で A・B 層に大別される。	検 出 面	III層上面
	A層 - 粉～粒状の褐色シルトを僅かに含む, 黒色土と黒褐色土の混合土。		
	B層 - 黄褐色シルトを主体とし, 塊状の黒褐色土を含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.13m で, 外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。		
出土遺物 (第54図5)	5 はあかやき土器壺, 底部切り離しは回転系切無調整である。その他, 図示していないが, あかやき土器壺, 内外黒色処理の土師器壺, 土師器壺及び須恵器大甕の破片が出土している。		
時 期	9世紀後葉		

R D 2192 土坑（第33図）

位 置	調査区東 (G-1 - J18・19 区)	平 面 形	不整梢円形
規 模	長軸 - 上端 0.74m, 下端 0.39m, 短軸 - 上端 0.53m, 下端 0.30m		
重複関係	なし	掘 込 面	削 平
埋 土	自然堆積で A～C 層に大別され, A・B 層はさらに 2 層に細分される。	検 出 面	III層上面
	A層 - 黒褐色土を主体とする層で, A ₁ 層は粒～小塊状の黄褐色シルトと微量の焼土粒を含み, A ₂ 層は粒状の褐色シルトを微量含む。		
	B層 - 暗褐色土を主体とし, 塊状のにぶい黄褐色シルトを含む。B ₂ 層の方がにぶい黄褐色シルトの割合が高い。		
	C層 - 黒色土を主体とし, 小塊状の褐色シルトを含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.45m で, 外傾して立ち上がる。		
底の状態	やや丸みを帯びる。		
出土遺物	A層から少量の須恵器壺の破片, B層からあかやき土器壺, 土師器壺の小破片が出土している。		
時 期	9世紀		

(3) 古代以降の遺構・遺物

R D 2193 土坑（第33図）

位 置	調査区東 (G-1 - J16 区)	平 面 形	不整梢円形
規 模	長軸 - 上端 0.80m, 下端 0.57m, 短軸 - 上端 0.66m, 下端 0.35m		
重複関係	なし	掘 込 面	削 平
埋 土	自然堆積で A～C 層に大別される。	検 出 面	III層上面
	A層 - 黒色土を主体とし, 粒～小塊状の暗褐色土を微量含む。		

B層—黒褐色土を主体とし、粒状の黄橙色シルトを多量含む。

C層—暗褐色土を主体とし、塊状の褐色シルトを多く含む。

壁の状態 検出面から底面までの深さは 0.24m で、外傾して立ち上がる。

底の状態 ほぼ平坦である。

出土遺物 A層からフイゴ羽口の破片、B層から土師器壺の小破片が出土している。

時期 古代

R D 2194 土坑（第33図）

位置 調査区中央 (G-1 - D 19 区) **平面形** 不整円形

規模 長軸—上端 0.65m, 下端 0.52m, 短軸—上端 0.55m, 下端 0.45m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** III層上面

埋土 自然堆積で A～C層に大別される。

A層—粒～小塊状の褐色シルトを微量に含む黒褐色土。

B層—小塊状のにぶい黄褐色シルトを含む黑色土。

C層—粒状の黒褐色土を少量含む暗褐色土。

壁の状態 検出面から底面までの深さは 0.15m で、外傾して立ち上がる。

底の状態 ほぼ平坦である。

出土遺物 A層から土師器壺の小破片が出土している。

時期 古代

R D 2195 土坑（第33図）

位置 調査区中央南 (G-1 - C 20 区) **平面形** 不整梢円形

規模 長軸—上端 0.83m, 下端 0.73m, 短軸—上端 0.68m, 下端 0.55m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** III層上面

埋土 自然堆積で A・B層に大別され、A層はさらに 2 層に細分される。

A層—黒褐色土を主体とする層で、A₁層は明黄褐色シルト塊を多量含み、A₂層は粒～小塊状のにぶい黄褐色シルト塊を微量含む。

B層—暗褐色土を主体とし、粒状の黒褐色土を少量含む。

壁の状態 検出面から底面までの深さは 0.20m で、外傾して立ち上がる。

底の状態 ほぼ平坦である。

出土遺物 B層からあかやき土器壺の小破片が出土している。

時期 古代

R D 2196 土坑（第33図）

位置 調査区中央 (G-1 - E 19 区) **平面形** 不整円形

規模 長軸—上端 0.72m, 下端 0.52m, 残存部短軸—上端 0.53m, 下端 0.41m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** III層上面

埋土 自然堆積で A・B層に大別される。

A層	にぶい黄橙色シルトを主体とし、塊状の黒褐色土を多量含む。
B層	暗褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色シルトを含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.15m で、外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦であるが、西に向かって僅かに傾斜する。
出土遺物	A層からあかやき土器壺の摩滅した小破片が出土している。
時期	古代

R D 2197 土坑（第33図）

位置	調査区中央東 (G-1-H・I 19 区)	平面形	不整円形
規模	長軸一上端 0.79m, 下端 0.49m, 短軸一上端 0.72m, 下端 0.53m		
重複関係	なし	掘込面	削平
検出面			Ⅲ層上面
埋土	自然堆積で、黒褐色土を主体とする單層である。にぶい黄褐色シルトの包含率で2層に細分され、A ₁ 層は粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトとカーボン粒を微量含み、A ₂ 層は塊状のにぶい黄褐色シルトを多量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.10m で、緩やかに外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。		
出土遺物	なし		
時期	古代		

R D 2198 土坑（第34図）

位置	調査区中央南 (G-1-I 9 区)	平面形	不整楕円形
規模	長軸一上端 0.94m, 下端 0.65m, 短軸一上端 0.88m, 下端 0.49m		
重複関係	なし	掘込面	削平
検出面			Ⅲ層上面
埋土	自然堆積で A～C 層に大別され、B 層はさらに 2 層に細分される。		
A層	黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の暗褐色土と微量の焼土粒を含む。		
B層	小塊状のにぶい黄褐色シルトを多く含む暗褐色土。下層ほどにぶい黄褐色シルトの割合が高くなる。B ₁ 層はカーボン粒、砂、安山岩を少量含み、B ₂ 層はカーボン粒～小塊を含む。		
C層	黒褐色土を主体とし、塊状の褐色シルトを多量含む。径 0.04m の小礫を少量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.30m で、外傾して立ち上がる。		
底の状態	緩く湾曲する。		
出土遺物	A層からあかやき土器壺と土師器壺の小破片、B ₁ 層から安山岩製の砥石破片が出土している。		
時期	古代		

R D 2199 土坑（第34図）

位置	調査区中央南 (G-1-D 7 区)	平面形	不整楕円形
規模	長軸一上端 0.76m, 下端 0.52m, 短軸一上端 0.58m, 下端 0.37m		
重複関係	なし	掘込面	削平
検出面			Ⅲ層上面

埋 土	自然堆積でA～C層に大別される。 A層—黒褐色土を主体とし、粉～粒状の暗褐色土を僅かに含む。 B層—明黄褐色シルトを主体とし、塊状の暗褐色土と燒土粒を微量含む。 C層—黒褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを少量含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.15mで、緩やかに外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	A層から内面が黒色処理された土師器壊の小破片が出土している。
時 期	古代

R D 2 2 0 0 土坑（第34図）

位 置	調査区中央南（G-1-E・F7区）	平 面 形	不整橢円形
規 模	長軸—上端2.23m、下端2.03m、短軸—上端1.50m、下端1.20m		
重複関係	なし	掘 込 面	削平
檢 出 面			Ⅲ層上面
埋 土	自然堆積でA・B層に大別される。 A層—黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の暗褐色土、少量のカーボン粒及び多量の燒土粒～小塊を含む。 B層—暗褐色土を主体とし、小塊状のにぶい褐色シルトを多く含み、燒土粒を少量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.14mで、緩やかに外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。		
出土遺物	A層からあかやき土器壊破片、内面が黒色処理された土師器壊の小破片が出土している。		
時 期	古代		

R D 2 2 0 1 土坑（第34図）

位 置	調査区中央南（G-1-D5・6区）	平 面 形	不整橢円形
規 模	長軸—上端0.88m、下端0.72m、短軸—上端0.75m、下端0.57m		
重複関係	なし	掘 込 面	削平
檢 出 面			Ⅲ層上面
埋 土	自然堆積でA・B層に大別され、B層はさらに2層に細分される。 A層—黒褐色土を主体とし、小塊状の褐色シルトを多く含む。 B層—暗褐色土を主体とし、にぶい黄褐色シルトを含む。混入土の黄褐色シルトについては、B ₁ 層は微量の粒状で鐵滓を含み、B ₂ 層は多量の粒状である。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.24mで、外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。		
出土遺物	B層からあかやき土器壊破片と小規模な楕型溝、僅かに土師器壊・甕の小破片が出土している。		
時 期	古代		

R D 2 2 0 2 土坑（第34図）

位 置	調査区中央南（G-1-E23区）	平 面 形	不整橢円形
------------	------------------	--------------	-------

規 模	長軸—上端 0.88m, 下端 0.60m, 短軸—上端 0.75m, 下端 0.46m
重複関係	なし 掘込面 削平 検出面 III層上面
埋 土	自然堆積で A・B 層に大別され, A 層はさらに 2 層に細分される。
A層	—黒褐色土を主体とする層で, A ₁ 層は小塊状の褐色シルトと少量のカーボン粒～小塊を含み, A ₂ 層は微量のカーボン小塊, 粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを微量含む。
B層	—黄褐色シルトを主体とし, 塊状の暗褐色土を多量含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.20m で, 緩やかに外傾して立ち上がる。
底の状態	やや丸みを帯びる。
出土遺物	A ₂ 層から少量のあかやき土器坏破片, 土師器坏・甕の小破片が出土している。
時 期	古代

R D 2 2 0 3 土坑（第 34 図）

位 置	調査区南 (G 1-G 2 区) 平 面 形 不整円形
規 模	長軸—上端 1.15m, 下端 1.04m, 短軸—上端 1.09m, 下端 1.00m
重複関係	なし 掘込面 削平 検出面 III層上面
埋 土	自然堆積で, 黒褐色土を主体とする単層で 2 層に細分される。A ₁ 層は多量のカーボン粒, 塊状の暗褐色土を含み, A ₂ 層は小塊状のにぶい黄褐色シルトを多量含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.11m で, 外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	なし 時 期 古代

R D 2 2 0 4 土坑（第 34 図）

位 置	調査区南 (G 1-H 4 区) 平 面 形 不整長方形
規 模	長軸—上端 0.72m, 下端 0.65m, 短軸—上端 0.38m, 下端 0.26m
重複関係	R D 2211 (新) 掘込面 削平 検出面 III層上面
埋 土	人為堆積で A～D 層に大別され, A・B 層はさらに 2 層に細分される。
A層	—明黄褐色シルトを主体とする層で, A ₁ 層は塊状のにぶい黄褐色シルトを含み, A ₂ 層は粒～小塊状の褐色シルトを多量含む。
B層	—黒褐色土を主体とし, 粒～小塊状の暗褐色土を含む。B ₁ 層は暗褐色土の混入度が高い。
C層	—黒褐色土を主体とし, 塊状の褐色シルトを少量含む。
D層	—にぶい黄褐色シルトを主体とし, 粒～塊状の暗褐色土を多く含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.40m で, 直立気味に立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	なし 時 期 古代

R D 2 2 0 5 土坑（第35図）

位 置	調査区北西（F-1 - T 4 区）	平 面 形	不整梢円形か
規 模	長軸 - 上端 0.75m 以上, 下端 0.68m 以上, 短軸 - 上端 0.55m 以上, 下端 0.47m 以上		
重複関係	なし	掘 込 面	削 平
埋 土	自然堆積で、黒褐色土と暗褐色土の混合土で2層に細分される。A ₁ 層は粒～塊状の黄褐色シルトを含み、A ₂ 層は小塊状の褐色シルトを多量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.17m で、外傾して立ち上がる。		
底の状態	緩やかな起伏がある。		
出土遺物	なし	時 期	古代以降

R D 2 2 0 6 土坑（第35図）

位 置	調査区西（G-1 - B 20 + 21 区）	平 面 形	不整梢円形か
規 模	残存部長軸 - 上端 0.69m, 下端 0.63m, 短軸 - 上端 0.74m, 下端 0.65m		
重複関係	なし	掘 込 面	削 平
埋 土	自然堆積で、粒～塊状の黄褐色シルトを含む。黒褐色土と黒色土の混合土で2層に細分される。A ₂ 層の方が黄褐色シルトの割合が非常に高い。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.10m で、外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。		
出土遺物	A層から土師器甕、僅かにあかやき土器甕の各小破片が出土している。		
時 期	古代以降		

R D 2 2 0 7 土坑（第35図）

位 置	調査区中央南（G-1 - D 20 区）	平 面 形	不整梢円形か
規 模	長軸 - 上端 0.70m, 下端 0.39m, 残存部短軸 - 上端 0.48m, 下端 0.25m		
重複関係	R G 622 (新)	掘 込 面	削 平
埋 土	R G 622 (新)	検 出 面	III層上面
	自然堆積で A・B 層に大別され、A 層はさらに 2 層に細分される。		
A 層	- 暗褐色土を主体とする層で、A ₁ 層は粉状のにぶい黄褐色シルトを僅かに含み、A ₂ 層は粒～小塊状の黄褐色シルトを含む。		
B 層	- 褐色シルトを主体とし、塊状の暗褐色土を多量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.24m で、外傾して立ち上がる。		
底の状態	中央がやや深くなる。		
出土遺物	なし	時 期	古代以降

R D 2 2 0 8 土坑（第35図）

位 置	調査区南西（G-1 - C 22 区）	平 面 形	不整梢円形
規 模	長軸 - 上端 0.79m, 下端 0.67m, 短軸 - 上端 0.55m, 下端 0.44m		
重複関係	なし	掘 込 面	削 平
埋 土	自然堆積で A・B 層に大別される。		

A層—黒色土を主体とし、粒～小塊状の褐色シルトを少量含む。
B層—粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む、暗褐色土と黒褐色土の混合土。

壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.10m で、緩やかに外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	なし 時 期 古代以降

R D 2 2 0 9 土坑（第 35 図）

位 置	調査区中央南 (G-1 - F 23 区) 平 面 形 不整楕円形
規 模	長軸—上端 1.10m, 下端 1.00m, 短軸—上端 0.60m, 下端 0.50m
重複関係	なし 挖込面 削平 検出面 III層上面
埋 土	自然堆積で A・B 層に大別される。 A層—褐色シルトを主体とし、少量のカーボン粒、粒～小塊状の暗褐色土を多く含む。 B層—暗褐色土を主体とする層で、塊状の褐色シルトを含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.10m で、外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	なし 時 期 古代以降

R D 2 2 1 0 土坑（第 35 図）

位 置	調査区南 (G 1 - G 3 区) 平 面 形 不整長方形
規 模	長軸—上端 1.07m, 下端 0.92m, 短軸—上端 0.51m, 下端 0.42m
重複関係	なし 挖込面 削平 検出面 III層上面
埋 土	自然堆積で A～D 層に大別され、B 層は 2 層、C 層は 3 層に細分される。 A層—黒色土を主体とし、少量のにぶい黄褐色シルト粒と微量のカーボン粒を含む。 B層—暗褐色土を主体とする層で、B ₁ 層は粒～塊状の黄褐色シルトとカーボン小塊を多 量含み、B ₂ 層は塊状のにぶい黄褐色シルトを含む。 C層—黒褐色土を主体とする層で、粒～塊状の暗褐色土、カーボン・焼土を含む。C ₃ 層は暗褐色土の割合が高く、下層ほどしまりがなく、軟らかい。 D層—暗褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色シルトを少量含む。多量のカーボン小塊、 少量の砂礫を含む。しまりがなく、軟らかい。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.37～0.58m で、直立気味に立ち上がる。北東隅の壁上面 部に被熱を受けて赤変化した熱浸透層が確認される。
底の状態	北に掘り込みがあり、底面は凹凸である。
出土遺物	A層からあかやき土器壺の摩滅した破片が出土している。
時 期	古代以降

R D 2 2 1 1 土坑（第 34 図）

位 置	調査区南 (G 1 - H 3 + 4 区) 平 面 形 不整長方形
規 模	残存部長軸—上端 1.81m, 下端 1.70m, 短軸—上端 1.14m, 下端 0.99m

重複関係	R D 2204 (古)	掘込面	削平	検出面	III層上面
埋土 自然堆積でA・B層に大別され、A層はさらに2層に細分される。					
A層—黒褐色土を主体とし、にぶい黄褐色シルトを含む。混入土のにぶい黄褐色シルトについて、A ₁ 層は小量の粒状、A ₂ 層は微量の粒～塊状である。					
B層—褐色シルトを主体とし、塊状の黒色土を少量含む。					
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.17～0.22mで、外傾して立ち上がる。					
底の状態 ほぼ平坦であるが、南東に向かって若干傾斜する。					
出土遺物 A層からあかやき土器壺破片、僅かに土師器壺・甕の小破片が出土し、A・B層とともに磁器碗、肥前焼碗の各破片が出土している。					
時期	近世				

R D 2212 土坑（第35図）

位置	調査区南東 (G 1-J4・5区)	平面形	不整橢円形
規模	長軸—上端1.10m以上、下端0.90m以上、短軸—上端0.50m以上、下端0.32m以上		
重複関係 なし			
埋土 自然堆積でA～C層に大別され、A層は3層、B層は2層に細分される。			
A層—暗褐色土と黒褐色土の混合土で、粒～小塊状の褐色シルトを少量含む。カーボン粒～小塊を含む。A ₂ 層は褐色シルトの割合が一番高い。			
B層—にぶい黄褐色シルトを主体とし、塊状の暗褐色土を多く含む。B ₁ 層は微量の焼土粒を含み、B ₂ 層は暗褐色土の包含率が高い。			
C層—黒褐色土を主体とし、粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを少量含む。			
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.39～0.47mで、外傾して立ち上がる。			
底の状態 ほぼ平坦である。			
出土遺物 (第54図6) 6は将棋駒状の磁器で、4面に染付で「別當塚」と描かれる。その他、A層からあかやき土器壺・小型甕、須恵器壺及び土師器甕、B層からあかやき土器壺と土師器壺の各小破片が出土している。またB層から磁器碗の破片が出土している。			
時期	近世		

R G 616 溝跡（第36図）

位置	調査区北
平面形 東西方向にやや屈曲しながらのびる。	
規模	総延長14.18m以上、上端幅-0.29～0.46m、下端幅-0.17～0.37m
重複関係 R A 678・680・682 (古)	
埋土	自然堆積で、黒褐色土を主体とし、粒状のにぶい黄褐色シルトを少量含む単層である。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.07～0.11mで、外傾して立ち上がる。	
底の状態 ほぼ平坦であるが、西側に向かって徐々に深くなる。	
出土遺物 あかやき土器壺・甕、土師器壺・甕及び須恵器大甕の小破片が出土している。	
時期	古代以降

R G 6 1 7 溝跡（第 37 図）

位 置	調査区中央北～南東
平 面 形	北側は南北にやや屈曲しながら、南側は北西から南東にほぼ直線状にのびる（調査区外）。
規 模	総延長 25.65m 以上、上端幅 -0.29 ~ -0.54m、下端幅 -0.20 ~ -0.40m
重複関係	R A 686・688・694・699・701（古）、R G 622（新）
掘 込 面	削平 検出面 III 層上面
埋 土	自然堆積で A～C 層に大別され、B 層はさらに 2 層に細分される。 A 層 - 黒褐色土を主体とし、粒状の暗褐色土を微量含む。 B 層 - 黒褐色土を主体とする層で、B ₁ 層は小塊状の褐色シルトを多量含み、B ₂ 層は粒～小塊状のぶい黄褐色シルトを含む。 C 層 - 褐色シルトを主体とし、小塊状の暗褐色土を少量含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.05 ~ 0.10m で、外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	A 層から須恵器坏、あかやき土器坏・甕及び土師器坏・甕の摩滅した小破片が出土している。その他、磁器碗の破片も出土している。
時 期	近世

R G 6 1 8 溝跡（第 36 図）

位 置	調査区中央北
平 面 形	南北方向にほぼ直線状にのびる。
規 模	総延長 5.56m、上端幅 -0.28 ~ -0.38m、下端幅 -0.20 ~ -0.29m
重複関係	R A 686（古） 掘込面 削平 検出面 III 層上面
埋 土	自然堆積で、粒状の黄褐色シルトを少量含む、黒褐色土と暗褐色土の混合土である。カーボン粒を少量含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.04 ~ 0.06m で、外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	あかやき土器坏、土師器甕の破片が出土している。
時 期	古代以降

R G 6 1 9 溝跡（第 36 図）

位 置	調査区中央西
平 面 形	北西～南東方向にほぼ直線状にのびる。
規 模	総延長 8.98m、上端幅 -0.28 ~ -0.46m、下端幅 -0.14 ~ -0.31m
重複関係	R A 690（古） 掘込面 削平 検出面 III 層上面
埋 土	自然堆積で A～C 層に大別される。 A 層 - 黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の暗褐色土を微量含む。 B 層 - ぶい黄褐色シルトを主体とし、塊状の暗褐色土を多量含む。 C 層 - 暗褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを僅かに含む。

壁の状態	検出面から底面までの深さは0.09~0.11mで、外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	A層からあかやき土器壺・甕、須恵器大甕の摩滅した破片が出土している。
時期	古代以降

R G 6 2 0 溝跡（第38図）

位置	調査区中央
平面形	南北から北東にほぼ直線状にのび、東側では北方向に分岐する。
規模	総延長6.72m、上端幅-0.42~0.62m、下端幅-0.27~0.52m
重複関係	R A 694（古） 挖込面 削平 検出面 III層上面
埋土	自然堆積でA・B層に大別され、A層はさらに2層に細分される。 A層-黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の暗褐色土を含む。A ₁ 層は暗褐色土の割合が非常に高い。 B層-黒色土を主体とし、粒～小塊状の褐色～黄褐色シルトを多く含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.07~0.18mで、外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	A層から土師器壺・甕、須恵器壺・壺の破片、B層からあかやき土器甕、土師器壺・甕の破片が出土しているが、いずれも摩滅している。その他、A層から肥前焼の青磁皿、湯呑碗の破片が出土している。
時期	近世

R G 6 2 1 溝跡（第38図）

位置	調査区中央～東
平面形	東西方向にほぼ直線状にのびる（調査区外）。
規模	総延長8.13m以上、上端幅-0.34~0.46m、下端幅-0.25~0.34m
重複関係	なし 挖込面 削平 検出面 III層上面
埋土	自然堆積でA・B層に大別される。 A層-黒褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを僅かに含む。 B層-黄褐色シルトを主体とし、粒～小塊状の黒褐色土を多く含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.05~0.10mで、外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	（第54図7）7はあかやき土器の小型壺で、体部下半～底部が残存する。底部の切り離しは静止糸切無調整である。その他、あかやき土器甕、土師器壺・甕、肥前焼の茶碗、染付手塙皿の各破片がA層から出土している。
時期	近世

RG 622 溝跡（第38図）

位 置	調査区中央南
平 面 形	東西方向にやや屈曲しながら、直線状にのびる（調査区外）。
規 模	総延長 17.56m 以上、上端幅 0.30~0.62m、下端幅 0.21~0.45m
重複関係	R D2207、RG 617（古） 挖込面 削平 検出面 Ⅲ層上面
埋 土	自然堆積で A~C 層に大別される。 A 層 - 黒褐色土を主体とし、粒状のぶい黄褐色シルトを少量含む。 B 層 - 塊状の黄褐色シルトを少量含む、黒色土と暗褐色土の混合土。 C 層 - 褐色シルトを主体とし、粒状の黒褐色土を微量含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.07~0.14m で、外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	A 層からあかやき土器甕、須恵器長頸瓶の破片が出土しているほか、肥前焼の染付碗と湯呑碗の破片が出土している。
時 期	近世

ピット群（第5・39図）

調査区の北西を除くほぼ全域から 118 口のピット（P 1 ~ 118）が検出されている。検出面はⅢ層上面である。埋土は黒褐色土や暗褐色土が主体となるものが多い。柱痕跡が認められるピットは P 3・5・28・65・72・73・79・81・84・85・103・118 である。またピットから出土した遺物は須恵器、あかやき土器、土師器、陶磁器の小破片で摩滅しているものが多い。各ピットの規模及び検出面からの深さは以下のとおりである。

P 1 - 径 0.20m、深さ 0.9m・P 2 - 径 0.22m、深さ 0.11m・P 3 - 径 0.25m、深さ 0.14m・P 4 - 径 0.21m、深さ 0.18m・P 5 - 径 0.22m、深さ 0.14m・P 6 - 径 0.25m、深さ 0.19m・P 7 - 径 0.27m、深さ 0.13m・P 8 - 径 0.33m、深さ 0.30m・P 9 - 径 0.26m、深さ 0.13m・P 10 - 径 0.22m、深さ 0.24m・P 11 - 径 0.24m、深さ 0.13m・P 12 - 径 0.32m、深さ 0.14m・P 13 - 径 0.16m、深さ 0.08m・P 14 - 径 0.26m、深さ 0.10m・P 15 - 径 0.19m、深さ 0.12m・P 16 - 径 0.49m、深さ 0.08m・P 17 - 径 0.32m、深さ 0.27m・P 18 - 径 0.23m、深さ 0.09m・P 19 - 径 0.18m、深さ 0.11m・P 20 - 径 0.29m、深さ 0.11m・P 21 - 径 0.25m、深さ 0.10m・P 22 - 径 0.24m、深さ 0.10m・P 23 - 径 0.22m、深さ 0.11m・P 24 - 0.80m、深さ 0.10m・P 25 - 径 0.22m、深さ 0.10m・P 26 - 径 0.36m、深さ 0.13m・P 27 - 径 0.21m、深さ 0.09m・P 28 - 径 0.28m、深さ 0.16m・P 29 - 径 0.28m、深さ 0.11m・P 30 - 径 0.38m、深さ 0.06m・P 31 - 径 0.22m、深さ 0.17m・P 32 - 径 0.35m、深さ 0.14m・P 33 - 径 0.30m、深さ 0.27m・P 34 - 残存部径 0.79m、深さ 0.11m・P 35 - 径 0.35m、深さ 0.11m・P 36 - 径 0.28m、深さ 0.20m・P 37 - 径 0.34m、深さ 0.15m・P 38 - 径 0.33m、深さ 0.16m・P 39 - 径 0.28m、深さ 0.22m・P 40 - 径 0.43m、深さ 0.29m・P 41 - 径 0.25m、深さ 0.12m・P 42 - 径 0.30m、深さ 0.09m・P 43 - 径 0.23m、深さ 0.17m・P 44 - 径 0.26m、深さ 0.13m・P 45 - 0.24m、深さ 0.06m・P 46 - 径 0.34m、深さ 0.07m・P 47 - 径 0.19m、深さ 0.16m・P 48 - 径 0.28m、深さ 0.17m・P 49 - 径 0.26m、深さ 0.07m・P 50 - 径 0.22m、深さ 0.07m・P 51 - 径 0.31m、深さ 0.13m・P 52 - 径 0.25m、深さ 0.21m・P 53 - 径 0.23m、深さ 0.13m・P 54 - 径

0.28m, 深さ 0.20m・P 55-径 0.43m, 深さ 0.22m・P 56-径 0.25m, 深さ 0.14m・P 57-径 0.24m, 深さ 0.17m・P 58-径 0.25m, 深さ 0.10m・P 59-径 0.26m, 深さ 0.15m・P 60-径 0.23m, 深さ 0.18m・P 61-径 0.43m, 深さ 0.10m・P 62-径 0.28m, 深さ 0.17m・P 63-径 0.24m, 深さ 0.09m・P 64-径 0.25m, 深さ 0.14m・P 65-径 0.43m, 深さ 0.24m・P 66-径 0.25m, 深さ 0.21m・P 67-径 0.25m, 深さ 0.28m・P 68-径 0.50m, 深さ 0.17m・P 69-径 0.26m, 深さ 0.13m・P 70-径 0.25m, 深さ 0.08m・P 71-径 0.31m, 深さ 0.07m・P 72-径 0.30m, 深さ 0.14m・P 73-径 0.67m, 深さ 0.14m・P 74-径 0.20m, 深さ 0.10m・P 75-径 0.23m, 深さ 0.16m・P 76-径 0.23m, 深さ 0.20m・P 77-径 0.27m, 深さ 0.08m・P 78-径 0.27m, 深さ 0.12m・P 79-径 0.25m, 深さ 0.13m・P 80-径 0.62m, 深さ 0.15m・P 81-径 0.30m, 深さ 0.16m・P 82-径 0.25m, 深さ 0.18m・P 83-径 0.20m, 深さ 0.08m・P 84-径 0.25m, 深さ 0.26m・P 85-径 0.25m, 深さ 0.20m・P 86-径 0.23m, 深さ 0.22m・P 87-径 0.30m, 深さ 0.16m・P 88-径 0.28m, 深さ 0.10m・P 89-径 0.17m, 深さ 0.11m・P 90-径 0.20m, 深さ 0.07m・P 91-径 0.31m, 深さ 0.09m・P 92-径 0.23m, 深さ 0.12m・P 93-径 0.25m, 深さ 0.22m・P 94-径 0.19m, 深さ 0.12m・P 95-径 0.23m, 深さ 0.07m・P 96-径 0.41m, 深さ 0.12m・P 97-径 0.24m, 深さ 0.09m・P 98-径 0.33m, 深さ 0.10m・P 99-径 0.29m, 深さ 0.06m・P 100-径 0.36m, 深さ 0.16m・P 101-径 0.30m, 深さ 0.13m・P 102-径 0.47m, 深さ 0.23m・P 103-径 0.48m, 深さ 0.15m・P 104-径 0.30m, 深さ 0.09m・P 105-径 0.20m, 深さ 0.12m・P 106-径 0.14m, 深さ 0.09m・P 107-径 0.22m, 深さ 0.21m・P 108-径 0.58m, 深さ 0.15m・P 109-径 0.26m, 深さ 0.16m・P 110-径 0.21m, 深さ 0.19m・P 111-0.23m, 深さ 0.25m・P 112-径 0.22m, 深さ 0.10m・P 113-径 0.22m, 深さ 0.14m・P 114-径 0.18m, 深さ 0.20m・P 115-径 0.20m, 深さ 0.09m・P 116-径 0.19m, 深さ 0.17m・P 117-径 0.26m, 深さ 0.10m・P 118-径 0.30m, 深さ 0.30m

遺構外遺物

調査区内の竪穴建物跡埋土や床構築土中から縄文時代の遺物が僅かに出土している。本遺跡の立地する沖積段丘上では縄文時代の遺構・遺物の発見は極めて少ないが、過去の調査で縄文時代晩期を中心とする遺構が確認されている。本調査で縄文土器の破片が出土したのは、R A683・686 竪穴建物跡であり、いずれも周辺からの流入とみられる。

出土遺物（第54図8） 8は縄文時代晩期の深鉢で、頭部～体部上半である。頭部は無文で、体部にはL.R単節縄文を横位に施す。外面には煤状炭化物、内面には輪積痕が観察される。

III 調査のまとめ

台太郎遺跡第80次調査の結果、奈良時代の竪穴建物跡4棟（RA671～673・679）、土坑2基（RD2186・2187）、平安時代の竪穴建物跡27棟（RA674～678・680～701）、掘立柱建物跡1棟（RB142）、土坑5基（RD2188～2192）、古代以降の土坑20基（RD2193～2212）、溝跡7条（RG616～622）、ピット118口が検出された。

遺構・遺物 奈良時代の竪穴建物跡は調査区中央から北に点在し、出土遺物から8世紀中葉の年代が考えられるのは、RA673・679竪穴建物跡である。また、8世紀後葉（もしくは8世紀後葉～9世紀前葉）と考えられるのは、RA671・672竪穴建物跡である。その後の9世紀代の竪穴建物群の構築によって住居の平面形が確認できるのは、RA673竪穴建物跡のみである。規模は一辺2.4mの小型住居で、カマドは北西方向に構築され、本遺跡で検出されている奈良時代の竪穴建物跡の主たるカマド方向と共通する。カマド基底部は礎を構築材として使用し、煙道は割り貫き式のトンネル状である。

出土遺物や遺構の重複関係から奈良時代（8世紀）と考えられる土坑はRD2186・2187である。RD2186土坑の底面には土師器甕が倒立の状態で埋設し、その周辺には熱浸透層が認められ、土坑内で火を焚いた可能性が考えられる。RD2187土坑からは土師器壺・甕とともに土製紡錘車が出土している。

平安時代 平安時代の竪穴建物跡は、調査区内のほぼ全域に広がっている。9世紀中葉と考えられるのは、RA682・695・697・699・700の5棟である。規模は小型住居のRA695竪穴建物跡が一辺2.4～2.9m、中型住居のRA682・697・699・700竪穴建物跡が一辺3.0～4.3mである。RA700竪穴建物跡は東西に煙道があり、カマドの造り替え（西→東）が認められる。カマド方向は、北西カマドがRA682・700（II期）竪穴建物跡、西カマドがRA695・697竪穴建物跡、東カマドはRA700（I期）竪穴建物跡、またRA697竪穴建物跡はカマド未検出であるが、建物内のカマド崩壊土から東カマドと想定される。RA682・695竪穴建物跡のカマド基底部は小礎を構築材として使用している。RA700竪穴建物跡は壁際の一部に周溝があり、カマドの煙道は割り貫き式のトンネルである。

9世紀中葉～後葉の年代が考えられる竪穴建物跡は、RA681・691・693・696の4棟である。規模は小型住居のRA696竪穴建物跡が一辺2.6～3.0m、中型住居のRA681・691・693竪穴建物跡が一辺3.8～4.8mである。カマド方向が確認できるのは、北西カマドのRA696竪穴建物跡のみであるが、RA693竪穴建物跡内のカマド火床面の可能性がある熱浸透層の位置と建物の平面形から北西カマドと想定される。いずれもカマドは人為的に壊されている。RA696竪穴建物跡の床構築土を精査中に北東隅の床面下からピットを検出し、その底面には炭化物とともに須恵器長頸瓶の口縁部～頸部を伏せて埋納した事例が確認された。住居内の埋納方角、床下に存在することから建物構築時の地鎮と考えられる。

9世紀後葉と考えられる竪穴建物跡は、RA674・675・676・677・678・680・683・

684・686・687・690・692・694・701 の 14 棟で、本調査で検出した竪穴建物の主体を占める。8世紀中葉から9世紀中葉にかけて、竪穴建物跡の重複は認められないが、9世紀後葉になると重複が認められ、とくに調査区北では重複が激しい。規模は中型住居の R A674・675・676・677・678・683・690・692・694・701 竪穴建物跡が一辺 3.2 ~6.1m、大型住居の R A680・686・687 竪穴建物跡が一辺 6.1~8.3m である。一辺 3.0 m 未満の小型住居は確認されない。カマド方向は、東カマドが R A674・675・677・683 竪穴建物跡、南東カマドが R A678・686 竪穴建物跡、北東カマドが R A687 竪穴建物跡、北西カマドが R A690 竪穴建物跡、北カマドが R A694 竪穴建物跡、西カマドが R A701 竪穴建物跡と多岐にわたる。このうち、R A677・678・683・686・687・701 竪穴建物跡はカマド基底部が残存し、R A678 竪穴建物跡は構築材として礫と土師器甕、R A683・686・687 竪穴建物跡は礫を使用している。基底部が残存しないカマドは意図的に壊していると考えられる。R A676・677 竪穴建物跡は、床面近くに炭化した建築部材や多量のカーボンを含む焼土層が一面に広がっており、焼失家屋の可能性が考えられる。R A675 竪穴建物跡から墨書きで「木」と記された土師器甕が出土している。この「木」銘墨書き・刻書土器は第18・23・51・54次調査でも出土しており、本遺跡を代表する文字とされている。南に位置する細谷地遺跡では「大」、西側に位置する本宮熊堂 B 遺跡では「成」の文字が出土し、これらは他の遺跡で出土していないことが挙げられる。また、主柱穴のピット 2 には柱材が残存し、残存長 71.5cm、最大径 8 cm で、先端部を削って尖らせている。樹種は未鑑定で不明である。

9世紀後葉～10世紀初頭の年代が考えられるのは、R A688 竪穴建物跡である。十和田 a 火山灰（西暦 915 年降灰）と考えられる灰白色火山灰が、二次堆積であるが埋土上層から床面までの各層に含まれている。隣接する遺構との切り合い関係では、R A685 竪穴建物跡（9世紀代）と R A686 竪穴建物跡（9世紀後葉）より新しい。規模は一辺 5 m 前後の中型住居で、カマドは検出されていないがカマド火床面の可能性がある熱浸透層の位置と建物の平面形から西もしくは南西カマドと想定される。

調査区南で 9 世紀と考えられる R B142 掘立柱建物跡を検出している。1 × 1 m の東西棟で、北北西に傾きをもつ。同様の傾きのある竪穴建物跡は周辺では認められず、建物の性格も不明である。9世紀の年代が考えられる土坑は R D2188・2189・2190・2191・2192 の 5 基で、調査区中央から北に分布する。規模やタイプは多岐にわたり、個々の用途は異なっていると考えられる。

古代以降 R A673 竪穴建物跡の最終堆積層から流れ込みと考えられる手捏ねのかわらけ破片が出土し、年代は 12 世紀と考えられる。12 世紀後半には遺跡南東部で埴跡による区画施設が営まれ、遺跡北東部では経塼の経筒外容器の可能性がある渥美産の灰釉小型壺が出土しており、それらとの関連性が考えられる。

まとめ 調査事例の少ない遺跡東部での調査で、奈良時代（8世紀中葉～後葉）、平安時代（9世紀中葉～10世紀初頭）の竪穴建物跡が合計 31 棟確認され、総数 700 棟を超えた。本調査では平安時代の複数の竪穴建物跡が重なり合っており、建物跡が密集する遺跡西部、中央～北部と同様な傾向が認められ、遺跡東部の集落の様相を明らかにできた。

表

回	番号	可変属性	遺物名	区分	形態	出土	寸法(cm)※光沢・復元のみ	底部切削等			背面調査	裏面等・特徴					
								平面位置	層位	鉛高	口幅	体幅	厚度	鉛高	口幅	体幅	
40	1	12	R4E71	土解器	井	F-1-X8	B	3.2	106	-	/	23	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	黒色、白口色、独土に 黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
40	2	12	+	土解器	壺	F-X8	B	-	178	15.8	-	1.1	/	-	-	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
40	3	12	R4E72	土解器	壺	貯藏穴、F-1-V9	D	-	210	20.6	-	1.0	/	-	-	黒色、白口色、裏色化粧	
40	4	12	+	土解器	壺	F-1-W8	B	-	272	24.2	-	1.1	/	-	-	黒色、白口色、裏色化粧	
40	5	12	R4E73	土解器	井	G-1-I2	漆面	4.7	16.0	-	-	3.4	丸底	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
40	6	13	+	かわらけ	-	G-1-I2	A	-	94	-	-	/	-	-	-	2世紀、手づくね	
40	7	12	+	土解器	小型壺	DVY3M-01-H02	K1	-	16.0	17.2	-	0.9	/	-	-	黒色、白口色、裏色化粧	
40	8	12	+	土解器	壺	G-1-I2	L	27.7	18.7	17.4	8.7	1.1	0.7	木蓋底	口縁部ナギ、体幅ハラカズレ 木蓋部ナギ、体幅ハラカズレ		
41	1	12	R4E79	土解器	井	G-1-D8	C	5.8	8.1	-	-	1.6	丸底、ヘラナギ、 裏蓋(+)、	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
41	2	12	+	土解器	井	G-1-C8	B	4.6	16.8	-	-	3.7	丸底、ヘラカズレ	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
41	3	12	+	土解器	井	G-1-D5	B	4.3	14.6	-	8.3	1.8	3.4	ヘラビガキ	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧
41	4	12	+	土解器	壺	G-1-C8	B	20.3	18.7	14.5	6.9	1.2	0.8	鋸歯	口縁部ナギ、体幅ハラカズレ 木蓋部ナギ、体幅ハラカズレ	口縁部ナギ、体幅ハラカズレ 木蓋部ナギ、体幅ハラカズレ	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧
41	5	12	+	土解器	壺	G-1-D6	B	-	15.0	14.6	-	1.0	/	-	-	黒色、白口色、裏色化粧	
41	6	12	R4E74	あかや土立器	井	P1.2, F-1-V9	理土	4.8	-	-	5.2	/	/	田軒ホチ無調整	-	全体に麻溝	
41	7	12	+	土解器	井	F-1-W8	L	5.5	14.8	-	5.5	2.7	2.7	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
41	8	12	+	土解器	高台付井	貯藏穴、F-1-V7	F	5.5	8.0	-	6.6	1.3	1.5	菊花文	ヘラビガキ、裏色化粧 ヘラカズレ	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
41	9	12	+	あかや土立器	小型壺	貯藏穴、F-1-V7	D	8.1	10.6	10.6	5.0	1.0	1.3	田軒ホチ無調整	-	全体に麻溝化物	
42	1	12	R4E75	あかや土立器	井	貯藏穴、F-1-W8	G1	5.4	14.0	-	5.0	2.8	2.6	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧	
42	2	12	+	あかや土立器	井	F-1-W8	L2	5.3	14.2	-	5.3	2.7	2.7	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧	
42	3	12	+	あかや土立器	井	F-1-W8	L1	5.4	14.8	-	5.5	2.7	2.7	田軒ホチ無調整	-	全体に麻溝	
42	4	12	+	あかや土立器	井	F-1-V5	D2	4.4	14.1	-	5.5	2.6	2.2	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧	
42	5	12	+	あかや土立器	井	F-1-W8	A2	5.9	16.3	-	7.1	2.3	2.8	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧	
42	6	12	+	あかや土立器	井	貯藏穴、F-1-W8	G1	5.0	15.3	-	6.5	2.4	3.1	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧	
42	7	12	+	あかや土立器	井	F-1-W8	A1	5.8	14.1	-	5.7	2.5	(2.4)	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧	
42	8	12	+	土解器	井	F-1-V5	L1	5.1	14.0	-	4.6	3.0	2.7	手持下ホタケズレ	手持下ホタケズレ	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
42	9	12	+	土解器	井	F-1-V5	L2	5.4	13.8	-	6.2	2.2	2.5	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粧	
42	10	12	+	土解器	井	P1.8, F-1-W5	N	4.9	13.6	-	6.0	2.3	2.8	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粧 黒色、白口色、裏色化粈	
42	11	12	+	土解器	井	F-1-V5	B1	5.1	14.4	-	6.1	2.4	2.8	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粈	
42	12	12	+	土解器	井	F-1-V5	A	4.8	14.0	-	5.8	2.4	2.9	田軒ホチ無調整	-	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
42	13	12	+	土解器	高台付井	F-1-V5	漆面	-	-	-	2.7	/	/	菊花文	-	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
42	14	12	+	土解器	高台付井	F-1-V5	漆面	-	-	-	1.3	/	/	菊花文	-	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
42	15	12	+	遺器類	壺	力マド、F-1-X5	J5	-	-	16.0	10.0	/	/	体持下ホタケズレ	-	-	
43	1	-	R4E76	あかや土立器	井	G-1-C8	C	5.4	14.2	-	-	2.6	車輪	-	-	-	
43	2	13	+	あかや土立器	井	G-1-A8	A	4.4	13.1	-	6.2	2.1	3.0	田軒ホチ無調整	-	外側T字状付物	
43	3	13	+	土解器	井	No.1, F-1-Y6	漆面	-	-	-	5.8	/	/	ヘラナギ	ヘラナギ	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
43	4	13	+	土解器	井	No.2, G-1-A8	漆面	6.1	14.8	-	7.2	2.1	2.4	剣豪(十)、ヘラナギ	ヘラナギ	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
43	5	13	+	土解器	井	G-1-B8	C	5.5	16.4	-	6.4	2.6	3.0	田軒ホタケズレ	-	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
43	6	13	+	土解器	壺	No.3, G-1-A8	漆面	-	17.4	18.2	-	1.0	/	-	口縁部ナギ、体持下ホタケズレ	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
43	7	13	+	遺器類	象頭瓶	G-1-C8	C	-	11.1	14.6	-	0.8	/	-	-	内外面状態	
43	8	13	+	遺器類	象頭瓶	P1.2, F-1-Y8	E2	-	11.2	18.8	-	0.6	/	-	田軒ホタケズレ	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
44	1	13	R4E77	土解器	井	禮藏、G-1-B5	J5	4.4	13.9	-	6.2	2.2	3.2	ヘラカズレ	-	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
44	2	13	+	土解器	井	貯藏穴、G-1-B5	C2	6.5	16.4	-	5.2	3.2	2.4	田軒ホチ無調整	ヘラビガキ、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈		
44	3	13	+	土解器	井	G-1-B5	B	5.0	12.9	-	6.5	2.1	2.8	田軒ホチナギ、ヘラカズレ	ヘラビガキ、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈		
44	4	13	+	土解器	井	P1.1, G-1-B5	E1	-	-	-	6.5	/	/	ヘラナギ	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈		
44	5	13	+	土解器	壺	禮藏L、G-1-C8	J8	-	-	-	20.2	10.7	/	/	砂底	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
44	6	13	+	土解器	壺	禮藏L、G-1-C8	J5	-	-	-	23.8	13.8	/	/	砂底	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
44	7	13	+	遺器類	玉置瓶	G-1-B5	A	25.0	10.4	18.4	7.9	0.4	-	体持下ホタケズレ	-	外表面自然、内外面状態 外表面自然	
44	8	13	+	遺器類	玉置瓶	G-1-B5	C	-	-	-	19.8	8.8	/	/	体持下ホタケズレ	-	外表面自然
44	9	13	+	遺器類	小型壺	F-1-Y5	L	-	7.0	10.4	-	0.7	/	-	-	-	
45	1	13	R4E78	土解器	小型壺	DVY実測: G-1-J	J	12.5	15.4	14.8	8.4	1.0	1.2	砂底	口縁部ナギ、体持下ホタケズレ	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	
45	2	13	+	土解器	壺	DVY実測: G-1-J	J	-	-	-	BB	/	/	砂底	田軒下ナギ	黒色、白口色、裏色化粈 黒色、白口色、裏色化粈	

第2表 台太郎遺跡第80次調査出土遺物観察表 古代土器（1）

回	番号	可変性	遺物名	区分	種類	出土位置	層位	断面	口幅	厚壁	底面	底面形状	底面寸法(単位:cm)	寸法(cm)※変形・復元のみ	底部切削等	断面調査		墨書き・特徴		
																外観	内面			
45	3	13	RA676	土師器	壺	ガマフ、G-1-H7	J2	31.1	21.0	23.1	10.5	0.9	0.7	砂漠	口縁部ナデ、体部へラズリ	口縁部へナデ、体部へラズリ	複数個、外面焼成化物			
45	4	13	"	土師器	壺	ガマフ、G-1-H7	J2	29.1	19.6	18.7	11.1	1.0	0.7	本底底	口縁部ナデ(体部へラズリ)へカズレ	口縁部へナデ(体部へラズリ)へカズレ	複数個、外面焼成化物			
45	5	13	"	土師器	壺	GVV-016、G-1-H7	K1	26.6	19.1	20.4	10.0	0.9	0.7	砂漠	口縁部ナデ、体部へラズリ	口縁部ナデ	外面焼成化物			
46	1	13	RA680	あかや土器	壺	G-1-D6	L	5.7	14.8	-	5.5	2.7	2.8	田輪舟切無調整	-	-	外面焼成化物、全体に墨脱			
46	2	13	"	土師器	壺	G-1-D6	J	5.0	14.6	-	6.9	2.1	2.9	ヘラナデ	-	-	ヘラナデ、黑色處理	(墨脱)		
46	3	13	"	土師器	壺	G-1-E6	A	26.1	17.2	22.0	10.5	0.8	0.6	本底底	口縁部ナデ(体部へラズリ)へカズレ	口縁部ナデ(体部へラズリ)へカズレ	外面焼成化物			
46	4	13	"	漆器	大器	G-1-E6	A	-	34.0	-	-	/	/	-	-	タリキ目(平行文)	タリキ目(平行文)			
46	5	13	RAB81	土師器	壺	G-1-F5	C2	-	13.6	-	-	/	/	-	-	ヘラナデ、黑色處理	ヘラナデ、黑色處理			
46	6	13	"	土師器	壺	G-1-J5	A	5.2	14.8	-	6.2	2.4	2.8	ヘラケズリ	体部下端へカズレ	ヘラケズリ	ヘラケズリ、黑色處理			
46	7	12	RA682	漆器	壺	G-1-K7	J	-	-	6.4	/	/	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-		
46	8	12	"	漆器	壺	G-1-K8	保底	-	15.4	-	-	/	/	-	-	-	-	-		
46	9	12	"	漆器	壺	G-1-L7	B1	4.9	14.2	-	5.5	2.6	2.9	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-	
46	10	12	"	漆器	壺	G-1-L8	A1	-	-	5.6	/	/	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-		
46	11	12	"	土師器	壺	GVV-016、G-1-K7	K	5.0	12.8	-	5.4	2.4	2.6	田輪舟切無調整	口縁部下へラズリ	ヘラズリ、黑色處理	外面や墨脱			
46	12	13	"	あかや土器	小型壺	GVV-016、G-1-K7	J	-	16.2	17.0	-	1.0	/	-	体部下半へカズレ	-	-	内面焼成化物		
46	13	13	"	あかや土器	壺	GVV-016、G-1-K7	K	-	22.6	20.4	-	1.1	/	-	-	体部上半力キメ	-			
46	14	13	"	土師器	壺	G-1-K7	R2	-	21.0	-	-	/	/	-	口縁部ナデ、体部上半へラズリ	口縁部ナデ、体部上半へラズリ	全体に墨脱			
47	1	13	RA683	あかや土器	壺	P14.1-F-1-V9	G	4.6	14.8	-	5.5	2.7	2.1	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-	
47	2	13	"	あかや土器	壺	P14.1-F-1-V9	G	4.3	14.2	-	5.0	2.8	3.0	田輪舟切無調整	-	-	口縁部墨脱			
47	3	13	"	あかや土器	高台村付	G-1-A9	J	5.8	16.8	-	7.6	2.2	2.9	-	-	-	-	-	-	
47	4	13	"	土師器	壺	標準、G-1-A9	J7	4.4	14.0	-	6.2	2.3	2.2	田輪舟切無調整	-	-	ヘラズリ、黑色處理	墨脱		
47	5	13	"	土師器	壺	約底丸、G-1-A9	F	5.3	14.1	-	6.2	2.3	2.7	ヘカズリ	-	-	ヘラズリ、黑色處理	ヘラズリ、黑色處理	外面焼成化物	
47	6	13	"	土師器	壺	F-1-Y9	E	4.7	14.4	-	6.2	2.3	2.1	田輪舟切無へカズレ	田輪舟切無	-	ヘラズリ、黑色處理			
47	7	13	"	土師器	壺	G-1-A9	L	6.6	17.1	-	5.7	3.0	2.6	ヘラズリ、黑色處理	ヘラズリ、黑色處理	ヘラズリ、黑色處理	外面焼成化物			
47	8	13	"	土師器	壺	G-1-A9	E	30.0	19.2	20.9	11.0	0.9	0.6	本底底	口縁部ナデ、体部へラズリ	口縁部ナデ、体部へラズリ	外面焼成化物			
47	9	13	"	漆器	壺	G-1-A10	L	-	-	25.8	-	/	/	-	体部下半へカズレ	体部下半へカズレ	全体に墨脱			
47	10	-	RA685	あかや土器	小型壺	F-1-C8	L	-	-	6.6	/	/	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-		
48	1	14	RA686	漆器	壺	G-1-F8	L	5.2	14.2	-	6.1	2.3	2.7	田輪舟切無調整	-	-	並ね縫合			
48	2	14	"	漆器	壺	G-1-G8	L	4.4	15.6	-	5.5	2.8	3.5	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-	
48	3	14	"	漆器	壺	G-1-G11	G	4.9	14.9	-	4.7	3.2	3.0	田輪舟切無調整	-	-	並ね縫合			
48	4	14	"	漆器	壺	G-1-G11	B	4.5	14.5	-	6.2	(2.3)	(3.2)	田輪舟切無へカズレ再調整	-	-	-	-	-	
48	5	14	"	土師器	壺	G-1-G8	L	-	-	6.0	/	/	田輪舟切無へカズレ再調整	-	-	ヘラズリ、黑色處理				
48	6	14	"	土師器	壺	G-1-F10	A	5.3	13.6	-	5.6	2.4	2.6	田輪舟切無調整	ヘラズリ	ヘラズリ、黑色處理	外面焼成化物			
48	7	14	"	土師器	壺	P14.2-G-1-H1	G	-	24.0	21.6	-	1.1	/	-	口縁部ナデ、体部へラズリ	口縁部ナデ、体部へラズリ	内面焼成化物の土粘材			
49	1	14	RA687	漆器	壺	G-1-H10	標準	4.8	14.2	-	6.1	2.3	3.1	田輪舟切無調整	-	-	重ね縫合			
49	2	14	"	あかや土器	壺	G-1-K10	L	5.3	13.4	-	6.0	(2.2)	(2.5)	田輪舟切無調整	-	-	全体に墨脱			
49	3	14	"	あかや土器	壺	G-1-J9	A2	-	5.1	13.8	-	(6.0)	(2.3)	田輪舟切無調整	-	-	内面焼成化物	全体に墨脱		
49	4	14	"	あかや土器	壺	G-1-K9	A2	(4.7)	13.3	-	5.6	(2.1)	(2.6)	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-	
49	5	14	"	あかや土器	壺	G-1-J10	標準	5.1	12.0	-	5.6	2.1	2.4	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-	
49	6	14	"	あかや土器	小型壺	G-1-J9	A2	-	16.0	18.4	-	1.0	/	-	-	-	-	-		
49	7	14	"	あかや土器	壺	G-1-G-1-J9	床面	-	20.5	17.8	-	1.2	/	-	口縁部ナデ、体部へラズリ	口縁部ナデ、体部へラズリ	内面焼成化物			
49	8	14	"	土師器	壺	No.1-G-1-J9	床面	-	-	-	-	-	-	田輪舟切無調整	田輪舟切無調整	ヘラズリ、黑色處理	ヘラズリ、黑色處理	内面焼成化物		
49	9	14	RA688	土師器	壺	G-1-E9	D2	4.4	14.6	-	7.1	2.1	3.3	ヘラナデ	体部下端へカズレ	ヘラナデ	ヘラナデ、黑色處理			
49	10	14	"	土師器	壺	G-1-O10	L	-	16.0	-	-	/	/	-	-	ヘラズリ、黑色處理	ヘラズリ			
49	11	14	"	土師器	高台村付	G-1-O10	D2	4.6	12.6	-	7.1	1.8	2.7	南支文	-	-	ヘラズリ、黑色處理			
50	1	14	RA690	あかや土器	壺	約底丸、G-1-B14	D	5.1	14.4	-	5.8	2.5	2.8	田輪舟切無調整	-	-	-	-	-	
50	2	14	"	あかや土器	壺	約底丸、G-1-B14	D	-	15.2	-	-	/	/	-	-	-	-	-		
50	3	14	"	あかや土器	壺	G-1-A16	C	5.2	14.1	-	4.9	2.9	2.7	田輪舟切無調整	-	-	口縁部墨脱、全体に墨脱			
50	4	14	"	土師器	壺	約底丸、G-1-B14	D	5.1	14.0	-	6.1	2.3	2.7	筆洗	-	-	ヘラズリ、黑色處理			
50	5	14	"	土師器	小型壺	G-1-B14	L	-	10.0	9.8	-	1.0	/	-	口縁部ナデ、体部上半へラズリ	口縁部ナデ、体部上半へラズリ	内面焼成化物			
50	7	14	RA692	あかや土器	壺	G-1-L14	A	-	13.8	-	-	/	/	-	-	-	-	-		

第3表 台太郎遺跡第80次調査出土遺物觀察表 古代土器（2）

国	番号	有無	遺物名	区分	形態	出土	寸法(cm)※光沢・復元のみ				底部切端等	器表調査		書類等-特徴			
							平面位置	層位	最高	口幅	体幅	底幅	①後(後側) ②後(後側)	③後(後側)			
50	8	14	RAS02	あかやき立皿	片	G-1-L14	A	-	14.4	-	/	/	-	-	-		
50	9	14	〃	遺物器	片	G-1-L14	A	-	-	8.6	/	/	回転糸切端調整	-	-		
50	10	14	〃	土師器	盤	Pt2, G-1-L14	D2	-	19.0 (20.0)	-	1.0	/	-	口縁部ナデ、体部上半ヘラケズリ	内面摩滅		
50	11	14	RAS03	あかやき立皿	片	G-1-G18	A'	-	13.8	-	/	/	-	-	-		
50	12	14	RAS04	あかやき立皿	片	G-1-E17	A2	-	-	6.0	/	/	回転糸切端調整	-	-		
50	13	14	〃	土師器	裏付け付	G-1-F17	L	-	-	(5.8)	/	/	ナデ	-	内面摩滅		
51	1	14	RAS05	遺物器	片	G-1-H16	J3	-	13.6	-	/	/	-	-	-		
51	2	14	〃	遺物器	片	G-1-H16	A1	-	-	5.4	/	/	回転糸切端調整	-	-		
51	3	14	〃	あかやき立皿	片	G-1-H16	B	-	14.0	-	/	/	-	-	-		
51	4	14	〃	土師器	片	Pt2, G-1-H16	F2	-	14.0	-	/	/	-	ヘラガキ、黒色處理	-		
51	5	14	〃	土師器	片	Pt4, G-1-H16	F1	5.0	14.0	-	8.1	2.3	2.8	回転糸切端調整	口縁部下ヘラガキ ヘラガキ、黒色處理		
51	6	15	RAS06	あかやき立皿	片	G-1-K16	L	4.9	13.6	-	4.6	3.0	2.8	回転糸切端調整	-	-	
51	7	14	〃	あかやき立皿	片	G-1-K16	L	-	20.0	-	/	/	-	-	粘土に富む含む		
51	8	15	〃	遺物器	瓶	Mt3, G-1-K16	F	-	12.1	-	/	/	-	-	内外面自然剥離		
51	9	—	RAS07	遺物器	片	G-1-K18	裏面	-	-	8.0	/	/	回転糸切端調整	-	-		
51	10	15	〃	遺物器	片	G-1-K18	D2	5.4	15.2	-	6.0	2.5	2.8	回転糸切端調整	-	-	
51	11	—	あかやき立皿	片	G-1-L18	L	5.0	13.2	-	(5.6)	(2.3)	2.6	回転糸切端調整	-	-		
51	12	15	〃	あかやき立皿	片	G-1-L18	L-	4.4~12	14.1	-	4.5	3.1	2.7~3.2	回転糸切端調整	口縁部内		
51	13	—	あかやき立皿	片	G-1-L18	L	-	14.0	-	/	/	-	-	-			
51	14	15	〃	あかやき立皿	片	G-1-K18	A	4.7~5.3	13.0	-	5.2	2.5	2.3~2.8	回転糸切端調整	-	口縁部含み、全体に層 記、底部に砂利多く含む	
51	15	15	〃	土師器	片	G-1-K18	C	5.0	13.4	-	5.4	2.5	2.7	ヘラケズリ、裏端	ヘラガキ、黒色處理 (裏)	内面摩滅	
51	16	15	〃	土師器	裏	G-1-L18	裏面	-	24.4	22.8	-	1.1	/	-	口縁部ナデ、体部上半 ヘラケズリ	ヘラガキ、体部上半 ヘラケズリ	
51	17	15	〃	土師器	裏	G-1-L18	J	-	18.5	17.0	-	1.0	/	-	口縁部ナデ、体部上半 ヘラケズリ	ヘラガキ、体部上半 ヘラケズリ	
51	18	—	RAS08	あかやき立皿	片	G-1-K23	A2	-	-	6.3	/	裏面	-	-	-	内外面摩滅	
52	1	15	RAS09	遺物器	片	G-1-J24	B	4.3	14.4	-	8.5	2.2	3.3	回転糸切端調整	-	-	
52	2	15	〃	あかやき立皿	片	G-1-K24	L	-	14.0	-	/	/	-	-	内外面摩滅		
52	3	15	〃	土師器	片	G-1-K24	B	-	-	4.6	/	/	ヘラケズリ、重ね焼き痕	-	ヘラガキ、黒色處理 (裏)		
52	4	15	〃	土師器	片	G-1-K24	B	-	14.4	-	/	/	-	-	ヘラガキ、黑色處理		
52	5	15	〃	あかやき立皿	裏	No.2, G-1-K24	裏面	-	24.2	24.2	-	1.0	/	-	体部下端ヘラケズリ 体部上半ナメキ	体部上半ナメキ	
52	6	15	〃	あかやき立皿	裏	G-1-K24	B	-	19.9	18.4	-	1.1	/	-	体部上半ナメキ	体部上半ナメキ	
53	1	15	RAS100	あかやき立皿	片	No.2, G-1-F14	裏面	6.0	14.6	-	5.2	2.8	2.4	回転糸切端調整	-	内外面摩滅化物	
53	2	15	〃	遺物器	片	No.3, G1-D3	裏面	7.0	15.6	-	6.6	2.4	2.2	回転糸切端調整	火燐	重ね焼き痕	
53	3	15	〃	あかやき立皿	片	G1-D3	B	4.9	13.4	-	5.4	2.5	2.7	回転糸切端調整	-	粘土に砂利多く含む	
53	4	15	〃	土師器	裏付け付	G1-F2	B	-	-	6.8	/	/	回転糸切端調整	-	ヘラガキ、黒色處理		
53	5	15	〃	あかやき立皿	裏	埋出し, G1-D3	J'	-	20.6	20.3	-	1.0	/	-	口縁部下端ヘラケズリ 埋出しナメキ	口縁部下端ヘラケズリ 埋出しナメキ	
53	6	15	〃	あかやき立皿	裏	G1-E3	G1	-	22.6	22.8	-	1.0	/	-	体部下端ヘラケズリ	内面摩滅	
53	7	15	〃	土師器	小型裏	G1-D3	A	-	9.2	5.8	-	1.6	/	-	口縁部ナデ、体部ヘ ラケズリ	ナデ	
53	8	15	〃	土師器	裏	No.1, G1-F3	裏面	22.6	21.5	21.6	8.9	1.0	0.7	ナデ	口縁部ナデ、体部ヘ ラケズリ		
52	7	—	RAS101	あかやき立皿	片	G1-J2	B	-	14.8	-	/	/	-	-	-	内外面摩滅	
52	8	—	〃	土師器	片	G1-J3	J1	-	14.0	-	/	/	-	-	ヘラガキ、黒色處理	-	
52	9	15	〃	土師器	片	埋焼穴, G1-J2	E	5.3	13.6	-	5.0	2.7	2.6	回転糸切端調整	口縁部下ヘラガキ	ヘラガキ、黒色處理	
52	10	15	〃	土師器	裏	Pt1, G1-J5	H1	-	17.8	16.4	-	1.1	/	-	口縁部ナデ、体部ヘ ラケズリ	口縁部ナデ、体部上半 ヘラケズリ	
52	11	15	〃	土師器	裏	古墳便土, G1-J4	J	-	19.9	11.8	-	/	ヘラケズリ	体部下端ヘラケズリ	内面状況化物		
52	12	15	〃	土師器	裏	G1-J4	D	-	23.0	23.8	-	1.0	/	-	口縁部ナデ、体部上半 ヘラケズリ	内面摩滅(荒丸)	
54	1	15	RQ218E	土師器	裏	F-1-YE	裏面	35.9	21.0	17.5	7.9	1.2	0.6	ヘラナデ	口縁部ナデ、体部ヘ ラケズリ	表面、外壁保護化物 表面、外壁保護化物	
54	2	16	RQ218T	土師器	裏	F-1-WG	D	-	-	16.7	7.2	/	/	木炭末+ヘラナデ	体部下端ヘラナデ	表面、外壁保護化物 表面、外壁保護化物	
54	3	16	〃	土師器	裏	F-1-WG	C	-	17.8	15.5	-	1.1	/	-	木炭末+ヘラナデ、表面 ヘラケズリ	口縁部ナデ、体部上半 ヘラケズリ	表面
54	5	15	RQ219I	あかやき立皿	片	G-1-K12	B	4.3	14.4	-	6.2	2.3	2.3	回転糸切端調整	-	-	
54	7	15	RQ621	あかやき立皿	小型片	G-1-F17	A	-	-	-	4.6	/	/	静止糸切端調整	-	-	
54	8	16	—	縄文土器	深鉢	F-1-V10	C	-	-	-	-	/	/	-	LH表面調査	縄文時代前期、外壁保 存状況良好、内面無損傷	

第4表 台太郎遺跡第80次調査出土遺物観察表 古代土器・縄文土器 (3)

調	番号	写真 記録	遺構名	区分	器種	形態		出土		寸法(cm)			※定形・座元のみ		底部切離等	断面測量		墨書き等・特徴
						平面位置	層位	標高	口径	体積	底面	外径	内径	外径	内径	外側	内側	
41	10	12	RAE74	土製品	セニチコア型 鉢底穴 F-1-97	E	—	—	3.3	2.8	/	/	—	八ツ引手・押注	—			
41	11	12	—	土製品	セニチコア型 鉢底穴 F-1-97	E	1.2	1.9~ 3.8	—	—	/	/	—	—	—	—	舟形	

第5表 台太郎遺跡第80次調査出土遺物観察表 土製品（1）

調	番号	写真 記録	遺構名	区分	器種	形態		出土		寸法(cm)			形状		特徴
						平面位置	層位	全長	断面様						
41	12	12	RAE74	土製品	土壁	鉢底穴 F-1-V7	F	—	—	4.5	0.8~1.9	杏仁型	穿孔		
54	4	16	RDE187	土製品	新鋏車	F-1-98	A2	3.5~4.5	—	2.5	断面台形	舟形	中央穿孔、全長へり2.5牛		

第6表 台太郎遺跡第80次調査出土遺物観察表 土製品（2）

調	番号	写真 記録	遺構名	区分	器種	形態		出土		寸法(cm)			形状		特徴
						平面位置	層位	全長	断面様						
42	16	15	RAE75	石製品	砾石	F-1-98	D2	18.4	8.3	4.6~7.3	短柱形、4面削面、端部貫安山形				
49	12	15	RAE88	石製品	砾石	G-1-D9	B	—	8.6	3.7~4.4	短柱形(破片)、2面削面、切削、砂質凝灰岩				

第7表 台太郎遺跡第80次調査出土遺物観察表 石製品

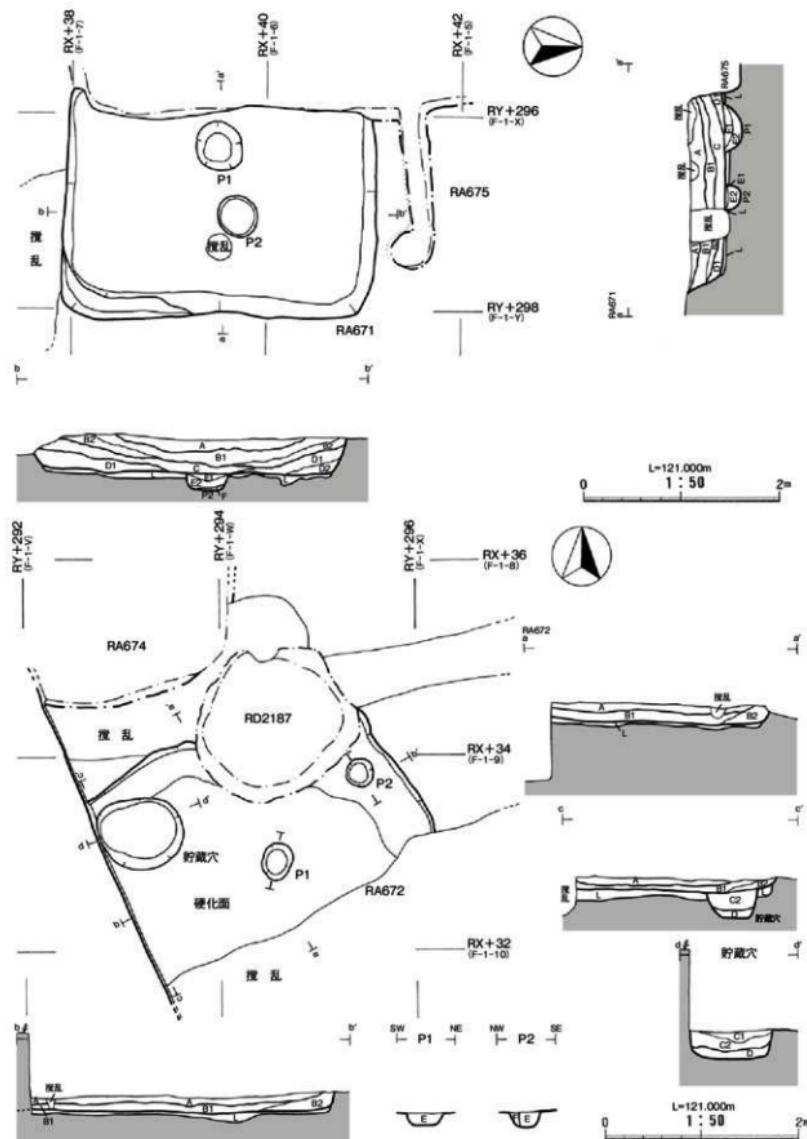
調	番号	写真 記録	遺構名	区分	器種	形態		出土		寸法(cm)			形状		特徴
						平面位置	層位	全長	断面様						
50	6	14	RAE81	鉄製品	小刀	G-1-F13	B	—	—	13.4	2.4	0.5	切先～刃部、茎欠損		

第8表 台太郎遺跡第80次調査出土遺物観察表 鉄製品

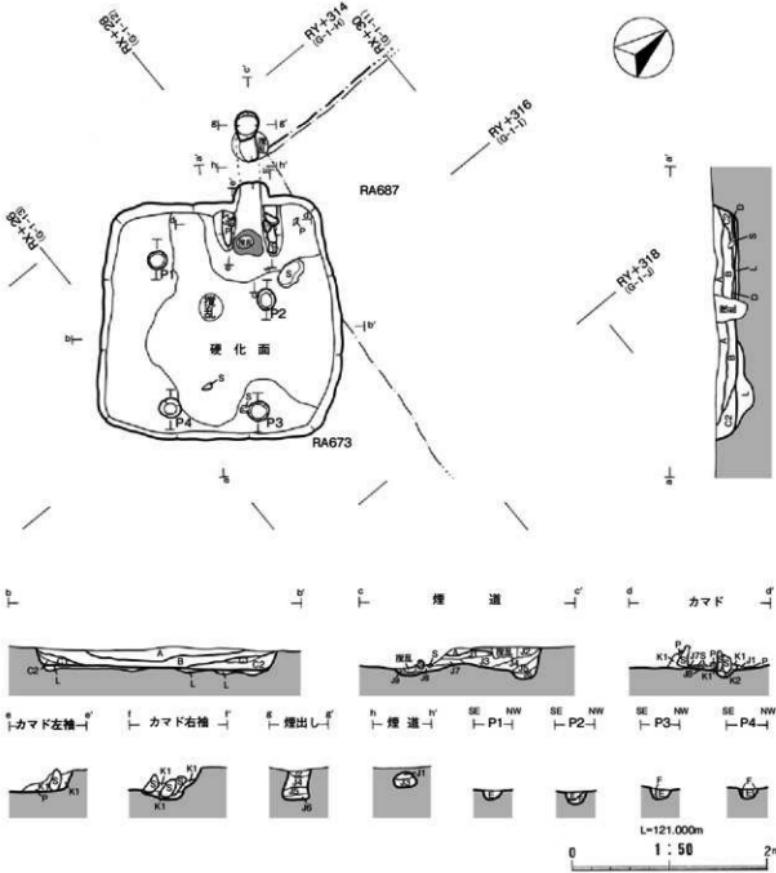
調	番号	写真 記録	遺構名	区分	器種	形態		出土		寸法(cm)			形状		特徴
						平面位置	層位	全長	断面様						
54	6	16	RDE121	磁器	—	G1-J4	A2	—	—	2.8	2.8	1.2	卓付(瓦蓋端)4面、荷物持状、近世以前		

第9表 台太郎遺跡第80次調査出土遺物観察表 磁器

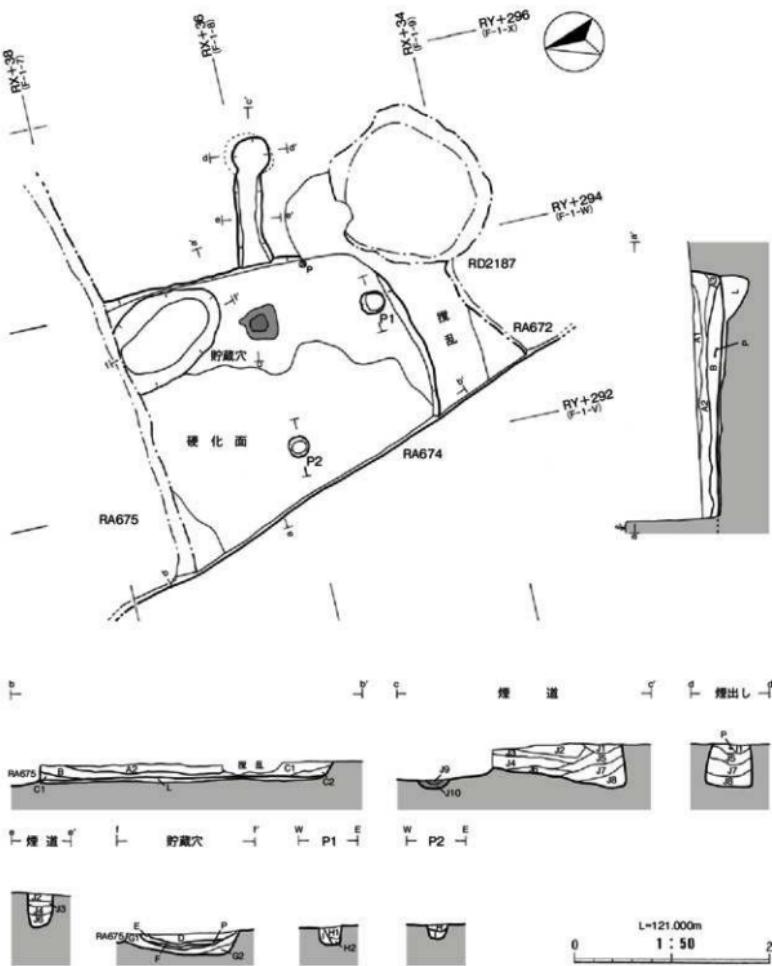
遺構図版



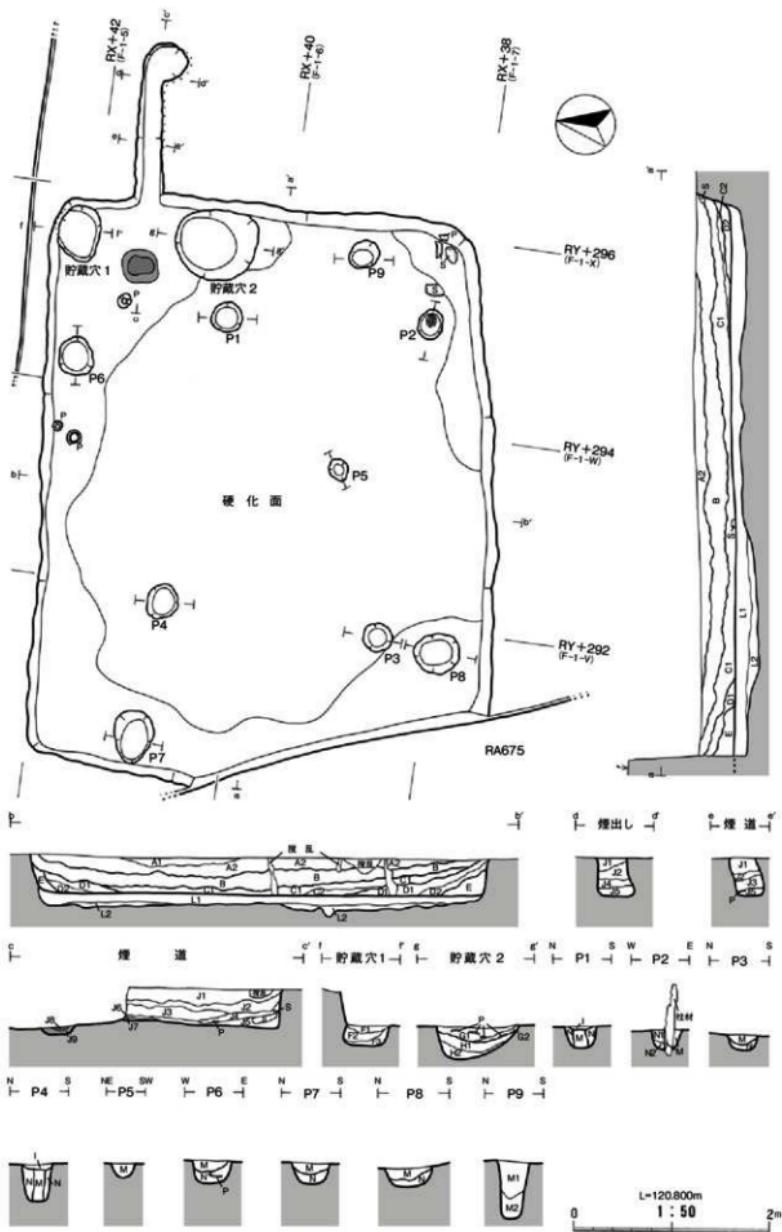
第6図 RA671・RA672 壓穴建物跡



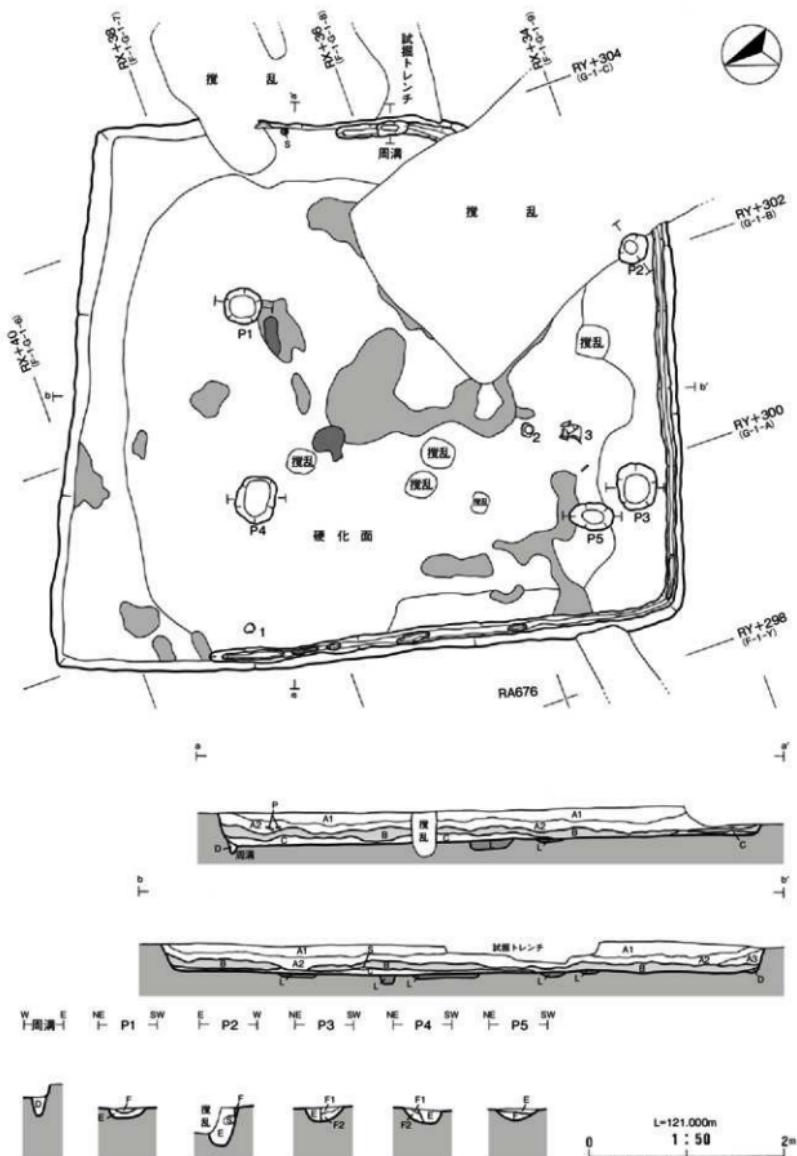
第7図 RA673 壁穴建物跡



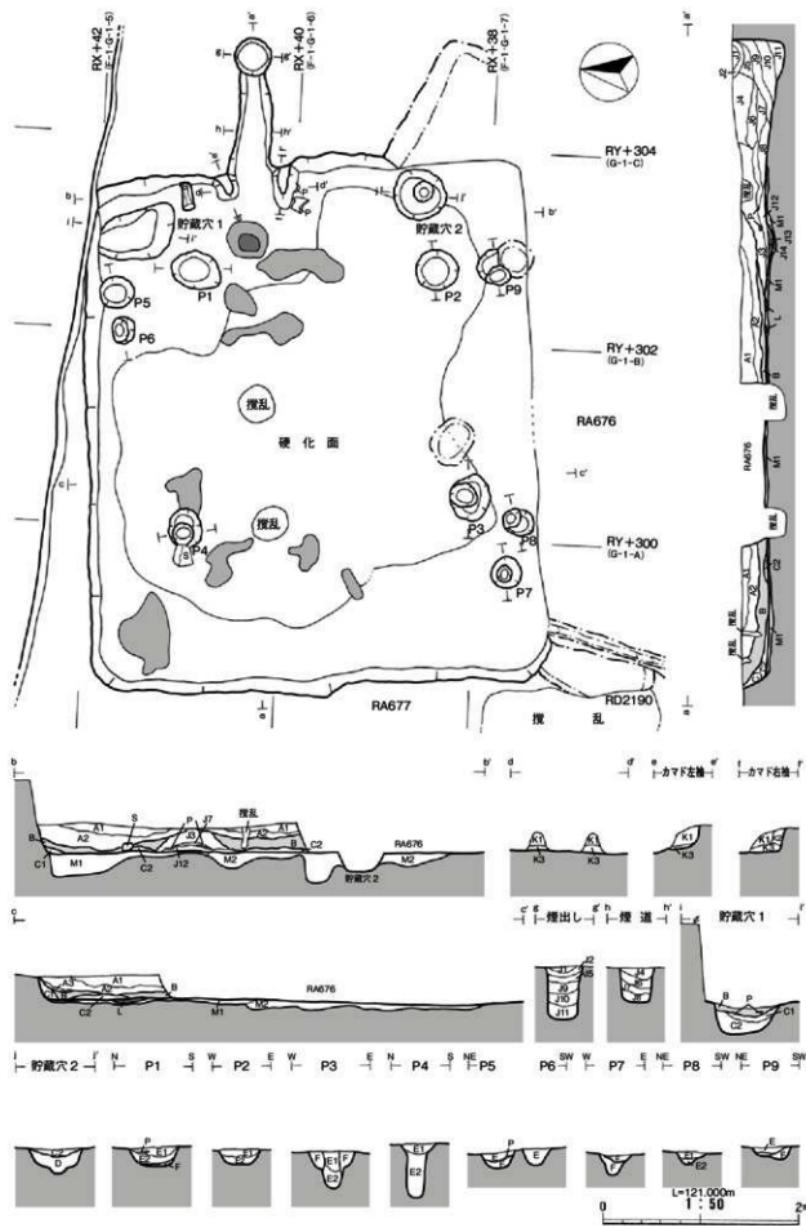
第8図 RA674 壁穴建物跡



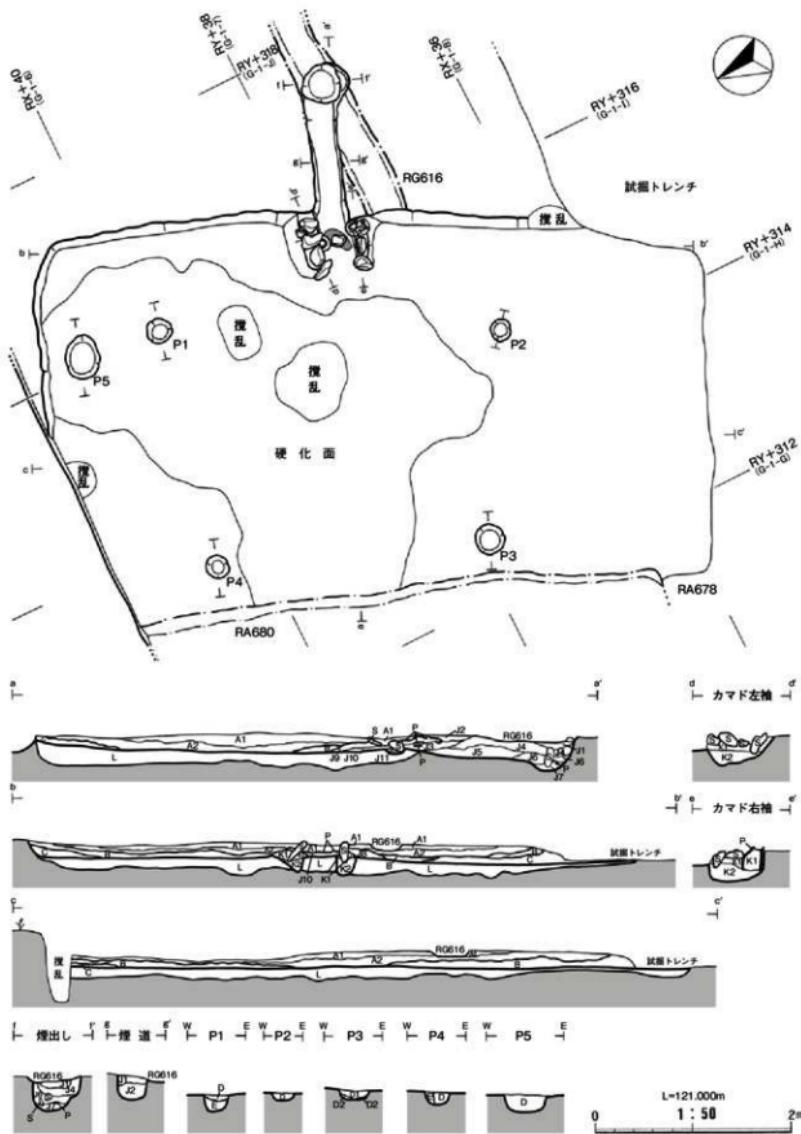
第9図 RA675 壁穴建物跡



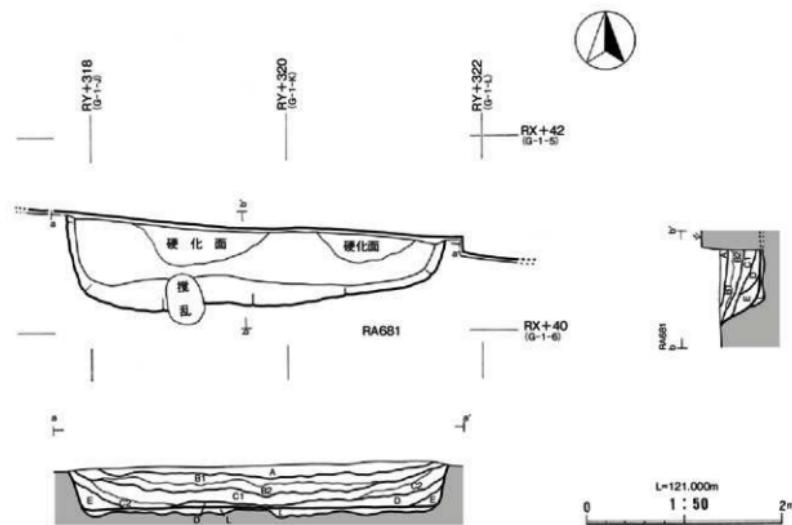
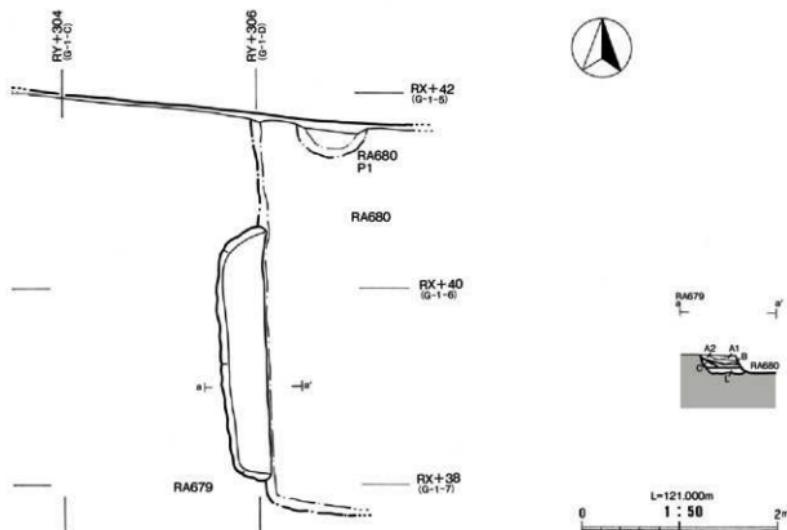
第10図 RA676 積穴建物跡



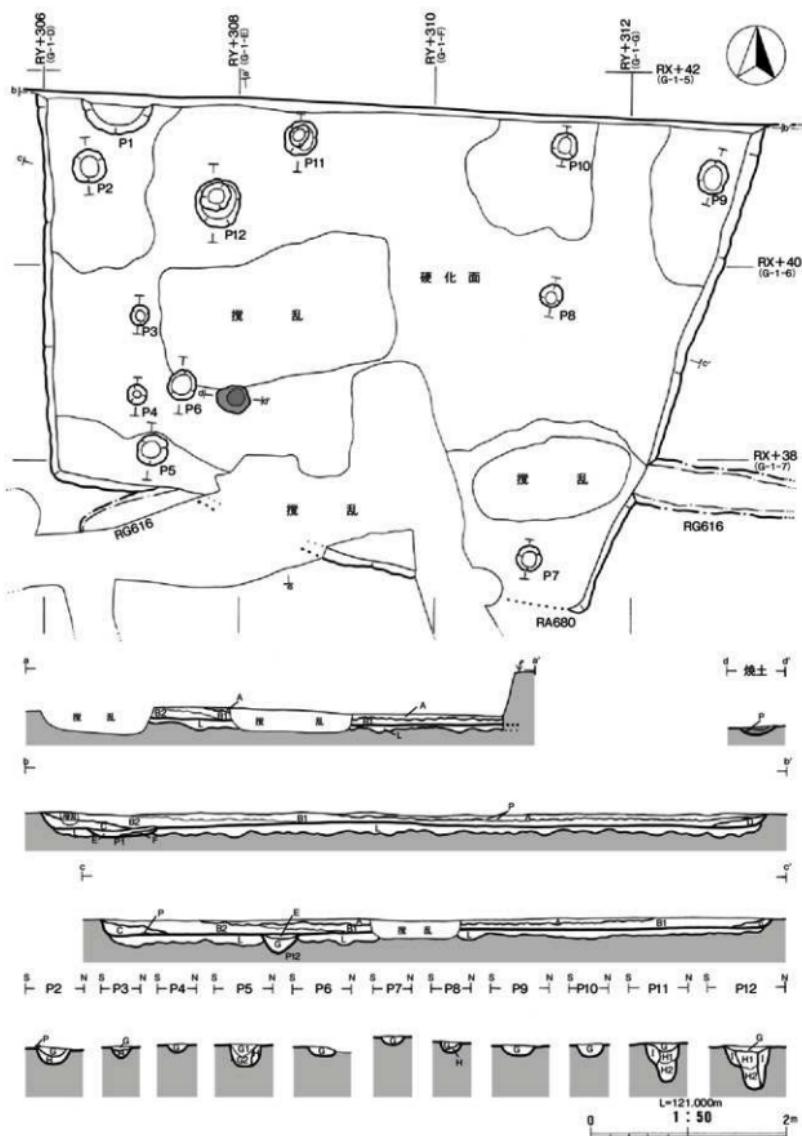
第11図 RA677 壁穴建物跡



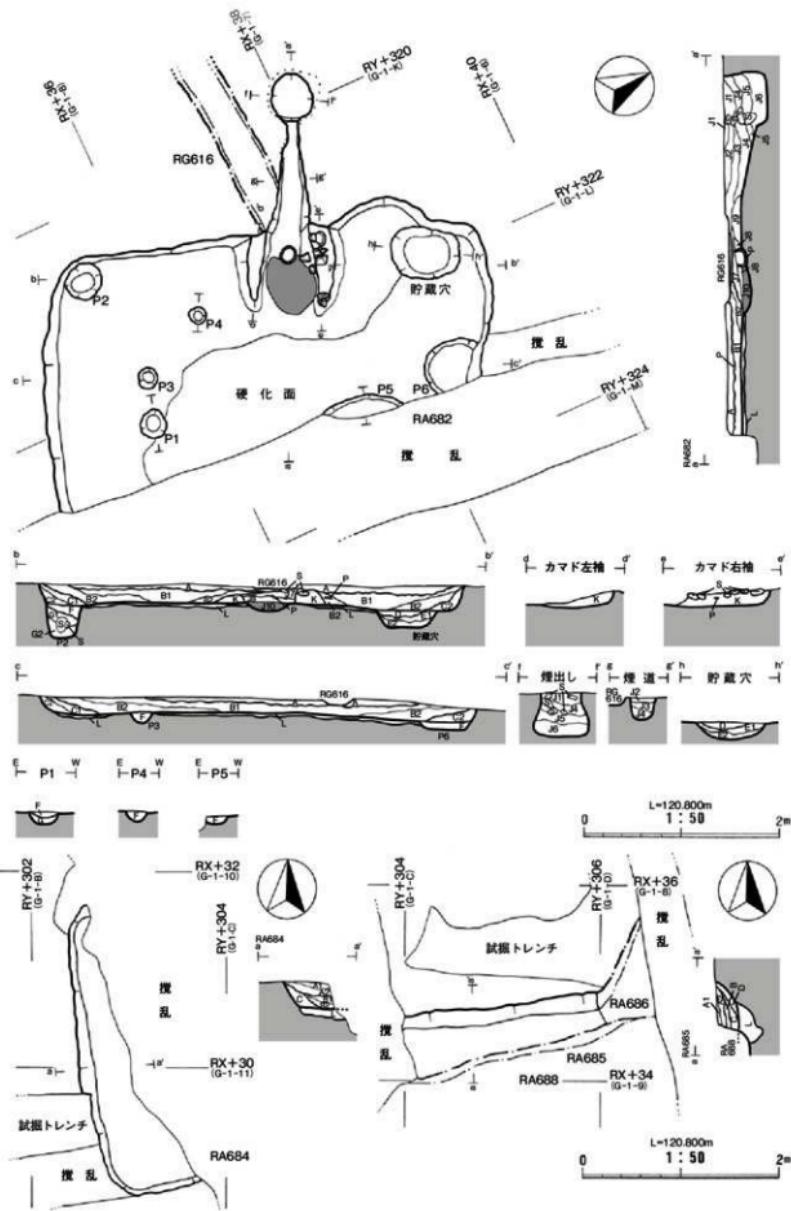
第12図 RA678 穫穴建物跡



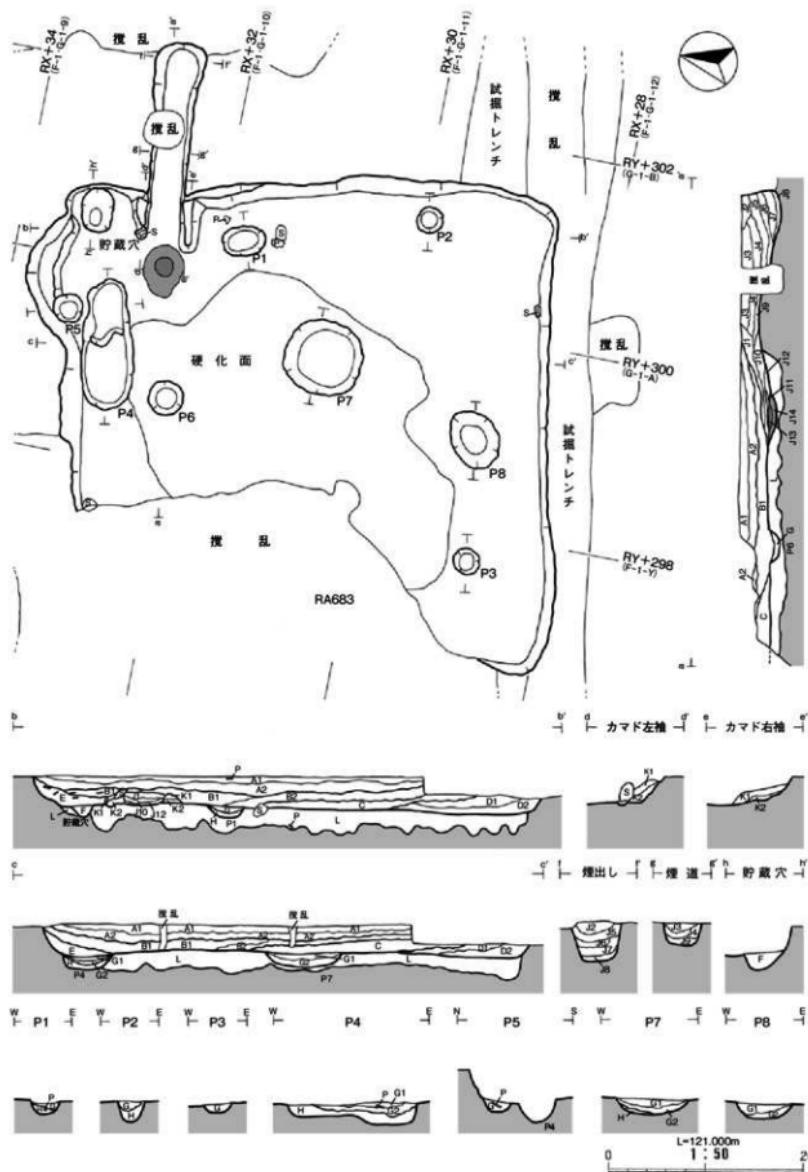
第13図 RA679・681 竪穴建物跡



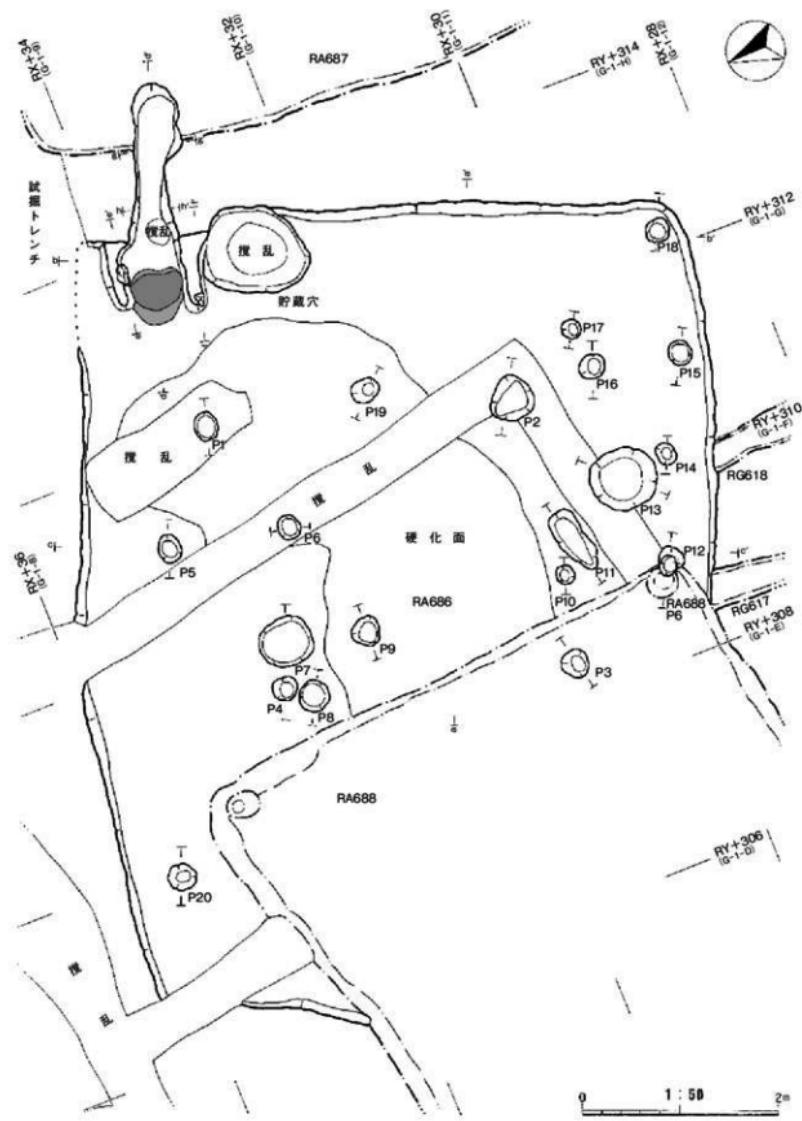
第14図 RA680 穫穴建物跡



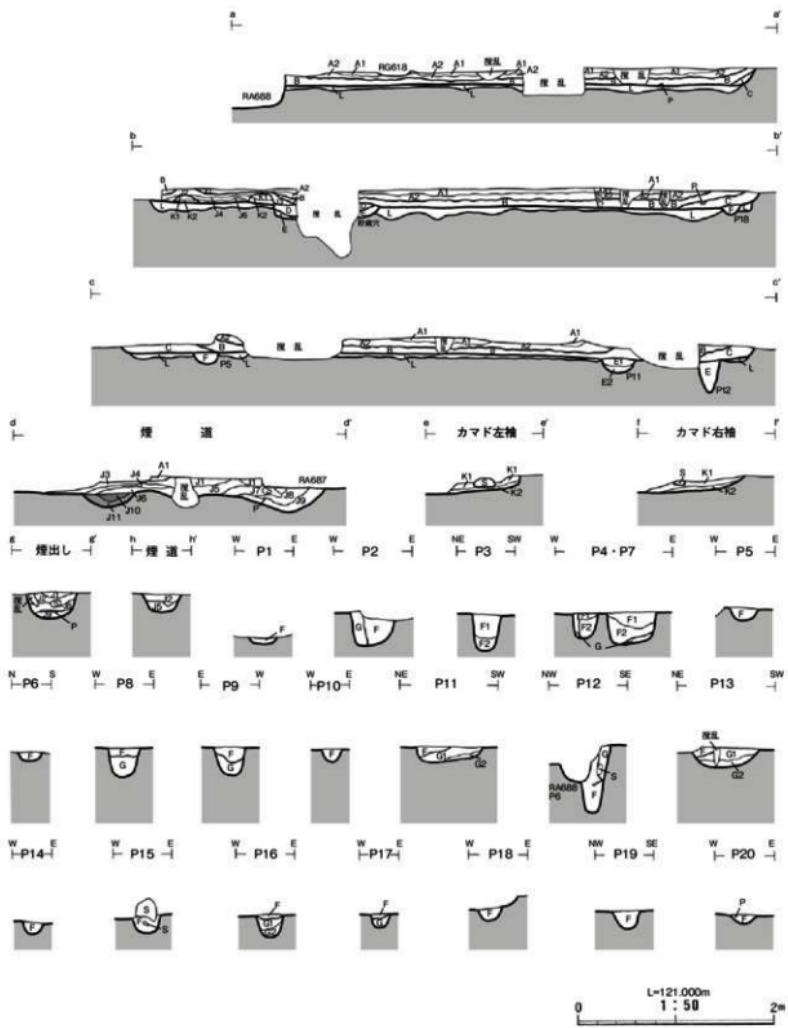
第15図 RA682・684・685 壁穴建物跡



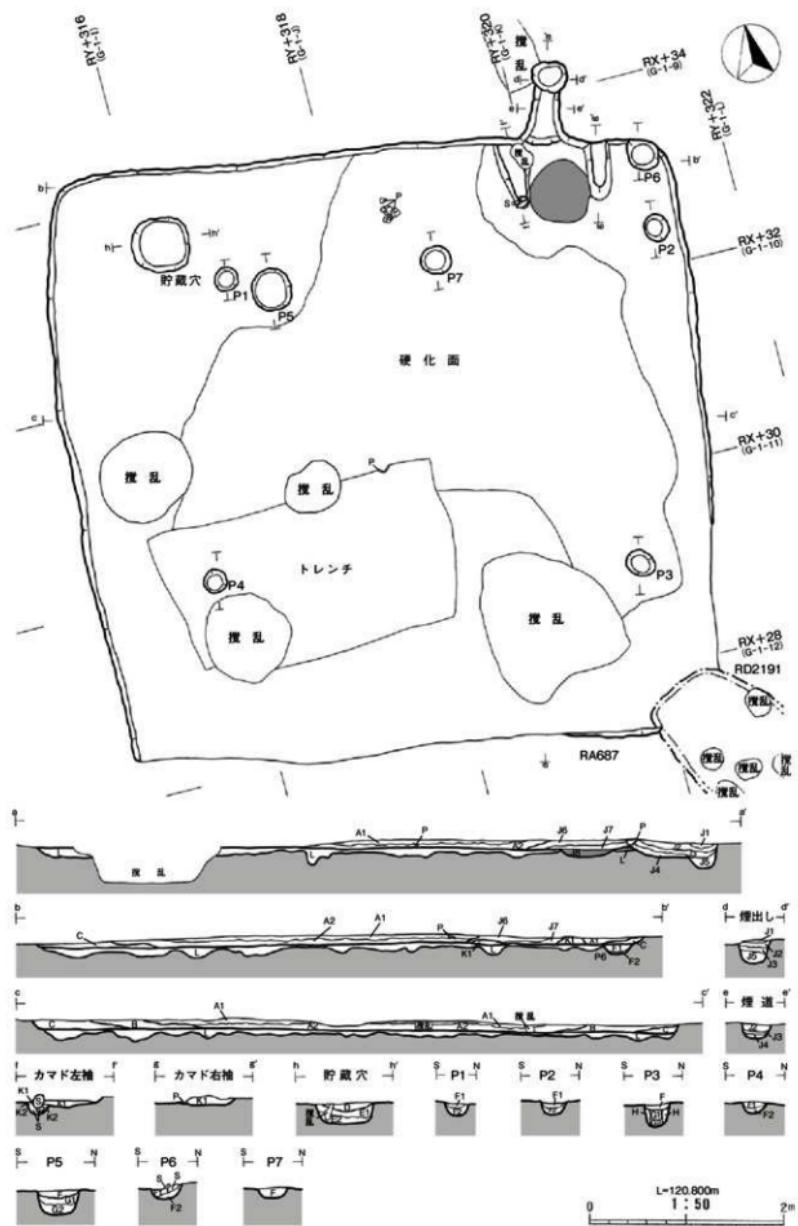
第16図 RA683 疋穴建物跡



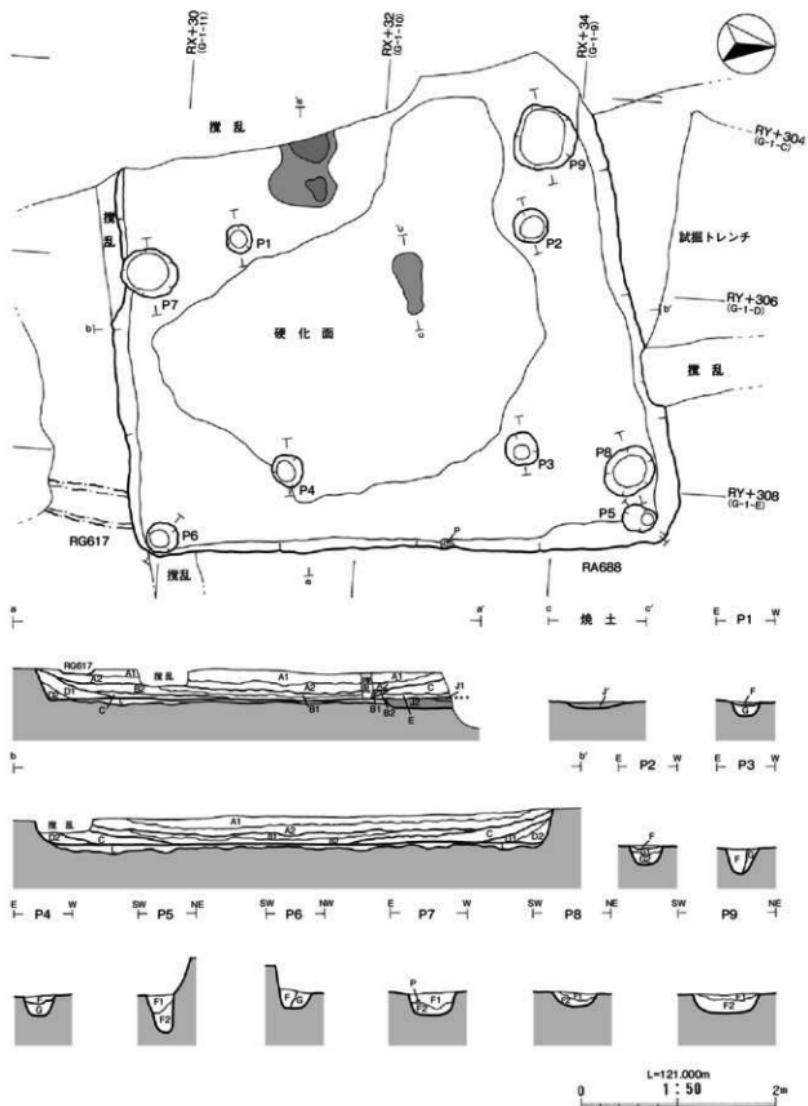
第17図 RA686 壁穴建物跡 (1)



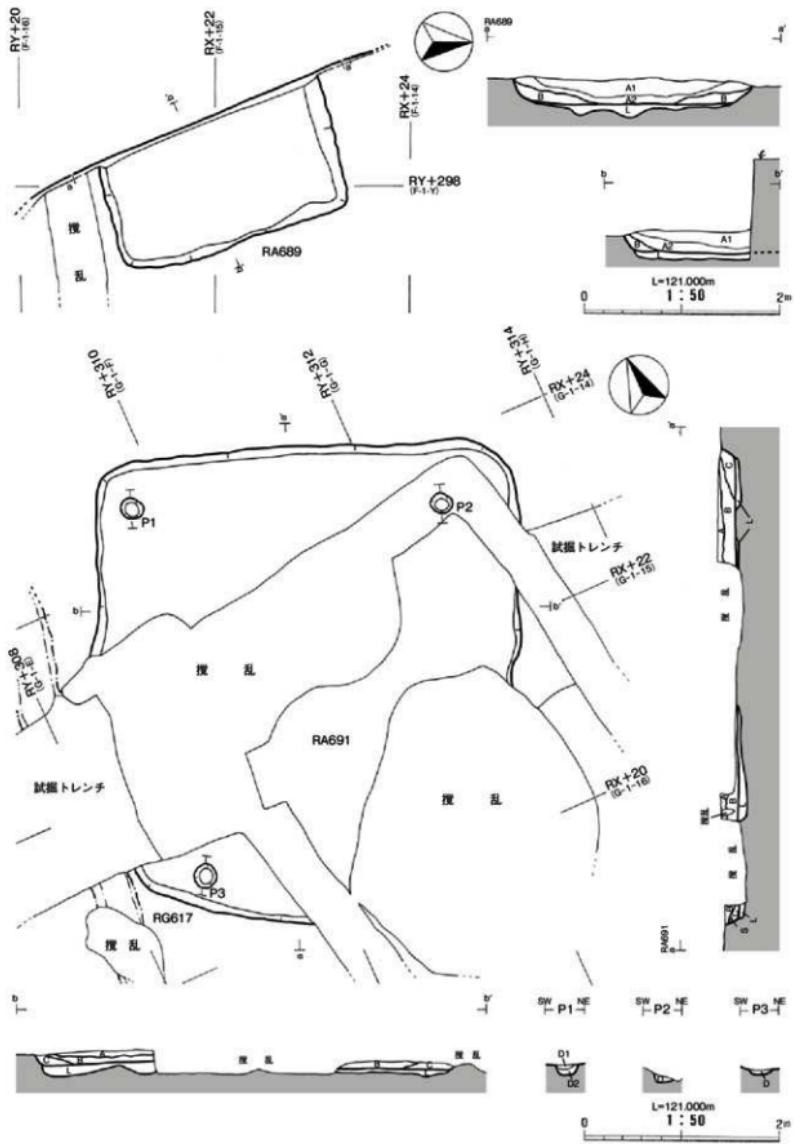
第18図 RA686 壇穴建物跡 (2)



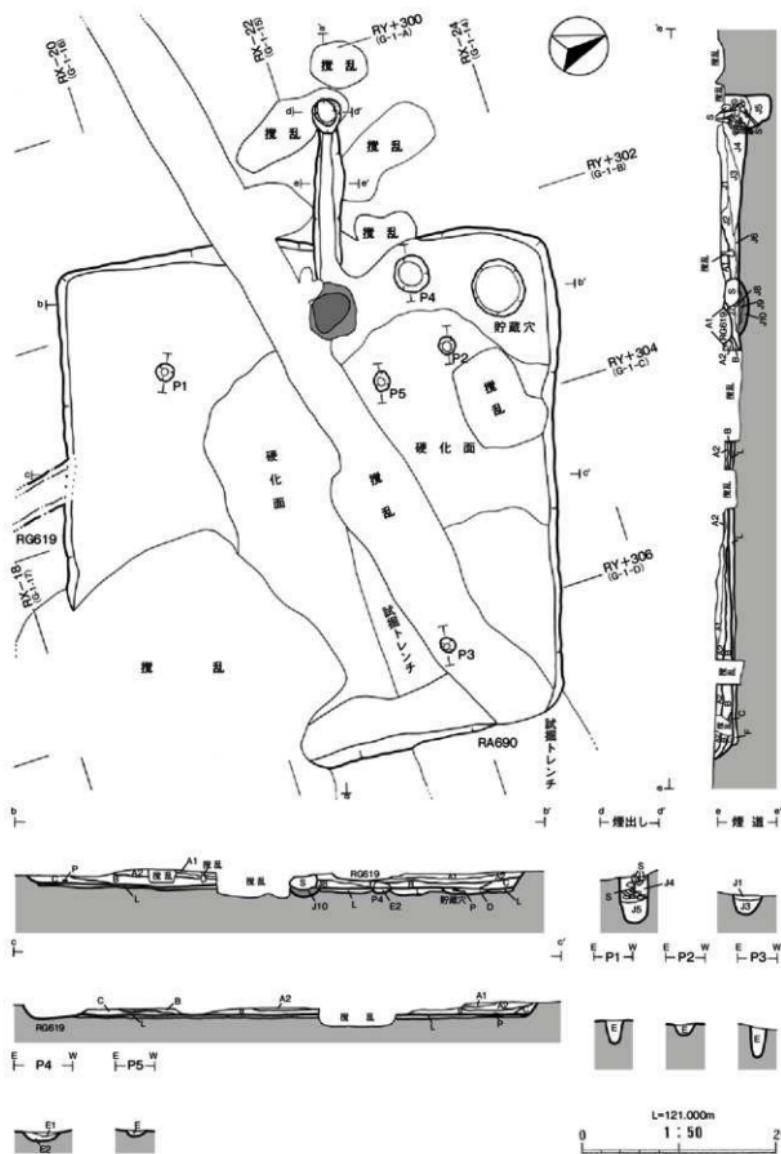
第19図 RA687 壁穴建物跡



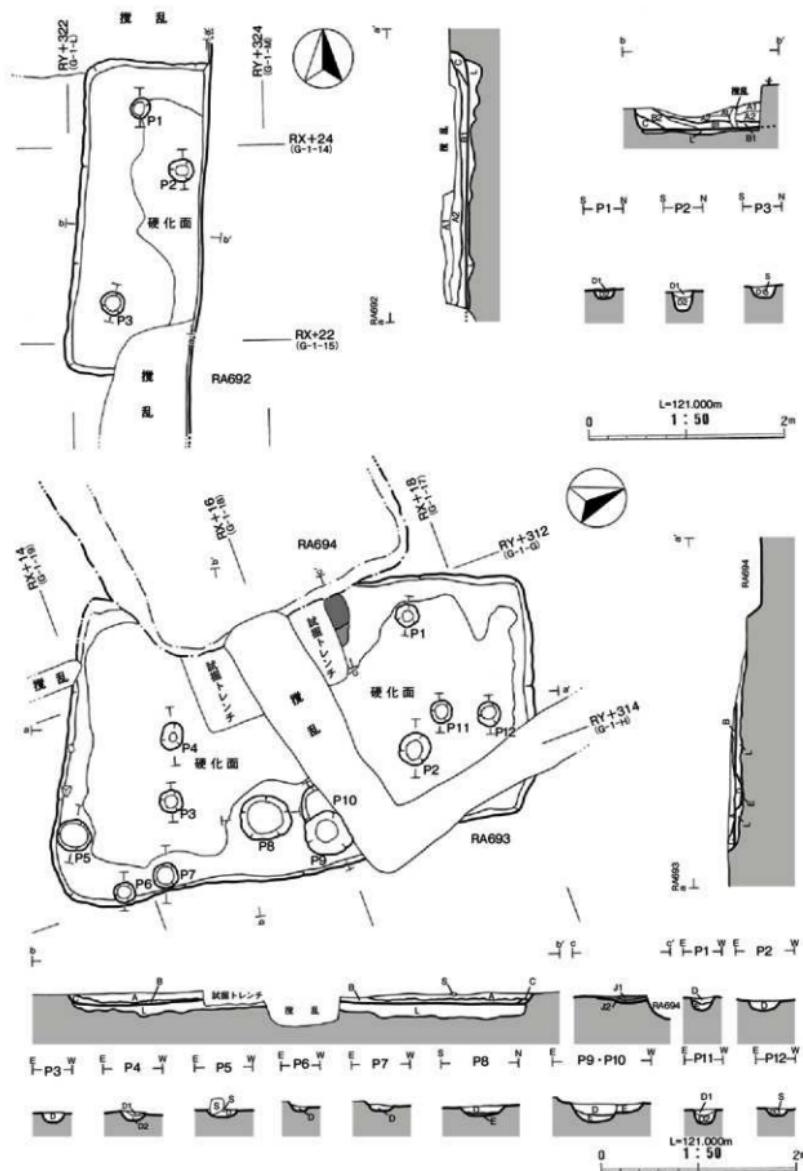
第20図 RA688 穴穴建物跡



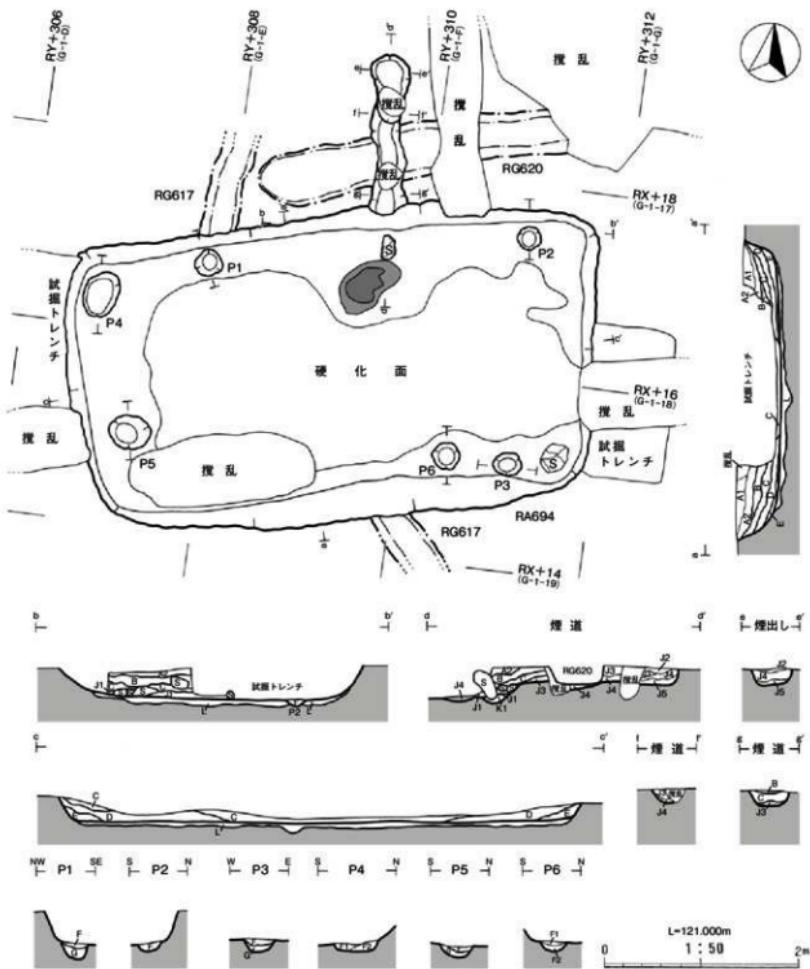
第21図 RA689・RA691 竪穴建物跡



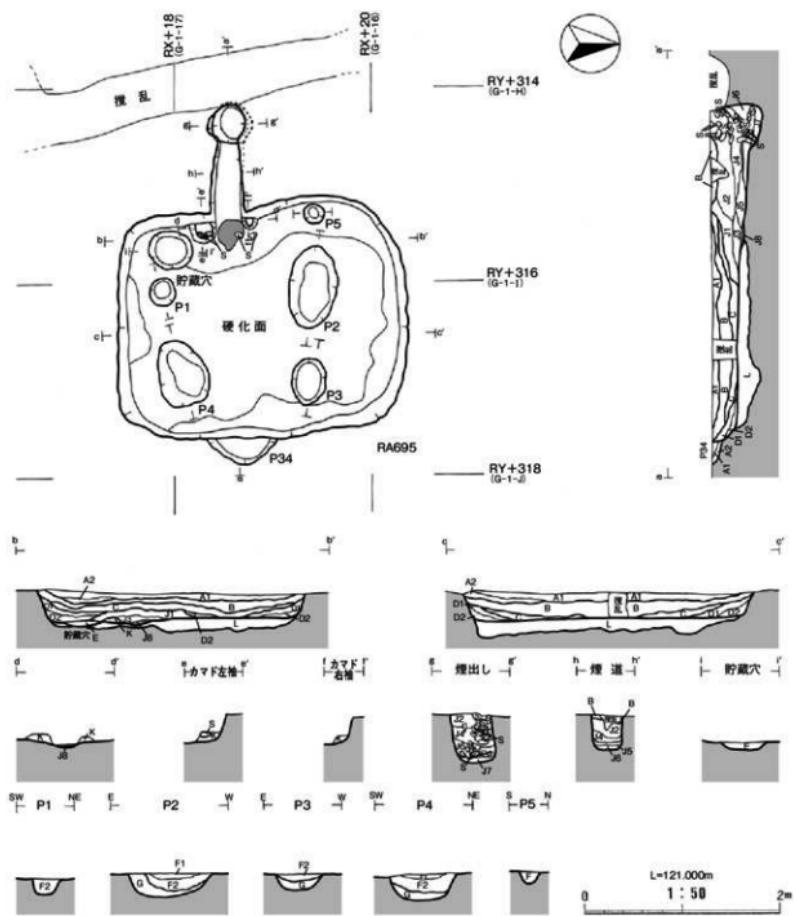
第22図 RA690 積穴建物跡



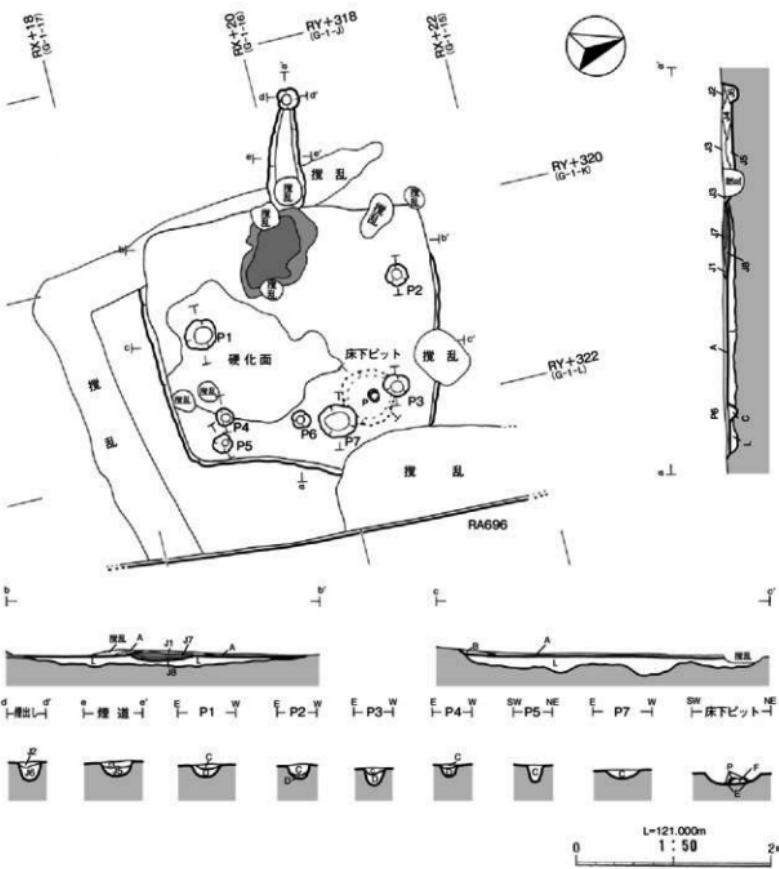
第23図 RA692・RA693 壁穴建物跡



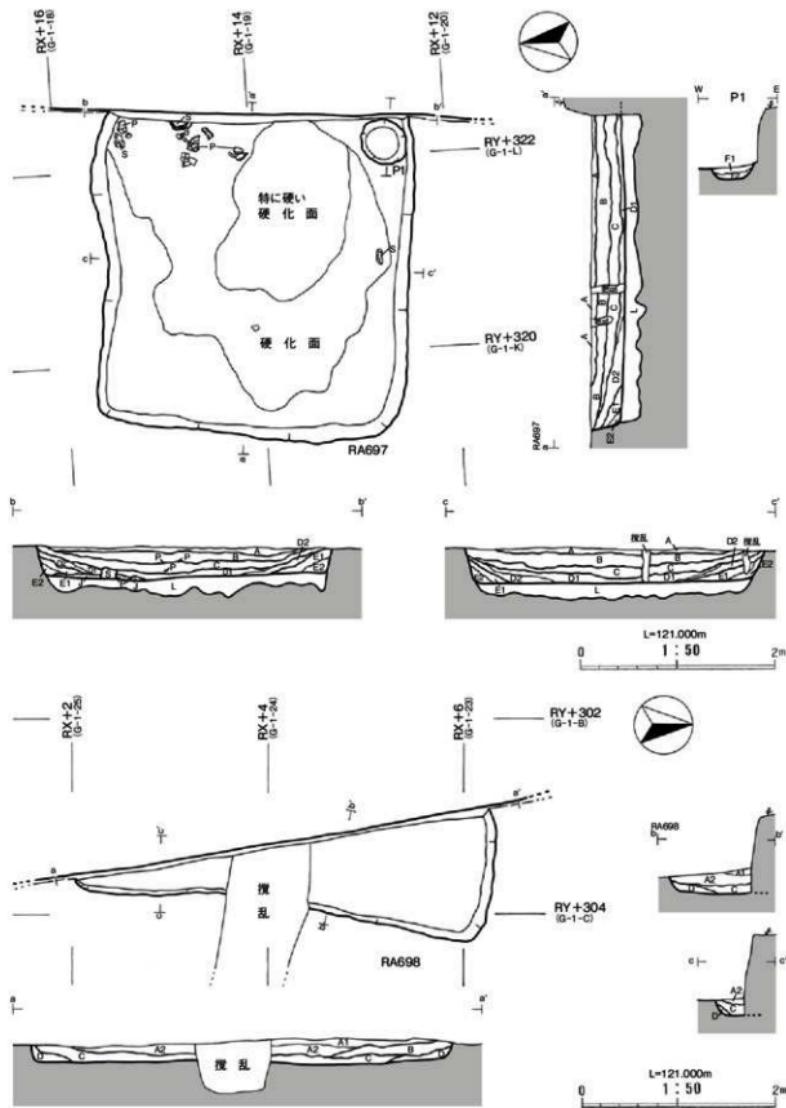
第24図 RA694 積穴建物跡



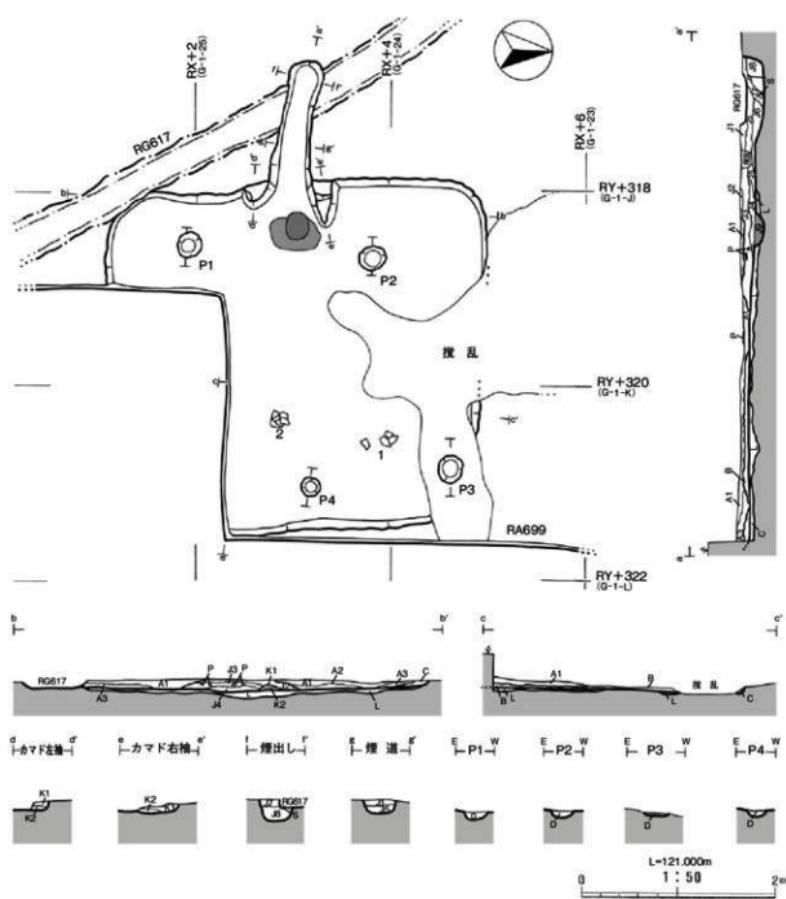
第25図 RA695 穫穴建物跡



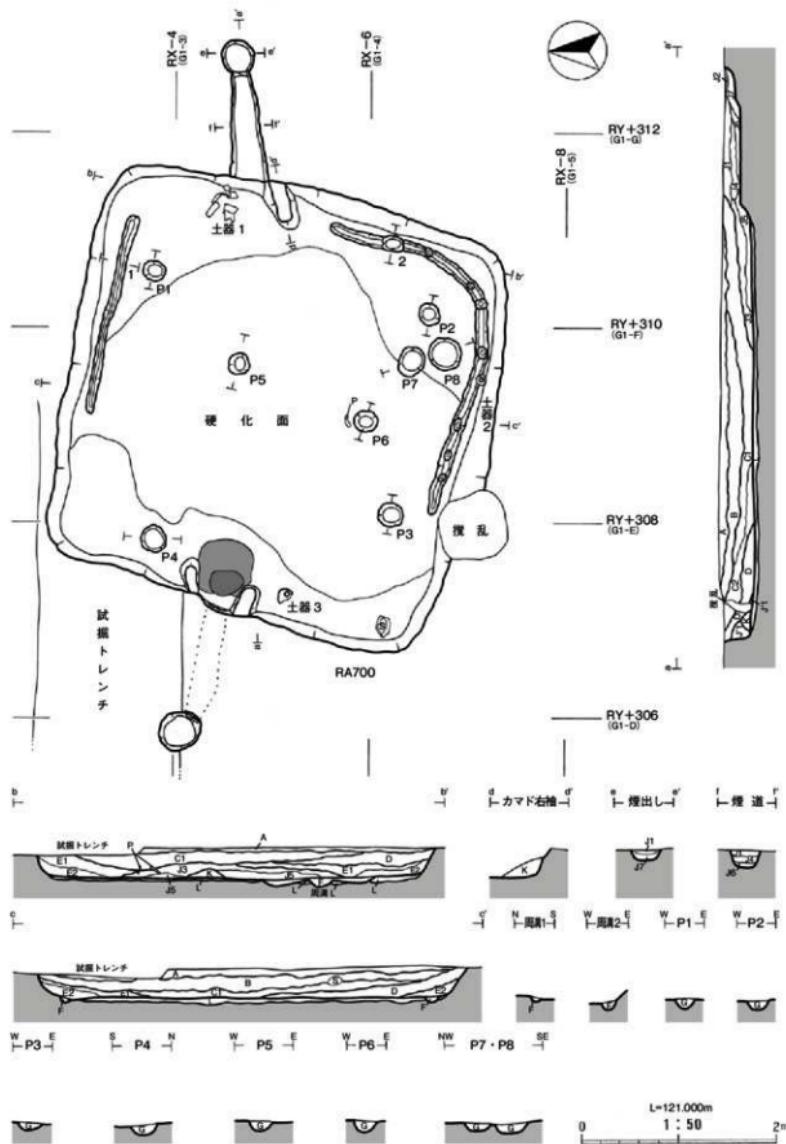
第26図 RA696 積穴建物跡



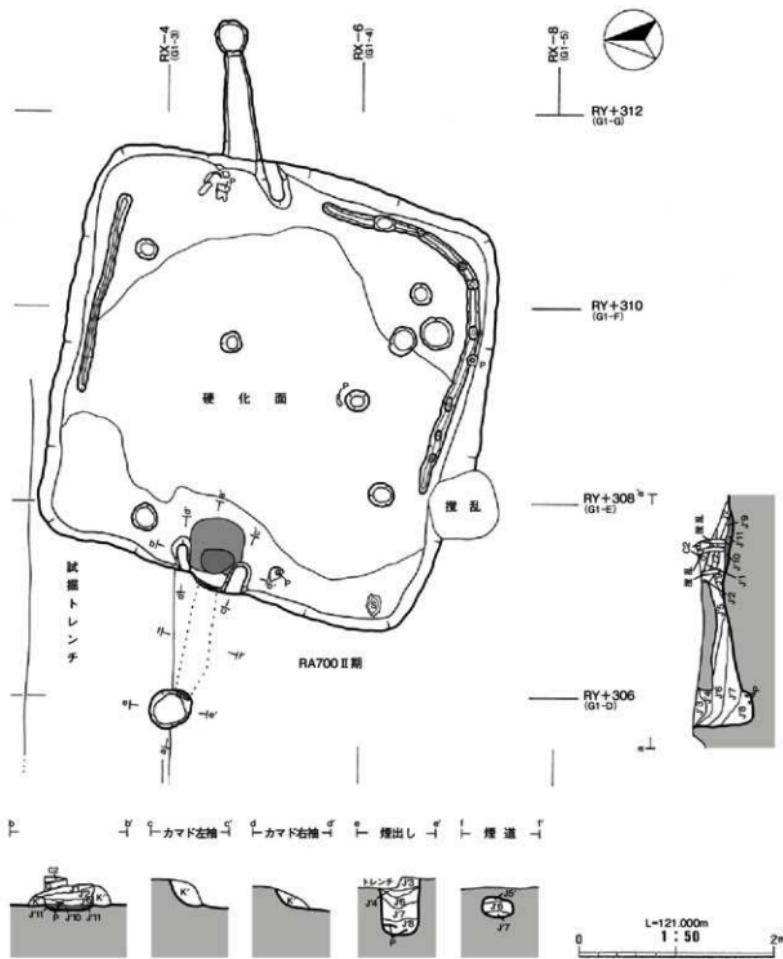
第27図 RA697・RA698 壁穴建物跡



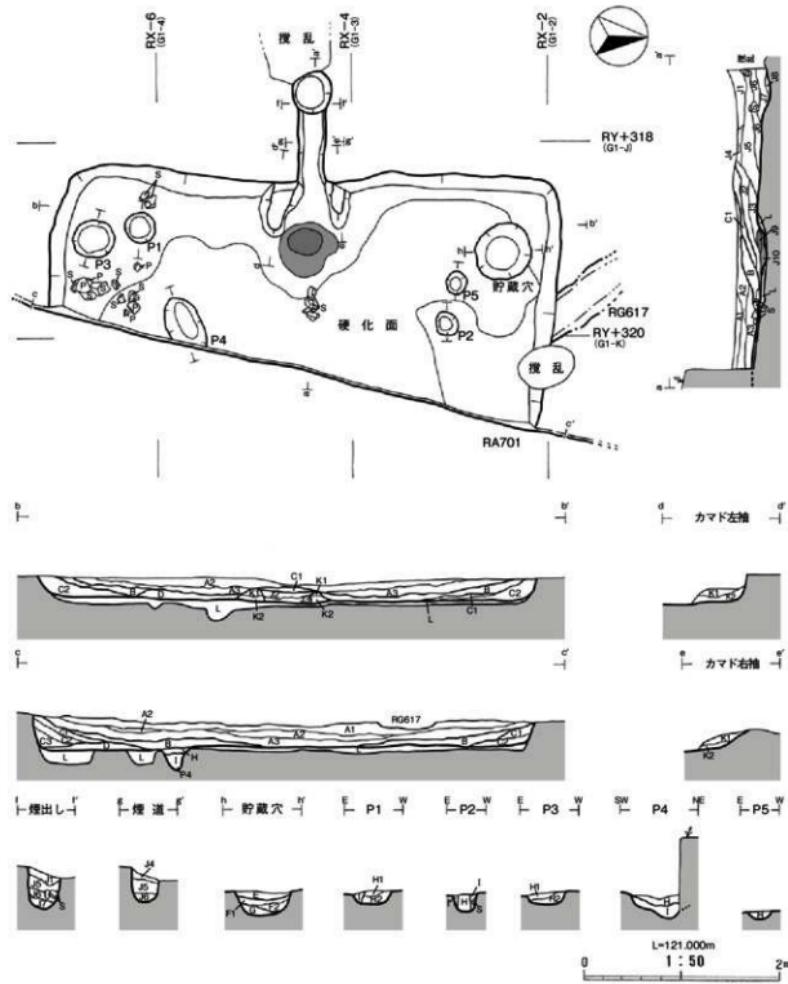
第28図 RA699 積穴建物跡



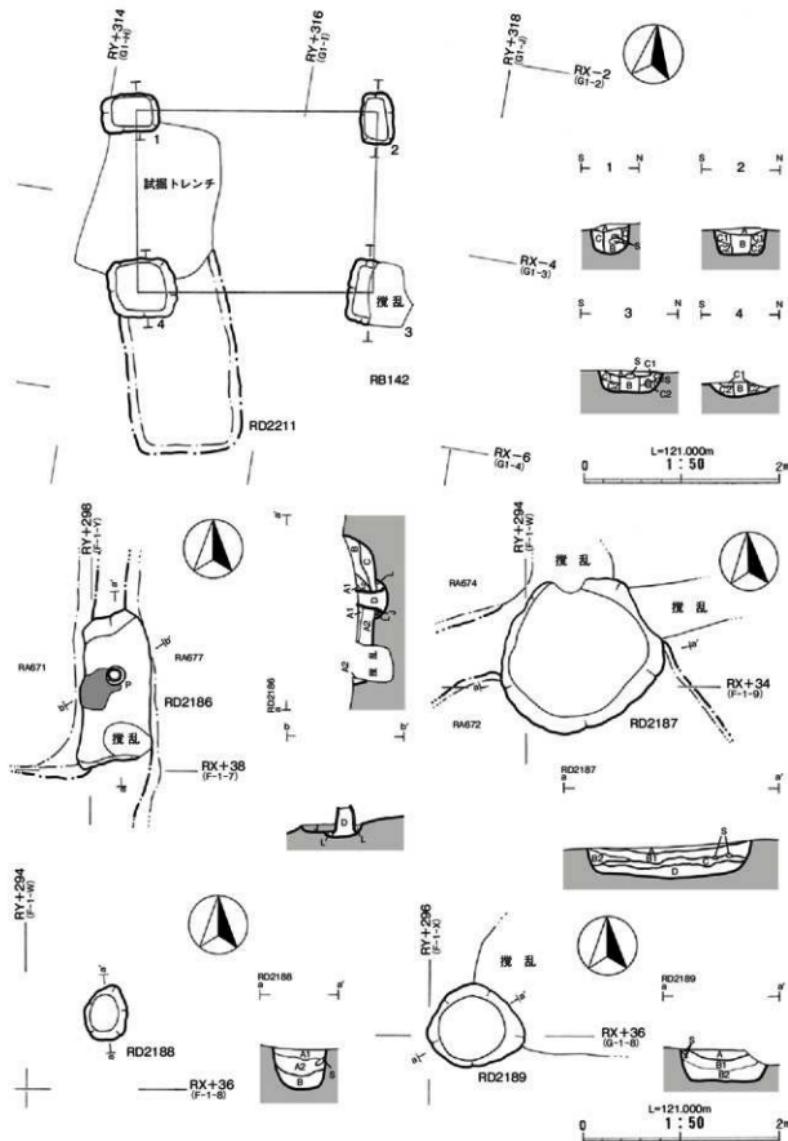
第29図 RA700 壁穴建物跡（I期）



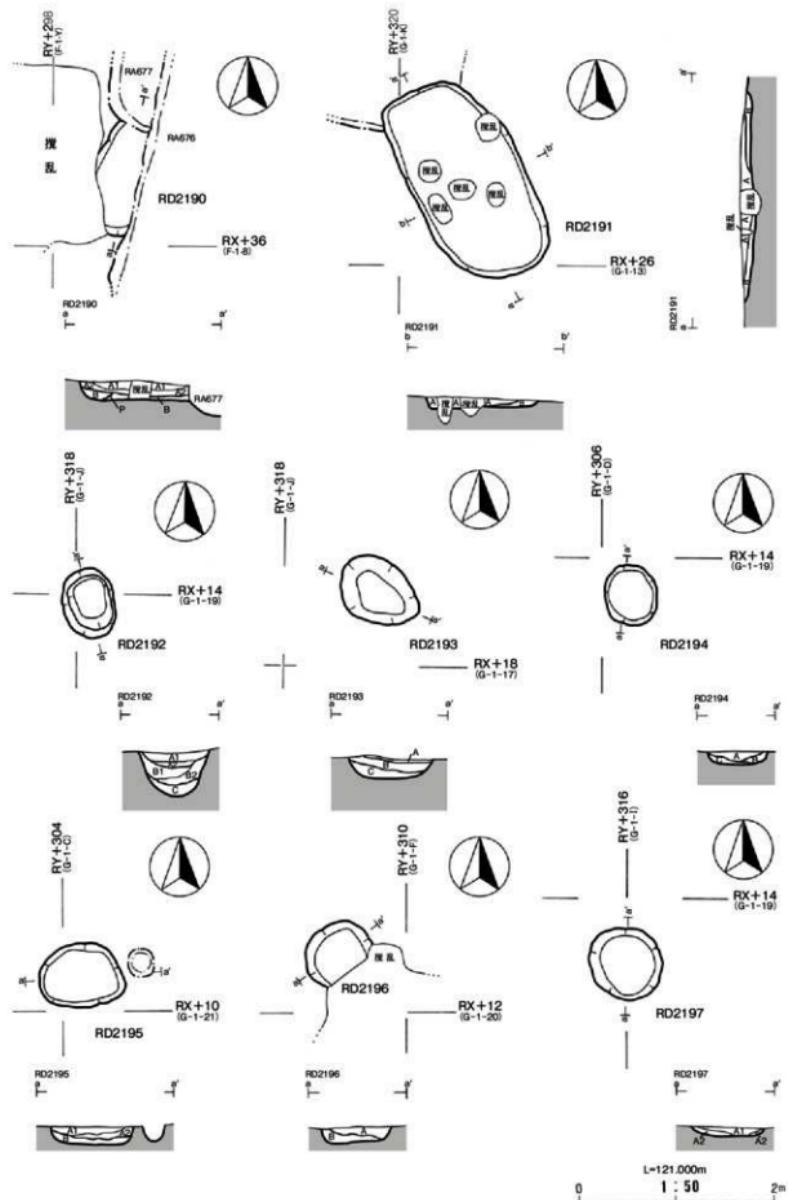
第30図 RA700 壁穴建物跡（II期）



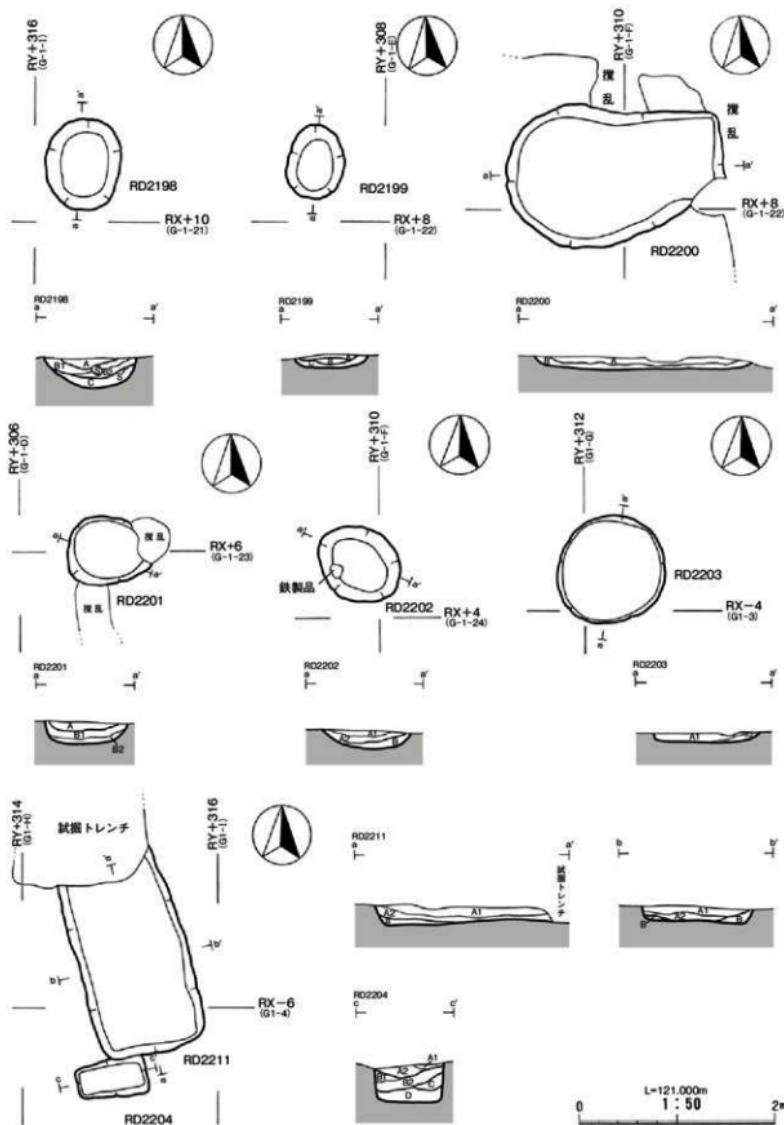
第31図 RA701 穴建物跡



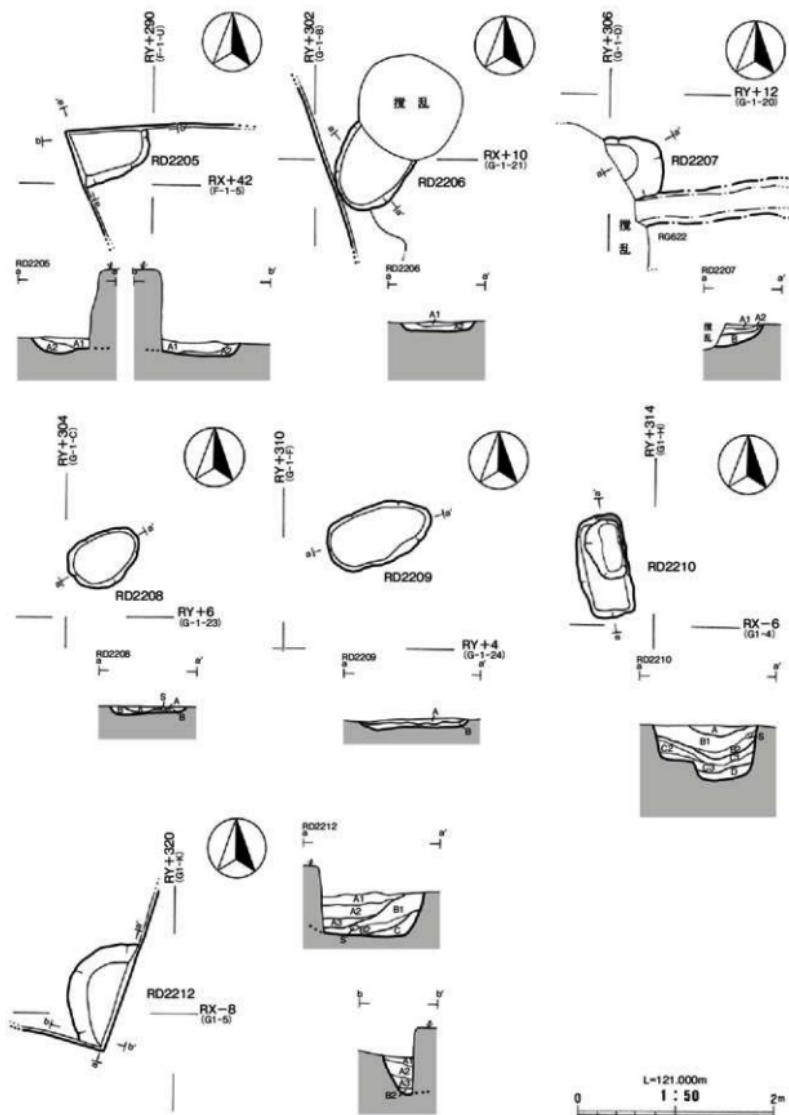
第32図 RB142 挖立柱建物跡, RD2186~2189 土坑



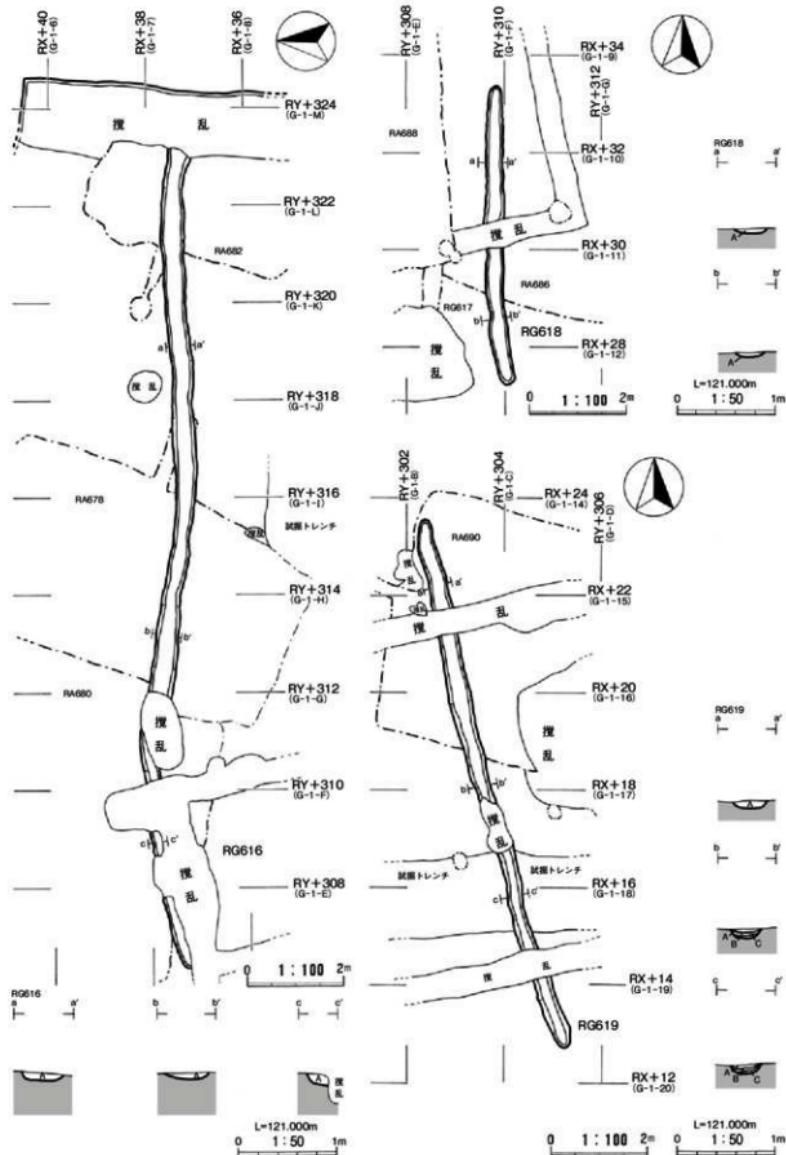
第33図 RD2190~2197 土坑



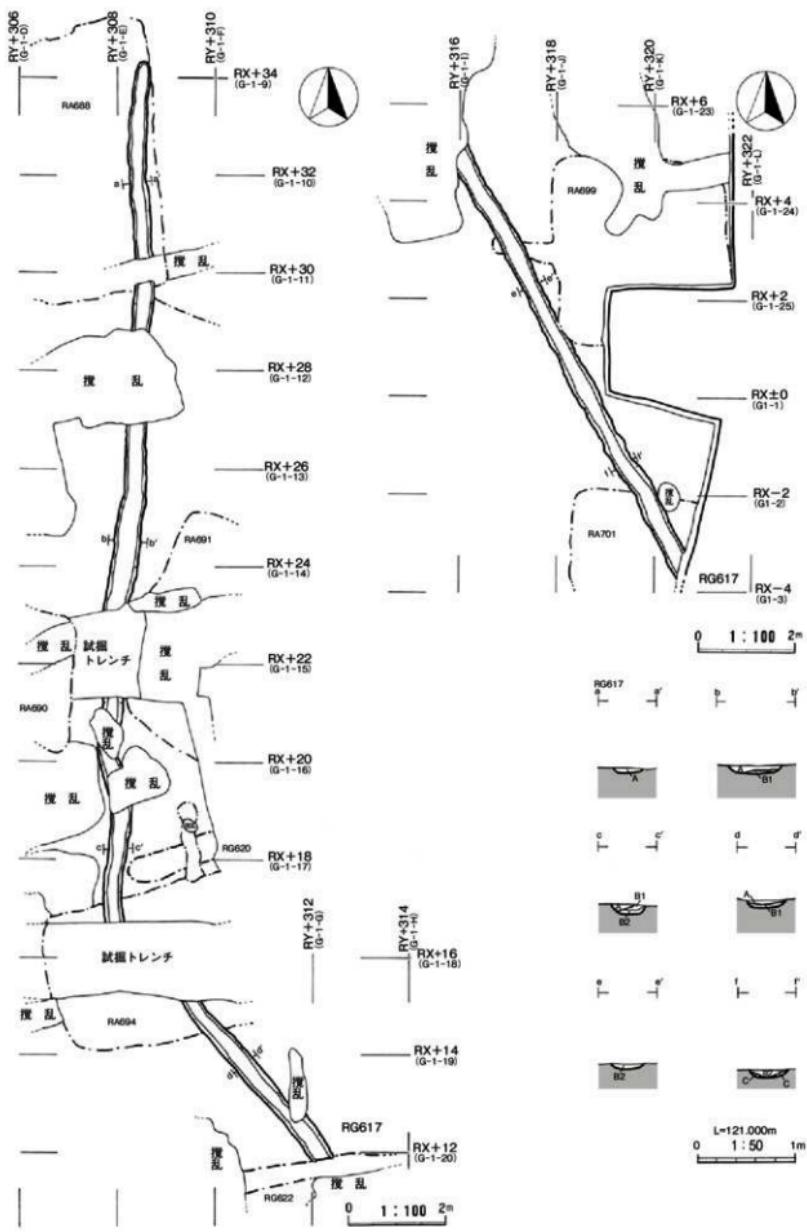
第34図 RD2198~2204・2211 土坑



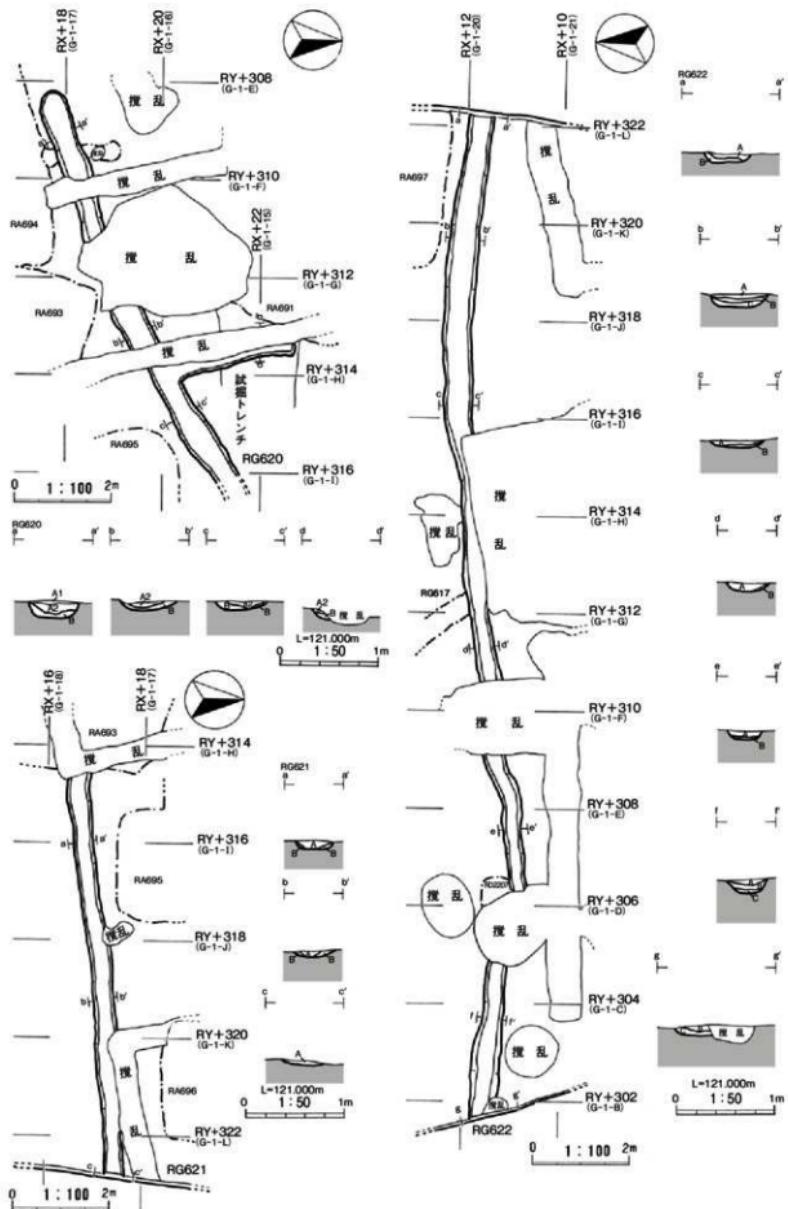
第35図 RD2205~2210・2212 土坑



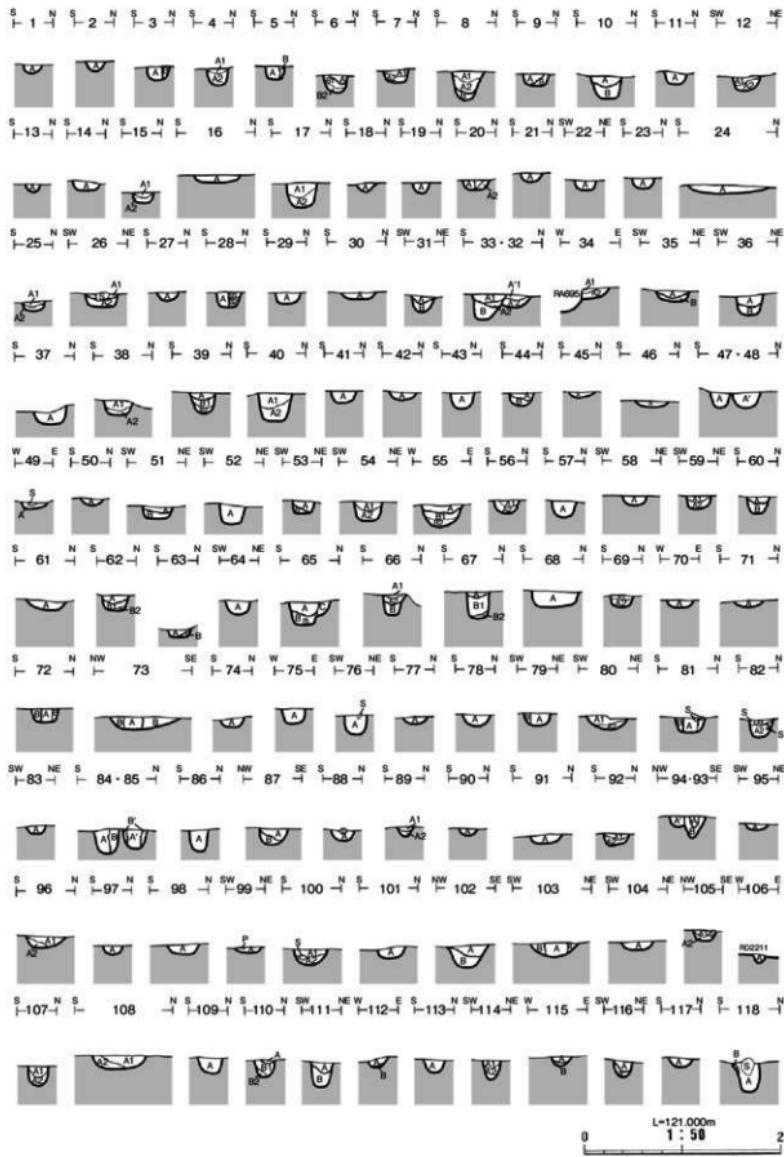
第36図 RG616・618・619 溝跡



第37図 RG617 溝跡

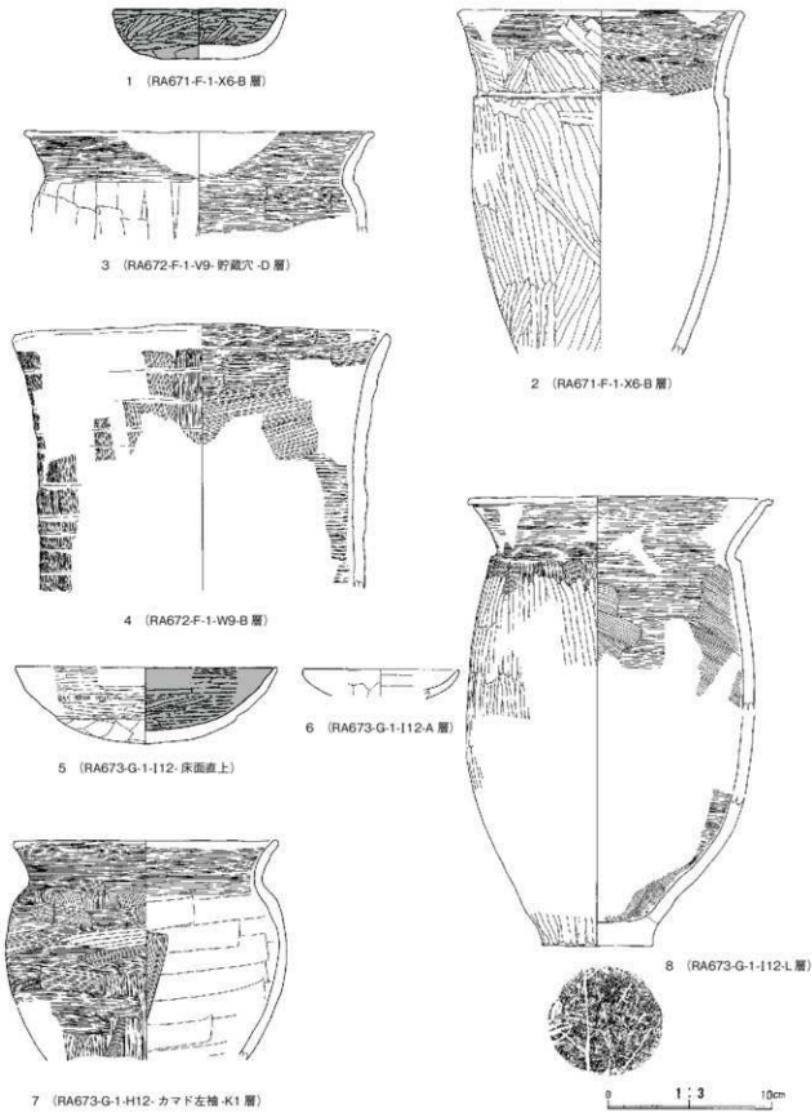


第38図 RG620～622 溝跡

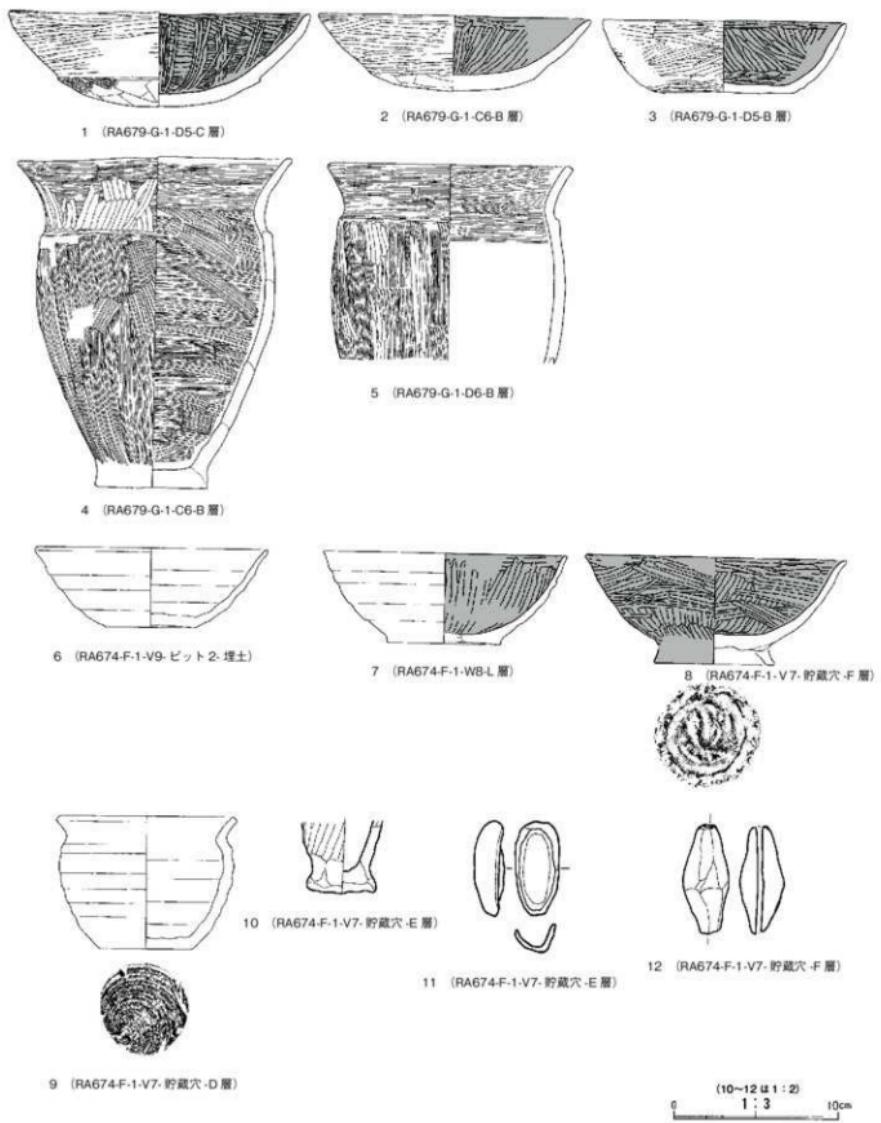


第39図 ピット土層断面

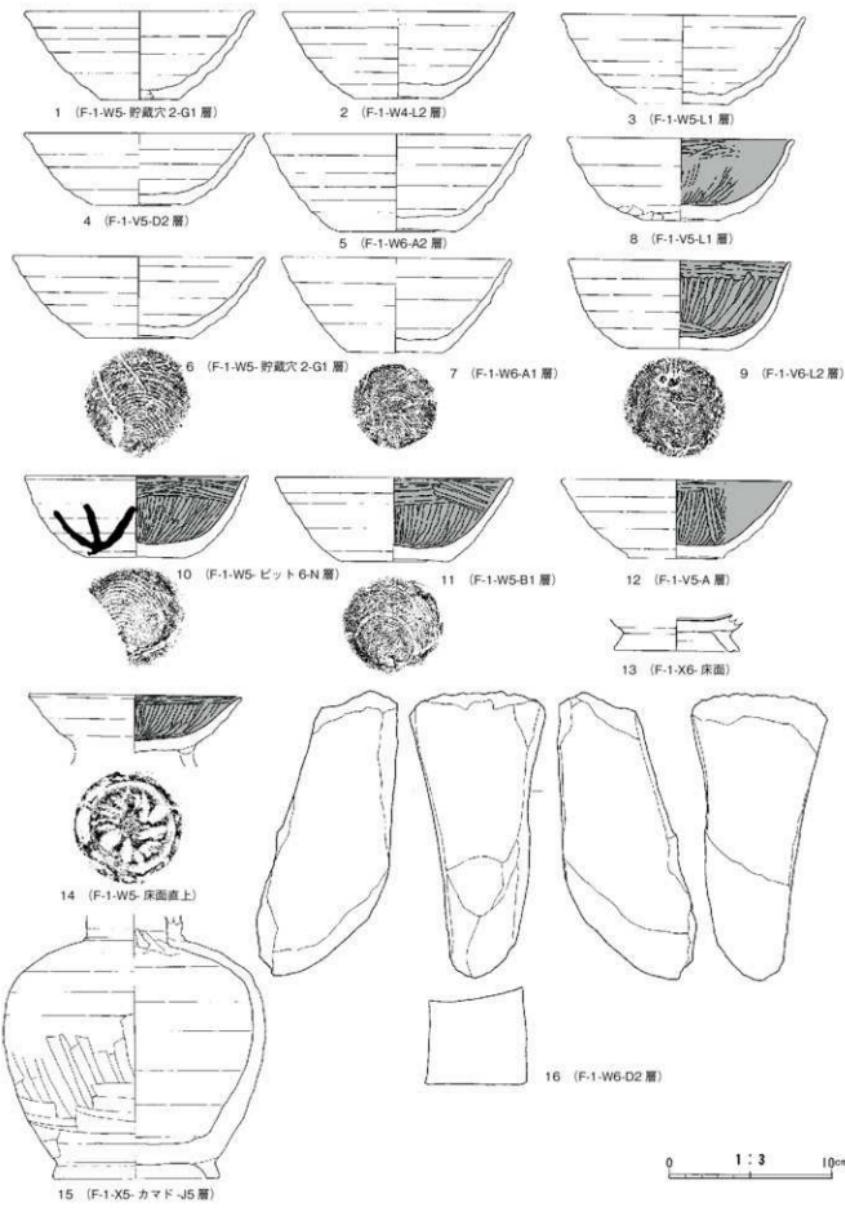
遺 物 図 版



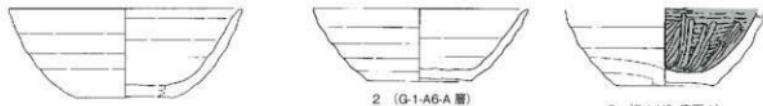
第40図 RA671～673 堅穴建物跡出土土器



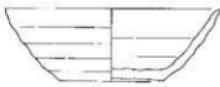
第41図 RA674・679 塗穴建物跡出土遺物



第42図 RA675 堅穴建物跡出土遺物



1 (G-1-C6-C層)



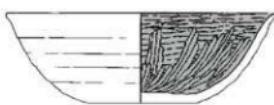
2 (G-1-A6-A層)



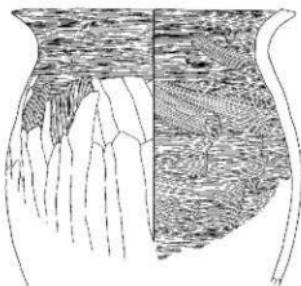
3 (F-1-Y6-床面1)



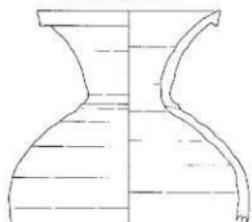
4 (G-1-AB-床面2)



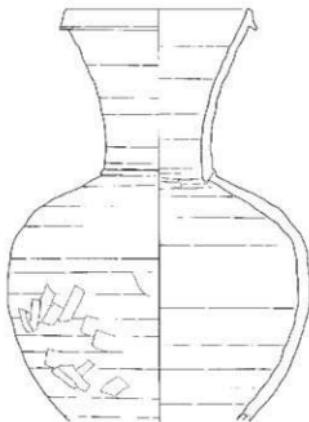
5 (G-1-B6-C層)



6 (G-1-AB-床面3)



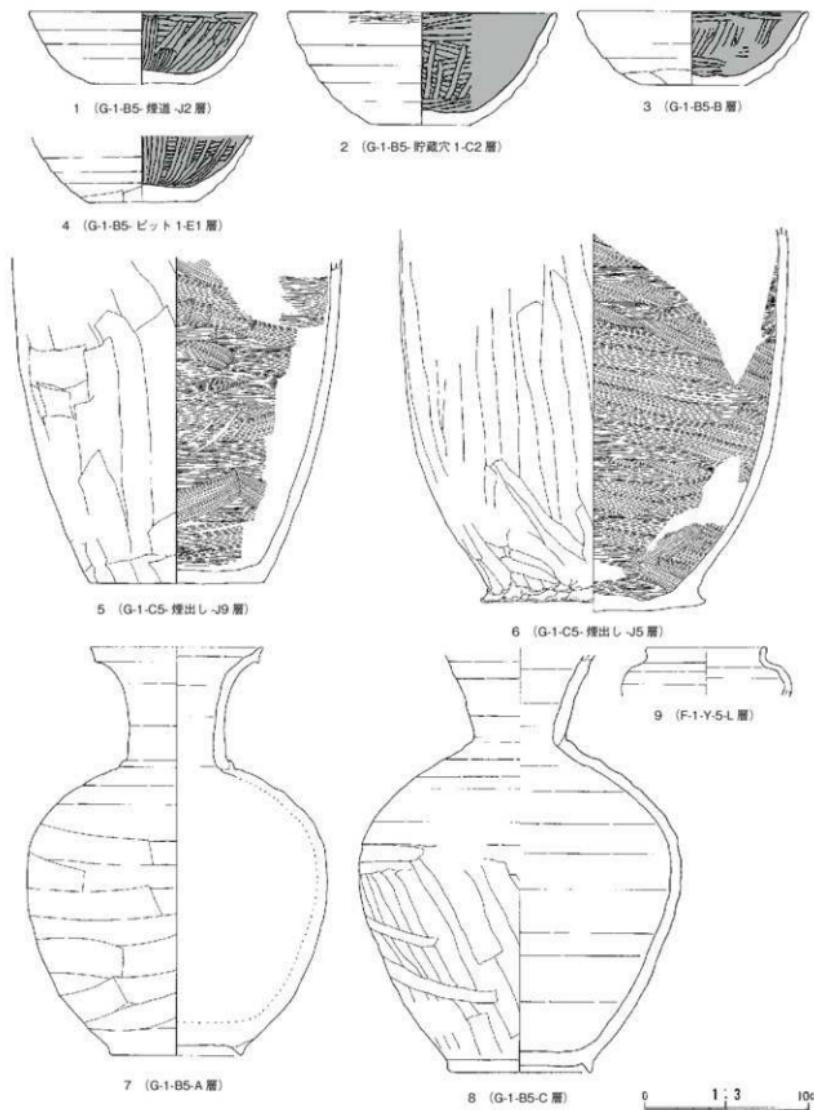
7 (G-1-C8-C層)



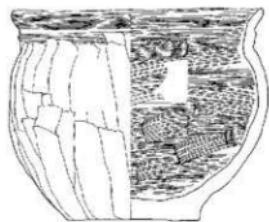
8 (F-1-Y8-ピット3-E2層)

0 1 3 10cm

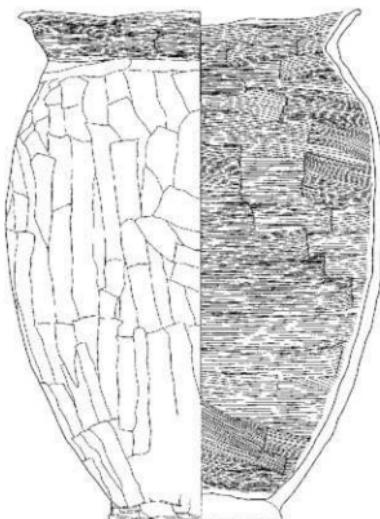
第43図 RA676 堅穴建物跡出土土器



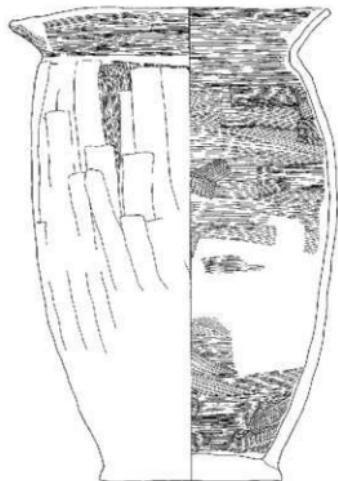
第44図 RA677 堅穴建物跡出土土器



1 (G-1-I7- カマド支脚 1-J 層)



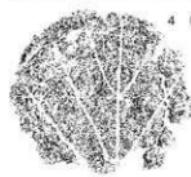
3 (G-1-H7- カマド ~J3 層)



4 (G-1-H7- カマド ~J3 層)

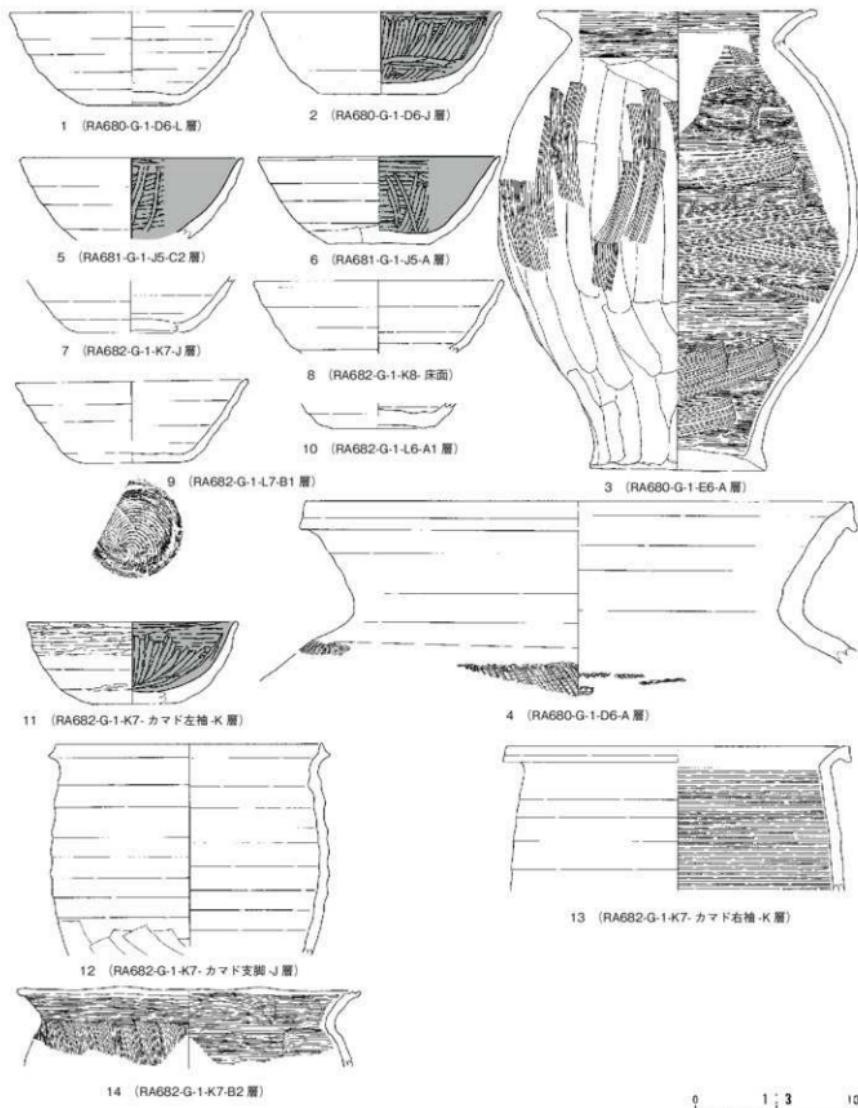


5 (G-1-I7- カマド右袖 -K1 層)

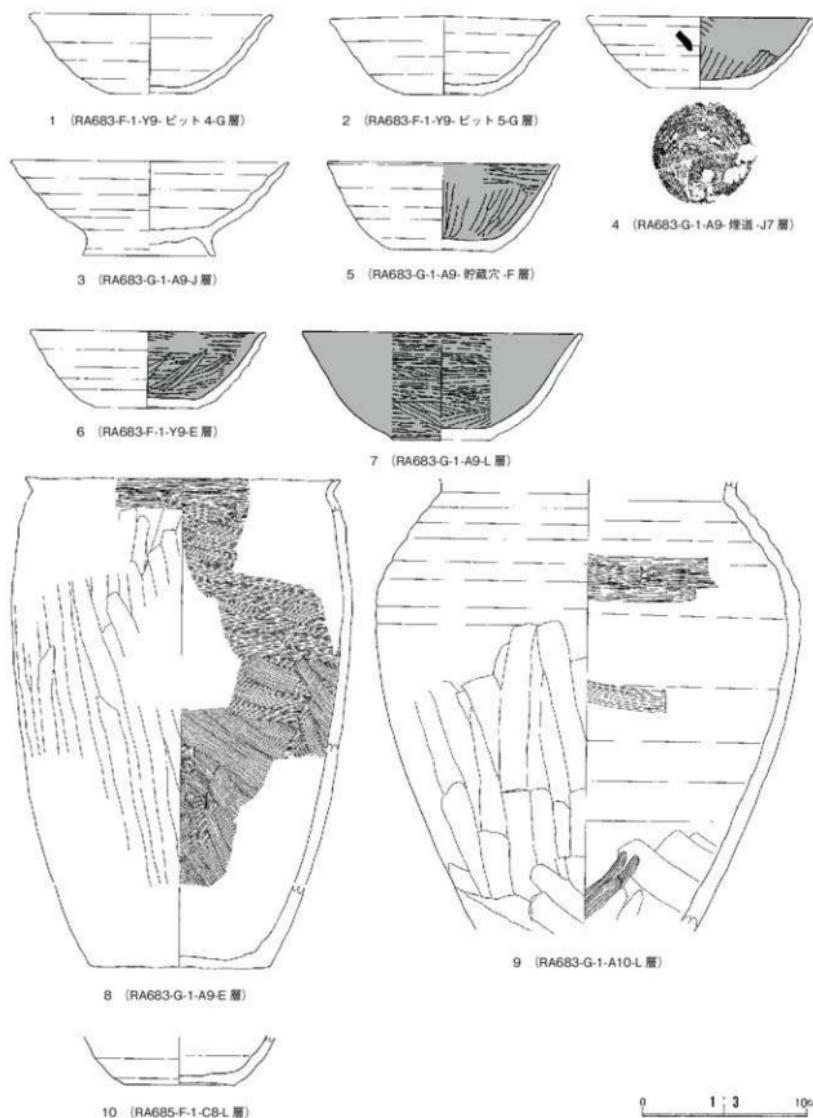


0 1 : 3 10cm

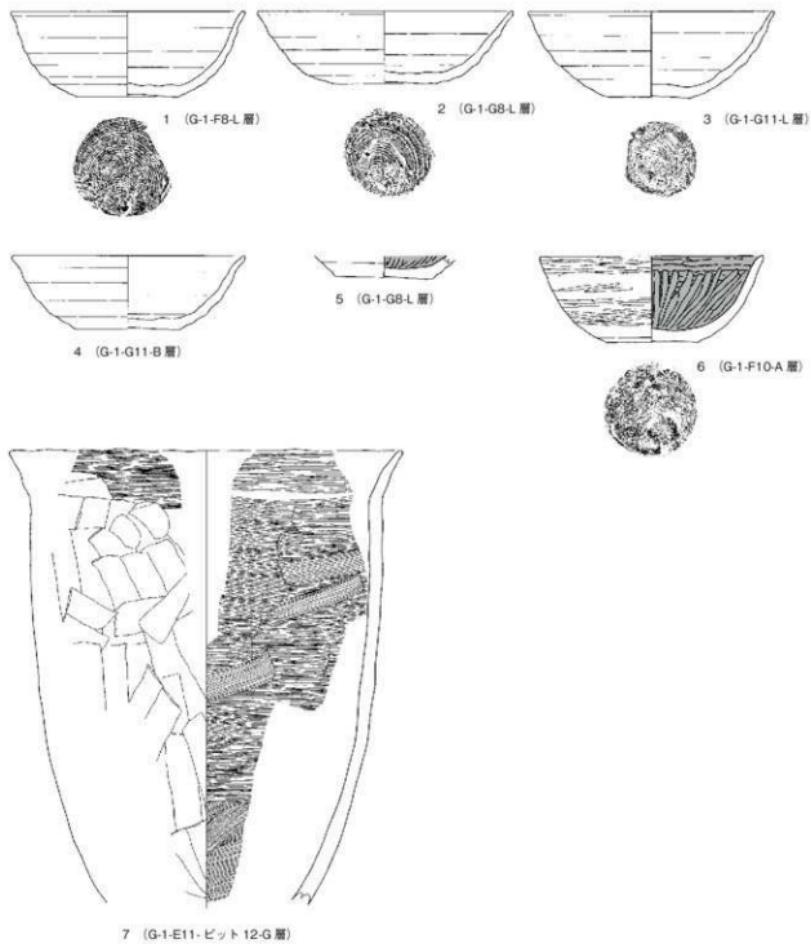
第45図 RA678 堅穴建物跡出土土器



第46図 RA680～682 堅穴建物跡出土土器

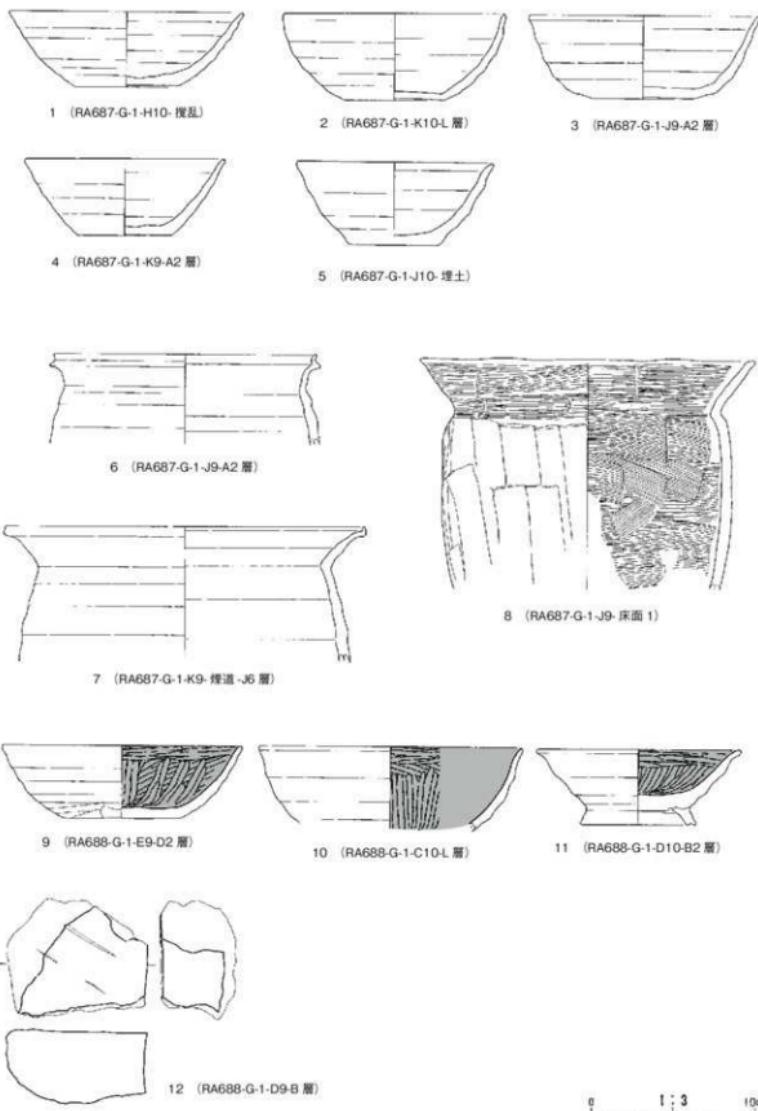


第47図 RA683・685 塗穴建物跡出土土器

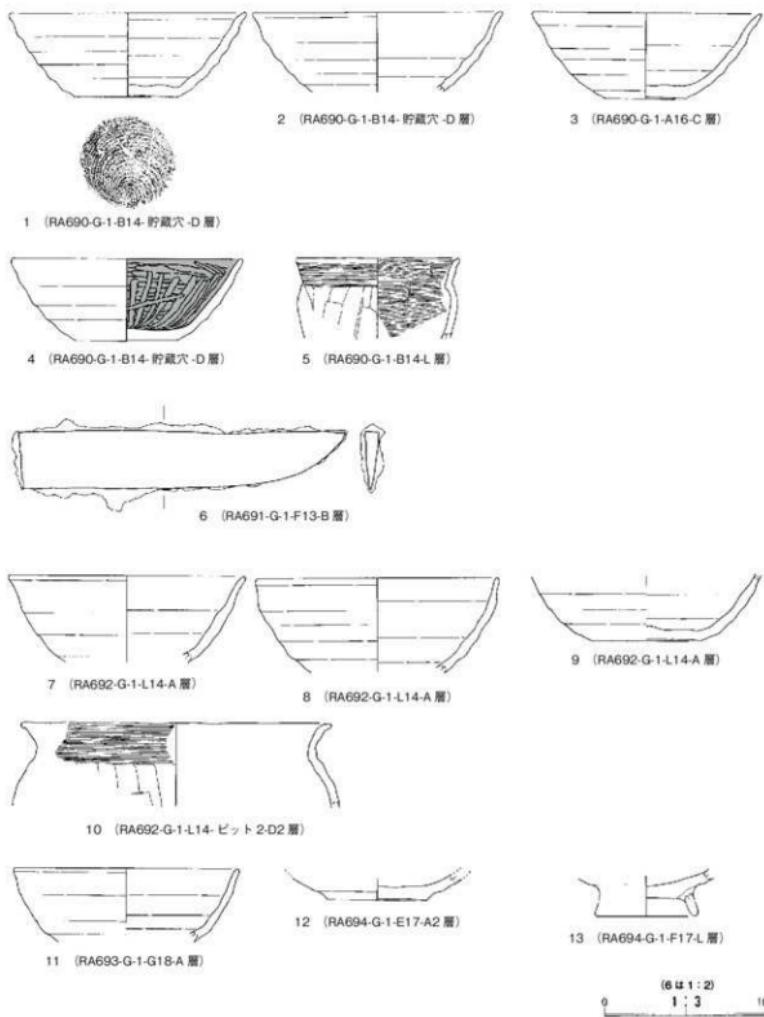


0 1 3 10cm

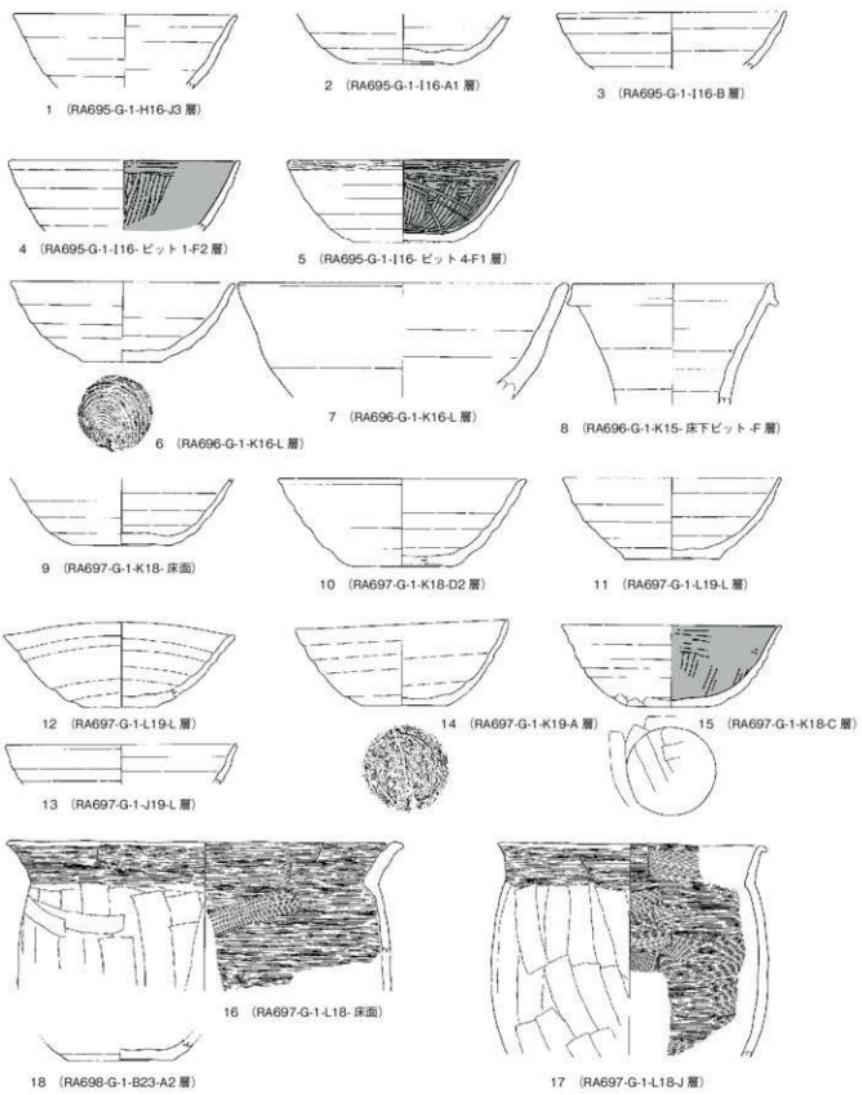
第48図 RA686 堅穴建物跡出土土器



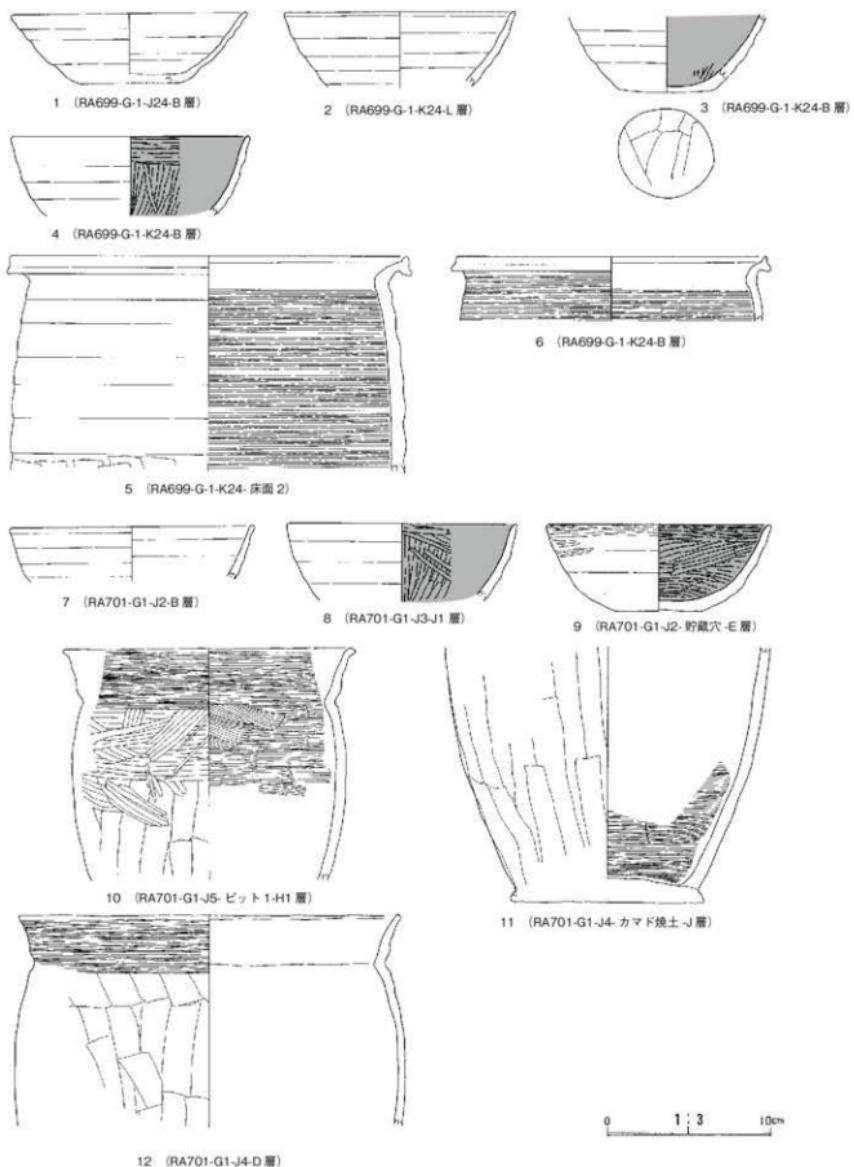
第49図 RA687・688 塗穴建物跡出土遺物



第50図 RA690～694 堅穴建物跡出土遺物

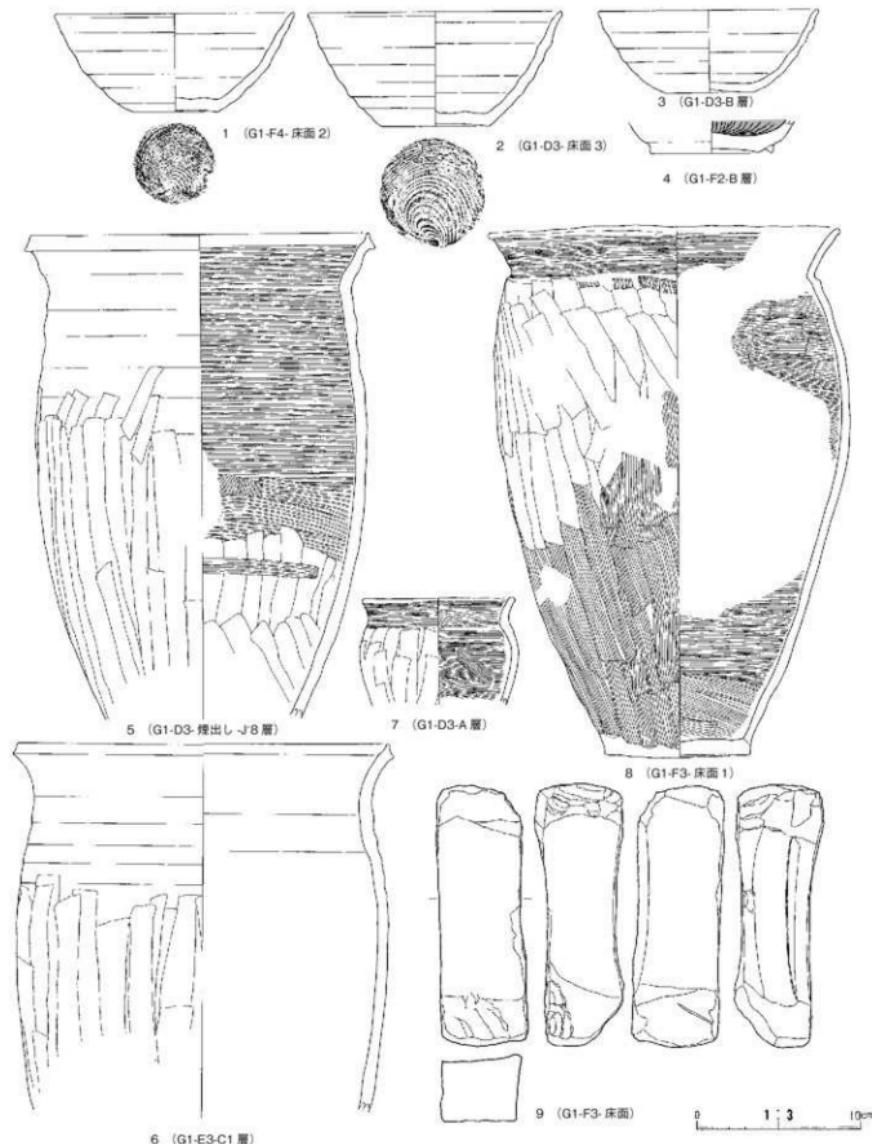


第51図 RA695～698 塗穴建物跡出土土器

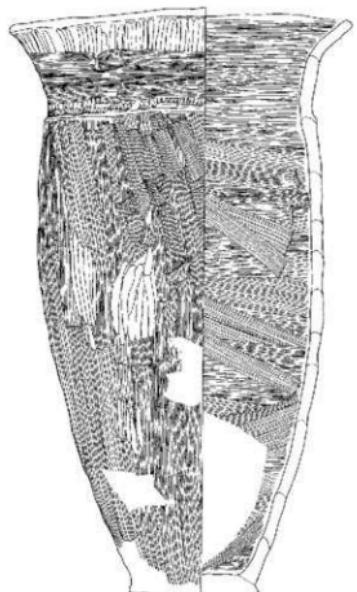


0 1 3 10cm

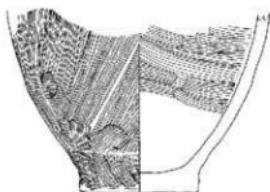
第52図 RA699・701 堅穴建物跡出土土器



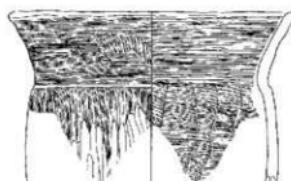
第53図 RA700 堅穴建物跡出土遺物



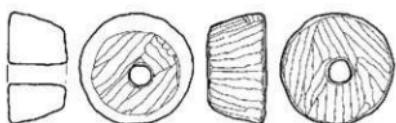
1 (RD2186-F-1-Y6-底面)



2 (RD2187-F-1-WB-D 層)



3 (RD2187-F-1-WC-C 層)



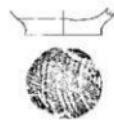
4 (RD2187-F-1-WB-A2 層)



5 (RD2191-G-1-K12-B 層)



6 (RD2212-G1-J4-A2 層)



7 (RG621-G-1-F17-A 層)



8 (F-1-Y10-C 層)

(4・6・8は1:2)
0 1:3 10cm

写 真 図 版



盛南開発地区航空写真（2012年9月撮影）

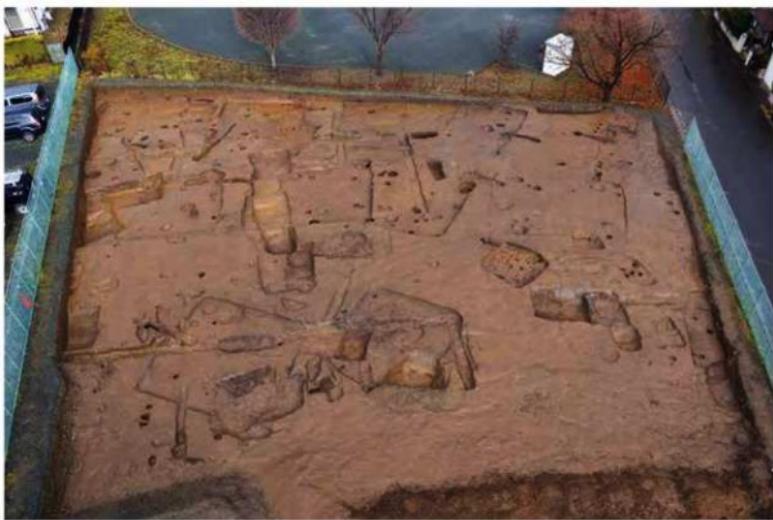
●調査地点

提供 独立行政法人都市再生機構 岩手都市開発事務所

第2図版



第80次調査区南全景（北から）



第80次調査区北全景（南から）



RA671 竪穴建物跡全景（西から）



RA672 竪穴建物跡全景（北東から）



RA673 竪穴建物跡全景（南東から）



RA679 竪穴建物跡全景（東から）



RA674 竪穴建物跡全景（北西から）



RA674 竪穴建物跡 貯藏穴遺物出土状況（西から）



RA675 竪穴建物跡全景（南から）



RA675 竪穴建物跡 柱材検出状況（北西から）

第4図版



RA676 竪穴建物跡全景（南東から）



RA677 竪穴建物跡全景（西から）



RA678 竪穴建物跡全景（北西から）



RA678 竪穴建物跡 カマド全景（南西から）



RA680 竪穴建物跡全景（南から）



RA681 竪穴建物跡全景（南から）



RA682 竪穴建物跡全景（南東から）



RA683 竪穴建物跡全景（南西から）



RA684 竪穴建物跡全景（北東から）



RA685 竪穴建物跡全景（南から）



RA686 竪穴建物跡全景（北西から）



RA687 竪穴建物跡全景（南から）



RA688 竪穴建物跡全景（東から）



RA689 竪穴建物跡全景（北東から）



RA690 竪穴建物跡全景（南東から）



RA691 竪穴建物跡全景（南西から）

第6図版



RA692 竪穴建物跡全景（西から）



RA693 竪穴建物跡全景（東から）



RA694 竪穴建物跡全景（南東から）



RA695 竪穴建物跡全景（東から）



RA696 竪穴建物跡全景（東から）



RA696 竪穴建物跡 床下ビット遺物出土状況（西から）



RA697 竪穴建物跡全景（西から）



RA698 竪穴建物跡全景（東から）



RA699 竪穴建物跡全景 (北から)



RA700 竪穴建物跡 I・II期全景 (北東から)



RA700 竪穴建物跡 II期 カマド全景 (北から)



RA701 竪穴建物跡全景 (北から)



RB142 掘立柱建物跡全景 (南東から)



RD2186 土坑全景 (西から)



RD2187 土坑全景 (北から)



RD2188 土坑全景 (東から)

第8図版



RD2189 土坑全景（南から）



RD2190 土坑全景（南東から）



RD2191 土坑全景（北東から）



RD2192 土坑全景（東から）



RD2193 土坑全景（南西から）



RD2194 土坑全景（東から）



RD2195 土坑全景（南から）



RD2196 土坑全景（南西から）



RD2197 土坑全景（東から）



RD2198 土坑全景（東から）



RD2199 土坑全景（東から）



RD2200 土坑全景（南から）



RD2201 土坑全景（南西から）



RD2202 土坑全景（南西から）



RD2203 土坑全景（東から）



RD2204 土坑全景（南から）

第10図版



RD2205 土坑全景（南東から）



RD2206 土坑全景（北東から）



RD2207 土坑全景（南東から）



RD2208 土坑全景（南東から）



RD2209 土坑全景（南東から）



RD2210 土坑全景（東から）



RD2211 土坑全景（東から）



RD2212 土坑全景（西から）



RG616 溝跡全景 (東から)



RG617 溝跡北全景 (北から)



RG617 溝跡南全景 (北西から)



RG618 溝跡全景 (北から)



RG619 溝跡北全景 (南東から)



RG619 溝跡南全景 (南東から)



RG620 溝跡全景 (南西から)



RG621 溝跡全景 (西から)



RG622 溝跡全景 (東から)



RA671 竪穴建物跡出土土器



RA672 竪穴建物跡出土土器



RA673 竪穴建物跡出土土器



RA679 竪穴建物跡出土土器



RA674 竪穴建物跡出土土器・土製品



RA675 竪穴建物跡出土土器



RA675 竪穴建物跡出土土器器坏 墨書「木」



RA675 竪穴建物跡 ピット2 出土柱材



RA676 竪穴建物跡出土土器



RA676 竪穴建物跡出土土器 器坏 刻書「+」



RA677 竪穴建物跡出土土器



RA678 竪穴建物跡出土土器



RA680 竪穴建物跡出土土器



RA681 竪穴建物跡出土土器



RA682 竪穴建物跡出土土器



RA683 竪穴建物跡出土土器



RA686 竪穴建物跡出土土器



RA687 竖穴建物跡出土土器



RA688 竖穴建物跡出土土器



RA690 竖穴建物跡出土土器



RA691 竖穴建物跡出土小刀



RA692 竖穴建物跡出土土器



RA694 竖穴建物跡出土土器



RA695 竖穴建物跡出土土器



RA696 竪穴建物跡出土土器



RA697 竪穴建物跡出土土器



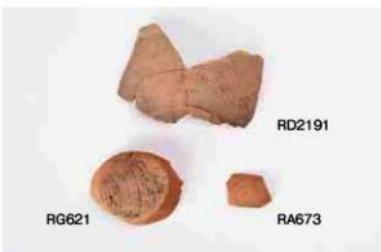
RA699 竪穴建物跡出土土器



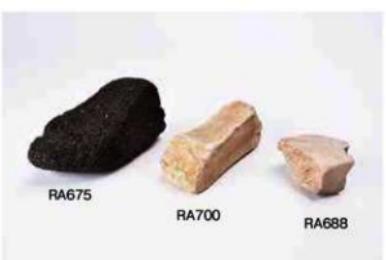
RA700 竪穴建物跡出土土器



RA701 竪穴建物跡出土土器



RA673 竪穴建物跡, RD2191 土坑, RG621 溝跡出土土器



RA675 · 688 · 700 竪穴建物跡出土石



RD2186 土坑出土土器



RD2187 土坑出土土器、土製品



遺構外出土縄文土器



RD2212 土坑出土磁器 染付「別當塚」



調査風景



盛岡市立向中野小学校3年生見学会（平成25年10月23日）

報告書抄録

ふりがな	だいたろういせき							
書名	台太郎遺跡							
副書名	'フローラルアベニュー向中野2丁目'宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ番号								
編著者名	花井正香							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行機関	徳清倉庫株式会社・盛岡市教育委員会							
発行年月日	2015年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 世界測地系	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
だいたろういせき 台太郎遺跡 第80次	いばりけんもりおかし 岩手県盛岡市 向中野二丁目 6番2	03201	LE16-2269	39° 40' 45"	141° 08' 38"	2013.07.22 ~ 2013.12.02	1,155 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
台太郎遺跡	集落	奈良時代 平安時代 古代以降	堅穴建物跡 土坑	4棟 2基	須恵器、あかやき土器、土師器、土製品(紡錘車、ミニチュア土器)、石製品(砥石)、鉄製品(小刀)、磁器、木製品(柱材)	平安時代の堅穴建物跡内から地鎮の可能性のあるピットと埋納された須恵器が出土。堅穴建物跡の柱穴に柱材が残存。		
要約	台太郎遺跡は大規模土地区画整理事業によって、遺跡西部から中央部が調査されており、古代の堅穴建物跡が約700棟確認される、北上川流域で最大規模の集落である。本調査では調査事例の少ない遺跡東部の集落の様相を明らかにすることができた。							

台太郎遺跡

—「フローラルアベニュー向中野2丁目」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

2015年9月30日 発行

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1

電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605

発行 徳清倉庫株式会社 盛岡市教育委員会

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020-0016 岩手県盛岡市名須川町23番地27号

電話 019-625-2323 Fax 019-622-1377